

金沢市

## 畝田西遺跡群Ⅱ

2005

石川県教育委員会  
(財)石川県埋蔵文化財センター

畝田西遺跡群Ⅱ

2005

石川県教育委員会  
(財)石川県埋蔵文化財センター



L3区上空から南西方向をのぞむ



L4区(上から)



L4・L3・L2区 (上から)





L 3区 (上から)



L 2区 (上から)



L1・L7区 (上から)



L1・L7区 (南東から)

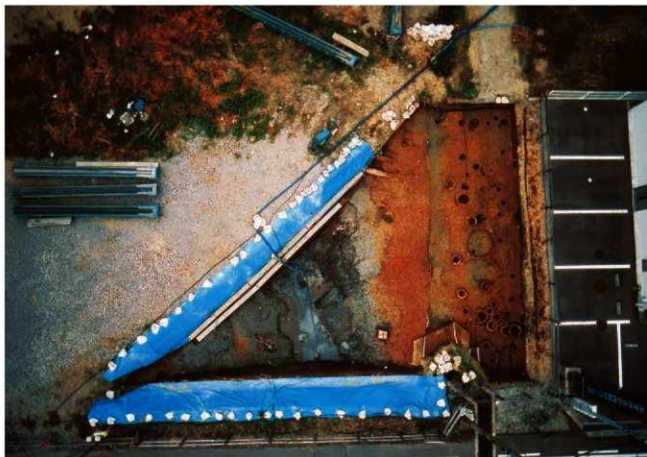


L5区 (上から)





L 6 区 (北から)



L 8 区 (上から)



A 7区 (南東から)



A 5区 (上から)



A 6区 (上から)



A 6区 (西から)

## 例 言

- 1 本書は畝田・寺中遺跡、畝田遺跡及び畝田大徳川遺跡(以下、畝田・寺中遺跡他2遺跡)の発掘調査報告書Ⅱ(6分冊のうち第2分冊)である。
- 2 本書(第2分冊)では南部・東部域の遺構・遺物について報告する。
- 3 遺跡の所在地は金沢市畝田西3丁目地内である。
- 4 調査原因は金沢西部第二土地区画整理事業であり、同事業を所管する県土木部都市計画課(金沢西部開発事務所)が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 5 発掘調査は財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。
- 6 調査に係る費用は県土木部都市計画課(金沢西部開発事務所)が負担した。
- 7 現地調査は平成11(1999)年度～平成15(2003)年度に実施した。面積・期間・担当課・担当者は下表(第1表)のとおりである。

年 度	平成11(1999)	平成12(2000)	平成13(2001)	平成14(2002)	平成15(2003)
期 間	平成11年4月15日 ～ 平成12年1月16日	平成12年4月26日 ～ 平成13年1月11日	平成13年4月11日 ～ 12月20日	平成14年4月19日 ～ 12月20日	平成15年7月7日 ～ 9月3日
面 積	15,600㎡	9,650㎡	11,000㎡	11,150㎡	1,120㎡
担当課	調査部調査第2課	調査部調査第4課	調査部調査第4課	調査部調査第4課	調査部調査第4課
担 当 者	中森 茂明 (調査専門員) 白田 義彦(主事) 和田 龍介(主事) 西田 昌弘(主事)	浜崎 悟司 (調査専門員) 中西 洋司(主事) 河村 美紀(主事) 和田 龍介(主事) 宮川 彩子(嘱託)	岩崎 英雄 (調査専門員) 岡本 恭一 (調査専門員) 浜崎 悟司 (調査専門員) 白田 義彦 (主任主事) 立原 秀明(主事) 菅野美香子(嘱託)	伊藤 雅文(課長) 岡本 恭一 (調査専門員) 浜崎 悟司 (調査専門員) 金山 哲哉(主事) 立原 秀明(主事) 荒木麻理子(主事) 兼田 康彦(主事)	浜崎 悟司 (調査専門員) 渡邊 大輔(主事)

- 8 出土品整理は平成12(2000)年度～平成15(2003)年度に実施し、企画部整理課と調査部調査第4課が担当した。
- 9 出土した木製品の樹種同定・年代測定については(株)パレオ・ラボに委託して行った。
- 10 発掘調査報告書の刊行は第1・2分冊を平成16(2004)年度に実施し、調査部調査第4課が担当した。第3・4・5・6分冊は平成17(2005)年度に刊行する予定である。
- 11 本書の執筆分担は下記のとおりである。編集は浜崎が行った。  
第1章・第2章第1節：伊藤雅文(調査部調査第4課長)  
上記以外：浜崎悟司(調査部調査第4課調査専門員)
- 12 発掘調査には下記の機関、個人の協力を得た。  
県土木部都市計画課、金沢西部開発事務所、金沢市教育委員会、金沢市埋蔵文化財センター、福田弘光、大藤雅男、平川南、四柳嘉章(敬称略、順不同)
- 13 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 14 本書についての凡例は下記のとおりである。
  - (1) 方位は座標北であり、座標は建設省告示の平面直角座標第Ⅱ系に準拠した。
  - (2) 水平基準は海拔高であり、T.P(東京湾平均海面標高)による。
  - (3) 遺構は略号で表記する。主なものはS B(掘立柱建物跡)・S H(竪穴建物跡)・S E(井戸跡)・S D(溝・大溝)・S K(土坑)・S X(落ち込み/不明遺構)・P(穴)等である。調査地区毎に昇順の数字を付しているが、S B(掘立柱建物跡)・S H(竪穴建物跡)については報告に際して、全体での通し番号を付している。
  - (4) 遺物は略号で表記する。主なものはW(木製品)・S(石製品)・E(土製品)・M(金属製品)・U(滑石製白玉)・J(石製玉)・D(土製玉)・F(墨書土器)等である。通有の土器類については番号表記のみで示している。



## 目 次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第2章 調査の経緯と経過	7
第1節 調査に至る経緯	7
第2節 調査の経過	7
第3章 調査の結果	9
第1節 調査結果の概要	9
第2節 L地区の調査	9
第3節 A5・6・7区・P区の調査	38
第4節 Z地区の調査	49
第4章 小 結	103

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	1	第46図	土器実測図 (L1区の4)	59
第2図	金沢周辺の地形区分	2	第47図	土器実測図 (L2区の1)	60
第3図	古代遺跡分布図	5	第48図	土器実測図 (L2区の2)	61
第4図	調査区位置図	7	第49図	土器実測図 (L2区の3)	62
第5図	調査区と主な担当職員	8	第50図	土器実測図 (L2区の4)	63
第6図	L4区遺構図	9	第51図	土器実測図 (L2区の5)	64
第7図	L3区遺構図1	11	第52図	土器実測図 (L3区)	65
第8図	L3区遺構図2	12	第53図	土器実測図 (L5区)	66
第9図	L3区遺構図3	13	第54図	土器実測図 (L6区)	67
第10図	L3区遺構図4	14	第55図	土器実測図 (L7区)	68
第11図	L2区遺構図1	17	第56図	土器実測図 (L8区の1)	69
第12図	L2区遺構図2	18	第57図	土器実測図 (L8区の2)	70
第13図	L2区遺構図3	19	第58図	土器実測図 (L8区の3)	71
第14図	L2区遺構図4	20	第59図	土器実測図 (L8区の4)	72
第15図	L1区遺構図1	22	第60図	土器実測図 (L8区の5)	73
第16図	L1区遺構図2	23	第61図	土器実測図 (A5区)	74
第17図	L1区遺構図3	24	第62図	土器実測図 (A6区)	74
第18図	L1区遺構図4	25	第63図	土器実測図 (A7区)	75
第19図	L7区遺構図	29	第64図	土器実測図 (Z区)	75
第20図	L5区遺構図	30	第65図	墨書土器実測図1	80
第21図	L6区遺構図1	32	第66図	墨書土器実測図2	81
第22図	L6区遺構図2	33	第67図	木製品実測図1	82
第23図	L6区遺構図3	34	第68図	木製品実測図2	83
第24図	L8区遺構図1	36	第69図	木製品実測図3	84
第25図	L8区遺構図2	37	第70図	木製品実測図4	85
第26図	A7区遺構図1	39	第71図	木製品実測図5	86
第27図	A7区遺構図2	40	第72図	木製品実測図6	87
第28図	A5区遺構図	41	第73図	木製品実測図7	88
第29図	P区遺構図	43	第74図	木製品実測図8	89
第30図	A6区遺構図1	44	第75図	木製品実測図9	90
第31図	A6区遺構図2	45	第76図	木製品実測図10	91
第32図	Z区遺構図	45	第77図	木製品実測図11	92
第33図	建物跡遺構図1	46	第78図	木製品実測図12	93
第34図	建物跡遺構図2	47	第79図	石製品実測図1	94
第35図	建物跡遺構図3	48	第80図	石製品実測図2	95
第36図	建物跡遺構図4	49	第81図	製塩土器実測図	96
第37図	建物跡遺構図5	50	第82図	土製品実測図1	96
第38図	建物跡遺構図6	51	第83図	土製品実測図2	96
第39図	建物跡遺構図7	52	第84図	縄文土器実測図	97
第40図	建物跡遺構図8	53	第85図	土製品実測図3	97
第41図	建物跡遺構図9	54	第86図	玉類実測図1	98
第42図	建物跡遺構図10	55	第87図	玉類実測図2 (滑石製白玉)	99
第43図	土器実測図 (L1区の1)	56	第88図	玉類実測図3 (滑石製白玉他)	100
第44図	土器実測図 (L1区の2)	57	第89図	滑石製品実測図	100
第45図	土器実測図 (L1区の3)	58	第90図	金属製品実測図	100

## 表目次

第1表 現地調査体制 .....	i	第8表 石製品一覽 .....	95
第2表 遺跡地名表 .....	6	第9表 土製品一覽 .....	95
第3表 竪穴系建物一覽 .....	51	第10表 金属製品一覽 .....	96
第4表 掘立柱建物一覽 .....	51	第11表 玉類一覽 .....	97
第5表 土器一覽 .....	58・59・66・68・73~79	第12表 白玉一覽 .....	101・102
第6表 墨書土器一覽 .....	79	第13表 滑石製品一覽 .....	102
第7表 木製品一覽 .....	89・91・92・95		

## 図版目次

図版1 遺跡 (L1区)	図版26 遺物 (土器)
図版2 遺跡 (L1区)	図版27 遺物 (土器)
図版3 遺跡 (L1区)	図版28 遺物 (土器)
図版4 遺跡 (L1区)	図版29 遺物 (土器)
図版5 遺跡 (L2区)	図版30 遺物 (土器)
図版6 遺跡 (L2区)	図版31 遺物 (土器)
図版7 遺跡 (L2区・L3区)	図版32 遺物 (土器)
図版8 遺跡 (L3区)	図版33 遺物 (土器)
図版9 遺跡 (L3区)	図版34 遺物 (土器)
図版10 遺跡 (L3区)	図版35 遺物 (土器)
図版11 遺跡 (L3区・L4区・L5区)	図版36 遺物 (土器)
図版12 遺跡 (L5区)	図版37 遺物 (土器)
図版13 遺跡 (L6区)	図版38 遺物 (土器)
図版14 遺跡 (L6区・L7区)	図版39 遺物 (墨書土器)
図版15 遺跡 (L7区・A5区)	図版40 遺物 (土製品・金属製品)
図版16 遺跡 (A5区)	図版41 遺物 (滑石製品・石製品)
図版17 遺跡 (A6区・P区)	図版42 遺物 (玉類)
図版18 遺跡 (A7区)	図版43 遺物 (木製品)
図版19 遺跡 (A7区・L4区)	図版44 遺物 (木製品)
図版20 遺跡 (Z区・L8区)	図版45 遺物 (木製品)
図版21 遺跡 (L8区)	図版46 遺物 (木製品)
図版22 遺跡 (各地区建物跡)	図版47 遺物 (木製品)
図版23 遺跡 (各地区建物跡)	図版48 遺物 (木製品)
図版24 遺物 (土器)	図版49 遺物 (木製品)
図版25 遺物 (土器)	

# 第1章 遺跡の位置と環境

## 第1節 地理的環境

石川県は本州島日本海側のほぼ中央に位置し、能登半島が北に突き出る地理的な形状を呈している。台湾から北上して黄海へそして東へと流れる対馬海流が能登半島にぶつかるとして日本海の出口である千島海峡へと続くが、北からはリマン海流が流れ込む。それゆえ、海盆地形の日本海に暖流である対馬海流と寒流のリマン海流が交錯し、豊かな漁場となっている。海流の関係で朝鮮半島や山陰九州のみならず中国語やハングル文字のある日常生活の廃棄物が漂流してたくさん流れ着く。

南北に細長い石川県は、北部の能登半島では岩場が発達しているが、南側では砂丘が発達している。これは、能登半島では大きな河川が発達しないのに対し、福井県では九頭竜川、加賀では手取川や犀川という大河川があるために、砂丘の砂を供給する土砂の流出が顕著であることによる。この砂丘の発達は、古気候の変動と大きく絡む。白山市(旧松任市)倉部の海岸沖2kmに約6000年前の松の樹根が発見されている。少なくとも当時の海岸線は現在よりも沖にあり、やや冷涼な気候のために海水面が低下していたのであろうか。



第1図 遺跡位置図

畷田西遺跡群は、石川県金沢市の西部に位置し、海岸砂丘から約2.5km内陸に位置する。海岸には最大幅1kmの砂丘があり、南には手取川が作り出した手取扇状地が広がり、医王山系から流れ出す河川によって作り出された平野部がその間に位置する。河川のうち浅野川や金腐川、森下川、あるいは砺波丘陵から南に流れる横山川や津幡川などが集まって大きな潟湖「河北潟」を作り出す。河北潟からあふれる水が南下して大野川となって日本海に注ぐ。

河北潟は汽水性の魚類(ボラなど)や貝類(ヤマトシジミ)が生息し、調査地を流れる大徳川にもボラの魚影を認めることができる。しかし、海との接続が非常に狭いことから、淡水性の動物が顕著で河北潟を媒体にして遊漁するコイやフナが数多く生息するほか、水田用水にはメダカやタナゴなどが多く見られたが、近年の土地区画整理による大規模開発によってその生息の場が失われている。

大野川は砂丘の低いところに流れることとなるために、季節風などによって砂丘が変化することで、河口の位置が変わってくる。そのために、砂丘の後背が氾濫原となって湿地が河北潟にかけて広範囲に広がっている。この地域は、地下水の自噴地帯でもあり、江戸時代にはクリークが発達していたが、大正年間の耕地整理によってほとんどが埋め立てられてその面影を残すところはない。とくに、近世以降の新しい開発がこの地に及んだためにこのようなクリークの風景が見られるようになったのであろうが、それでも古代以来、後背湿地が水田可能な地として生活の場を提供している。

第2図に示したのは、手取扇状地から河北潟にかかる地形を、最新の国土地理院の地形図(縮尺1/25,000)「粟崎」「金沢」「松任」「金石」をもとに等高線を抽出したものである。地形図に示された等高線は、標高40m以下では2.5m間隔で示されており、これまでにない微地形を観察することができる。特に、標高10m以下の低地では地形の変化を知るのに重要な情報を得ることができる。

手取川が白山麓の狭隘な山間から平野に出る鶴来町を扇頂として典型的な扇状地を形成している。手取川は、古くは北に流れを向けていたのが次第に南に流れを変えて現在の位置におさまっているという。

手取扇状地は、現在の川北町、白山市（旧松任市）および野々市町の区域に当たり、扇状地ゆえに保水性に乏しく古代になるまで開発が低調であった。

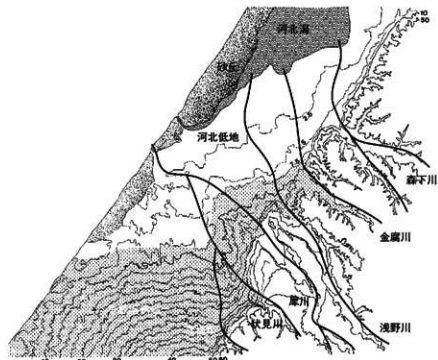
手取扇状地と砂丘との関係はよくわからないが、扇状地の上に砂丘が置かれているものと想定される。しかし、現在の倉部から東相川にかけて標高2.5mの等高線が内側に入り込み、窪地のような状況を示すことから、扇状地末端には砂丘との関わりで複雑な地形を呈する部分があったので

であろう。もちろん砂丘は生き物である。時代とともにその大きさが変化し、位置も変わることは、金沢市普正寺遺跡が砂丘下から発見されたことからよくわかる。

微地形を良く見ると、犀川の現在の流れが、地形的に高いところのほぼ中央を流れており、あたかも小さな扇状地のように高まりがのびている。これは卯辰丘陵から小立野台地、野田山山麓かかる丘陵が河北低地部まで及び、それを犀川と浅野川が分断している状況である。地理学のほうでは犀川の扇状地を認めていないが、犀川の現在の流れが扇形に広がる地形の最も高い部分を流れていることから、沖積作用による土砂の堆積も少なからず認め、小さな扇状地形と理解できないだろうか。

そして、浅野川は丘陵の北端に流れており、手取扇状地形との境に高橋川と伏見川が流れていることがわかる。高橋川と伏見川の合流地点は、まさに手取扇状地扇端と小立野台地の丘陵との接点にあたる。犀川は暴れ川として有名なのは、これら二つの川の流れの間に位置する丘陵じょうを流れるためである。現在は伏見川と合流しているものの、合流せずに北に流れていた可能性もある。

それは、開削時期のよくわからない大野庄用水や鞍月用水が犀川の支流を整備したものの可能性が高く、大徳川もまた犀川から分流して北に流れるのもそうだろう。標高2.5mの等高線を見ると、犀川伏見川合流地点北東に浅い谷地形があり、ここに犀川本流が流れていた時期も想定できるのである。したがって、犀川と大野川が合流していてもなんら不思議はないのである。



第2図 金沢周辺の地形区分 (S=1/200,000)

## 第2節 歴史的環境

畝田西遺跡群の位置する地域は、前節で見たように砂丘の後背湿地に位置し、しかも潟湖にも通じることができる小河川が発達するという特色がある。このような地理的な特色がこの地域の歴史的特質に大きな影響を与えている。

縄文時代の遺跡は非常に少ない。これは、この地域が砂丘の後背湿地であったこととともに弥生時代の遺構が立地する地山の形成時期とも絡んでいる。藤江C遺跡では縄文時代後期後葉の建物4棟を

確認している。遺構の状況から東西20m、南北20mの約400m程度の広がりを持つ集落で、建物配置から、同時存在は2棟である。石冠などの呪具や石製垂飾が出土しているものの面積あたりの出土量が金沢市新保本チカモリ遺跡や米泉遺跡に比べて少ないこと、打製石斧や磨製石斧が一定量出土し、1家族程度の小さなグループが集落を形成していると考えられる。花粉分析では、周囲にはササ類やイネ科やイヌビエ、エノコログサ属が生えていたと推測している。畝田・寺中遺跡でも縄文後期後半の遺物が出土し、このころに人間の足跡を残せるような環境になったと考えられる。それは、それまで低温なために不安定な地盤であったこの地が、縄文時代の後期後半にいたって安定し、新たな生業の場が縄文人によって切り開かれたのである。生業の可能性として縄文農耕がある。近岡遺跡でイネの花粉が検出されたのは周知の事実だが、その受け入れには研究者ごとの違いがある。一般的には否定的な見解が多いが、九州の縄文農耕が後期までさかのぼっていることや、この地域における縄文集落の低地への進出傾向をしめす特異性をどのように理解していくか今後の課題である<sup>(1)</sup>。

縄文時代晩期から弥生時代前期の検出された遺構は非常に少ない。この時期の遺物は、弥生時代のベースとなる地層から出土するが、明確な遺構面として認識できない。むしろ、旧河道の肩に食いこむように遺物が出土し、遺構埋土がベースとよく似ているが炭粒を多く含むなどの土壌化が進んでおり、縄文後期とそれほど異ならない環境であったと推測でき、大きな集落を作ることができると広い土地の確保が難しいのである。この中において、この地域よりもやや山側にある西念・南新保遺跡が中期後半に集落形成を始め、この地域の中心的な弥生ムラに成長する。

周辺でもほぼ同時期に遺跡数が増え、西念・南新保遺跡との脈絡を持った遺跡であろう。よく見ると、西念・南新保遺跡に通じる水系に属する遺跡（磯辺運動場遺跡、南新保C遺跡、戸水C遺跡など）とそれより西に位置する大野庄用水・大徳川の水系（藤江B遺跡、藤江C遺跡、戸水B遺跡、畝田・寺中遺跡、畝田遺跡など）に分けられる。もちろん前者の遺跡のまともは、西念・南新保遺跡を拠点集落として衛星的な小集落が分散する状況である。南新保C遺跡出土の有鈎銅劍は拠点集落に搬入された希少な器物が周囲の集落に分配されたものであろう。この地域における弥生社会の分節化は、西から凹線文系土器を作る社会の技術や風習および器物を受け入れたためにおこった。換言すれば、新たな弥生社会の波及を全面に受け止めて地域であり、河北潟という媒体をネットワークにした地域社会を構築したのである。おそらく、西念・南新保遺跡の果たした役割は、このネットワークの管理であり、能登や越中への分岐点としての結節点の構築である。

このような地域社会に変化が生じるのは、弥生終末期に入って西念・南新保遺跡がほぼ拠点集落の役割を終えている。しかしながら、前代に作られたネットワークは維持されたに違いない。それは、弥生終末期の津幡町七野墳墓群やセツ塚墳墓群、古墳初頭の宇気塚越古墳群や神谷内古墳群が、金沢から越中や能登に抜けるルート上にあること、そして七野墳墓群で北部九州で出土例のある素環頭刀子を出土し、宇気塚越1号墳で鑿頭鉄鏃を副葬し、神谷内C12号墳で漢鏡を副葬するなど、特徴的な遺物が出土していること、これらのことから河北潟ネットワークが維持されていたことが推測できる。しかしながら、その維持・管理には大きな権力機構が存在したのではなく、小集団が互いに良好な関係を維持することによって成り立つのもであり、いわば互酬的な作用といえよう。

このような体制は古墳時代を通じて維持されるが6世紀代で大きく変化する。すなわち、より大きな政治体制の出現が予想されるのである。この地域の具体的な集落遺跡の動態は、はっきりと把握されているわけではないが、古墳前期後半以降は、藤江C遺跡とともに畝田・寺中遺跡でしか集落が認められていないのであり、それまでおおく営まれていた集落が姿を消すようである。さらに、金沢市沖町遺跡で方形区画を持つ建物群が存在し首長居館の可能性が考えられていることや、畝田・寺中遺

跡で手捏土器や玉類、木製祭祀具を廃棄した遺構が幾つか見つかかり、それまでの集落内祭祀とは異なる状況がうかがえる。このことより、弥生時代後期以来の比較的均質な地域社会であったのが、より大きな集団に成長していく過程と理解できよう。そして、推定長70mを越す古原親王塚古墳に注目しなければならない。正確な時期はわからないが、6世紀中ごろ以降と考えている。

金石本町遺跡は6世紀末ごろより建物群を機能させていく。本遺跡は、現在の犀川河口近くに位置して近隣に式内社である大野湊神社を擁し、港湾にかかわる機能があったものと推測できる。特徴的なのは、大型建物が多数存在しながら、建物主軸が北を指向することなく地形に左右されるように位置していることである。このことから、在地勢力のものといえるかどうか慎重に判断されなければならないが、いわゆる古代官衙的な建物配置ではない。

7世紀以降また集落の動態が活発になってくる。それとともに金沢の丘陵部である森本から金沢城付近にかけてもまた遺跡数が増えてくる。観法寺町では須恵器窯とともに瓦も製作し、広坂遺跡に製品を搬入している。特に広坂遺跡は7世紀第3四半期の寺院跡と考えられているが残念ながらそれを証明する遺構は皆無であるので、寺院跡を前提にして考察するのは不適當である。このような動きは北加賀を中心に大きな政治体制が確立し、文献記事に見られる古代豪族の一端を垣間見ることができているのである。現在のように犀川が伏見川と合流しているとなると、金石本町遺跡の存在はネットワークが河北潟のみならず手取扇状地にかかる地域まで広がっていることを示す。手取扇状地の開発が、このような動きの中で理解できるとすれば、集落数の増大現象の理解が容易になろう。つまり、北加賀の古代豪族は地域ネットワークを掌握して基盤を作ったのである。小矢部や高岡、氷見と同じような構造の横穴墓が多数作られ、その動態は北加賀と軌を一にするようであり古代砺波郡の活動には北加賀ネットワークを基盤としておりと考えられる<sup>(2)</sup>。

このような豪族は浅香山木の研究によって道君であることが通説となっているが、その消長については問題が多い。特にその活動を古墳時代中期までさかのぼらせ「原ミチ氏」という存在を考え、その名の由来を白山信仰の禪定道に求める点などである。ここでは深く論及しないが、北陸の流通に深くかわる氏族としての存在が大きいと考える。

さて、古代北陸道が平成15年度に行われた野々市町三日市A遺跡の発掘調査で検出され、そのルート論争にほぼ決着がつけられた。それは、現在の美川町比叡から海岸沿いのルートで白山市（旧松任市）石立まではほぼ定説となっていたが、その先が海岸ルートで大野川河口にくるのかそれとも野々市の内陸にルートがくるかである。海岸ルートは、戸水C遺跡などの古代港湾遺跡を重要視した見解だが、内陸ルートであったことは、物流における港湾施設が古代交通網の中で明確な制度的位置づけがなされていないことを示すのであろうか。

古代北陸道は、石立から三日市A遺跡を通りそこからまっすぐに延長させると、手取扇状地と野田山丘陵との境にあたる谷部に突き当たる。道の変換点が地形の変換点に当たるのである。そしてそのルート上に、末松廃寺という古代の拠点的な場所を通っていないが、一方広坂遺跡はそのルート上に乗るという違いをどのように解釈すればよいのであろうか。これはやはり古代の施設としての重要性の違いである。広坂遺跡は地域支配の政治的な拠点であり、古代氏族の拠点である。一方、末松廃寺は、7世紀以降の新興勢力の宗教施設にすぎないのである<sup>(2)</sup>。

さらに、渤海使の来着が重要である。渤海使は加賀国に安置され、その一部が都に上るが多数の人々は安置場所に滞在となる。この地域の平安時代の集落遺跡の多くが9世紀台から10世紀のものであるのは、この動向と無関係ではあるまい。渤海国の人々の生活基盤を加賀の人々は背負っており、そのための新たな経済活動が生まれたものであろう。もちろん、それまでのこの地域における流通と

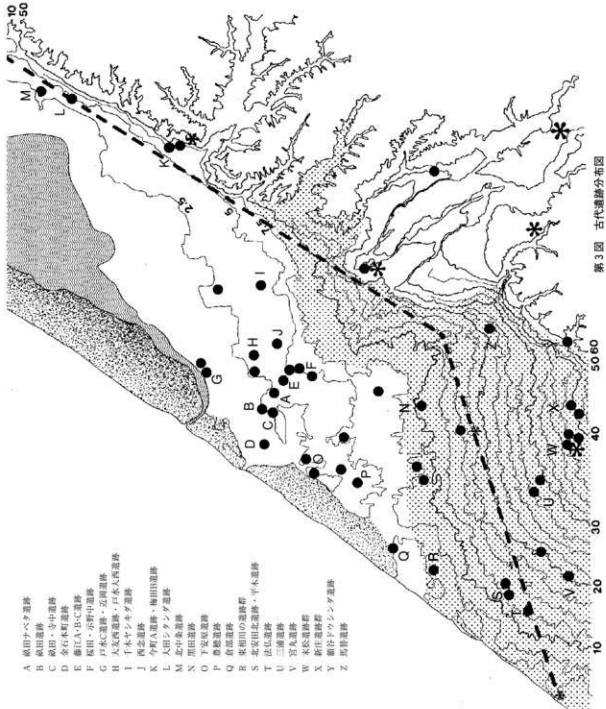


いうネットワークの枠組みが重要な要素であり、それゆえ柔軟に社会を対応させたものであろう。

以上、簡単に周辺社会の変遷を見てきた。弥生時代から古墳時代への変化に十分対応できなかった地域であったが、古墳時代後期・終末期になって古代氏族の統括によってリードされた。その領域はよくわからないが、古墳数の絶対的な少なさからすれば大きな氏族構成は見込めず、むしろ小さな中小豪族であろう。ただし、流通を掌握することによる経済基盤には注目しなければならない。

註 1. 伊藤雅文2004「石川県における縄文後晩期集落の特性」『石川県埋蔵文化財情報誌』12号

2. 伊藤雅文2004「古代への胎動」『金沢市史通史編』1



遺跡名	主な時代	参考文献
無量寺金沢港遺跡	縄文～古墳	
戸水C遺跡、戸水C古墳群	弥生・古墳・古代	県立埋文センター 1986「金沢市戸水C遺跡」 県立埋文センター1993「石川県金沢市戸水C遺跡」 (財)県埋文センター2000「戸水C遺跡・戸水C古墳群(第9・10次)」 (財)県埋文センター2003「戸水C遺跡・戸水C古墳群(第11・12次)」
近岡遺跡	弥生・古代	県立埋文センター1995「金沢市近岡遺跡」 金沢市埋文センター1998「近岡遺跡」 (財)県埋文センター 2004「近岡遺跡」
桂遺跡	弥生・古墳・中世	県立埋文センター1985「金沢市桂遺跡」「県立埋文センター年報」5 金沢市教委1982「金沢市無量寺B遺跡」 金沢市教委1984「郡谷ドウシツダ遺跡・無量寺B遺跡」II 金沢市教委1986「金沢市無量寺B遺跡」III・IV 金沢市教委1983「金沢市無量寺遺跡」
無量寺B遺跡	古墳	石川考古学研究会1970「善正寺」 県立埋文センター1984「善正寺遺跡」 金沢市教委1996「金石本町遺跡」I 金沢市教委1996「金石本町遺跡」II 金沢市教委1996「金石本町遺跡」III 県立埋文センター1997「金石本町遺跡」
無量寺遺跡	古墳・中世	金沢市教委1977「金沢市寺中遺跡一第II・III・IV次調査報告書一」 県立埋文センター1991「金沢市寺中B遺跡」 金沢市教委1991「金沢市寺中B遺跡」I 金沢市教委1991「金沢市寺中B遺跡」II 金沢市教委1992「金沢市寺中B遺跡」III 金沢市教委1984「金沢市鮎田・寺中遺跡」
善正寺遺跡	室町	県立埋文センター1991「鮎田遺跡」 金沢市2003「鮎田大徳川遺跡」 金沢市2004「鮎田・寺中遺跡」 (財)県埋文センター2004「鮎田B遺跡・鮎田C遺跡・無量寺C遺跡」 (財)県埋文センター2003「鮎田・無量寺遺跡・鮎田B遺跡」 金沢市2004「鮎田B遺跡・鮎田C遺跡」
金石本町遺跡	古墳・奈良・平安	県立埋文センター2004「鮎田B遺跡・鮎田C遺跡・無量寺C遺跡」 金沢市2004「鮎田B遺跡・鮎田C遺跡」 金沢市2004「鮎田B遺跡・鮎田C遺跡」 金沢市2004「鮎田B遺跡・鮎田C遺跡」 金沢市教委1983「金沢市鮎田・無量寺遺跡」 (財)県埋文センター2003「鮎田・無量寺遺跡・鮎田B遺跡」 金沢市教委1986「金沢市鮎田ナベタ遺跡」
寺中遺跡、寺中B遺跡	縄文・弥生・奈良・平安	金沢市教委2000「戸水大西遺跡」I 金沢市教委2001「戸水大西遺跡」II 金沢市教委1999「戸水ホコダ遺跡」 金沢市2001「大友西遺跡」I 金沢市2001「大友西遺跡」II 金沢市2003「大友西遺跡」III 金沢市教委1992「金沢市善光寺養魚場遺跡」 (財)県埋文センター2004「石川県埋文文化財情報」12号 金沢市教委1991「金沢市佐奇森遺跡」 金沢市教委1994「金沢市佐奇森遺跡」II 県教委197「金沢市戸水B遺跡調査報告」 県立埋文センター1992「金沢市戸水B遺跡一第4・5次調査一」 県立埋文センター1994「金沢市戸水B遺跡」 (財)県埋文センター2002「戸水B遺跡」 県立埋文センター1997「金沢市藤江C遺跡」II (財)県埋文センター2000「藤江C遺跡」III (財)県埋文センター2000「藤江C遺跡」VI (財)県埋文センター2001「藤江C遺跡」I (財)県埋文センター2002「藤江C遺跡」IV・V (財)県埋文センター2002「藤江C遺跡」VII
鮎田・寺中遺跡 鮎田遺跡 鮎田大徳川遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・室町	金沢市教委1991「鮎田・寺中遺跡」 県教委1970「金沢市藤江B遺跡」 金沢市教委1994「金沢市藤江B遺跡(第2次)」 (財)県埋文センター2001「藤江B遺跡」I (財)県埋文センター2001「藤江B遺跡」II (財)県埋文センター2001「藤江B遺跡」III (財)県埋文センター2002「藤江B遺跡」IV
鮎田B遺跡	弥生・平安	
鮎田C遺跡	弥生・平安	
鮎田・無量寺遺跡	弥生・古代	
鮎田ナベタ遺跡	古代	
戸水大西遺跡	弥生・古墳・古代	
戸水ホコダ遺跡	弥生・古墳	
大友西遺跡	弥生・古墳・古代	
善光寺養魚場遺跡	弥生・古代	
佐奇森遺跡	弥生・古代	
戸水B遺跡	弥生	
藤江C遺跡	縄文・弥生・古墳・平安	
稲田・示野中遺跡	弥生・古代	
藤江B遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	
藤江A遺跡	古代	

第2表 遺跡地名表

## 第2章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

金沢西部第2土地区画整理事業にかかる発掘調査の経緯は、「畝田・無量寺遺跡、畝田B遺跡」で詳述したので略述する。遺跡の有無の確認調査は平成9・10年度にわたって行われ、一部の未了地を残して遺跡の範囲をほぼ確定した。発掘調査は平成11年度から行った。開発事業が平成17年度完了のため、発掘調査報告書の完了から逆算して、年間3万㎡前後の調査を行うという工程であった。

### 第2節 調査の経過

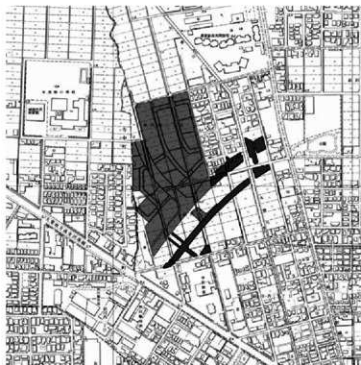
平成11年度には都市計画道路福久福増線の海側車線部分（A1～A4区、H1区、K区）、都市計画道路畝田寺中線部分（B1～B3区、I区、J1区）街路部分（C1～C3区、E区、F区、G区、）及び緑道部分（D1区）を発掘した。着手して程なくA2区から「津司」を含む多量の墨書土器が出土し、B3区から記年銘木簡（1号）が出土し当地付近に奈良時代の「郡津」関連施設が置かれたことが想定されるようになった。

平成12年度には都市計画道路福久福増線の山側車線部分（L1～L7区）、同海側車線部分（A5区）、街路及び水路（C8区）、街区（M1・M2区、N1区、O1区）並びに大徳川橋梁建設工事にかかる仮放水路部分（P区）を発掘した。前年度のような目覚しい発見はなかったが、主として古墳時代に関する調査知見が増大した。同年度にはL6区に南接する箇所を金沢市が発掘調査している。

平成13年度には都市計画道路沿いを中心とした街区（O2区、Q区、R区、S1・S2区、T区）と水路（Z区）を発掘した。O2区からは6点の奈良時代木簡（3号～8号）が出土し、郡符を含む点が注目された。Q区並びにS1区では夥しい量の古墳時代中後期の遺構が検出された。

平成14年度には海側車線部分（A5～A7区）並びに事業地北寄りの街区（M3区、N2区、S3・S4区、V区、W区）を発掘した。下層での縄文遺構の検出（V2区、W区）、中世総柱建物群の検出（N2区）など新たな知見があった。中でも、奈良時代～平安時代初頭に位置付けられるであろう倉庫列（N2区～V2区）の検出と横江臣木簡（11号）の出土（W区）は重要資料の発見であり、注目を集めた。

平成15年度には残部（L4・8区、U区）の発掘をし、現地調査を完了した。事業地内の道路は順次供用され、既調査街区での集合住宅や店舗の建設工事が

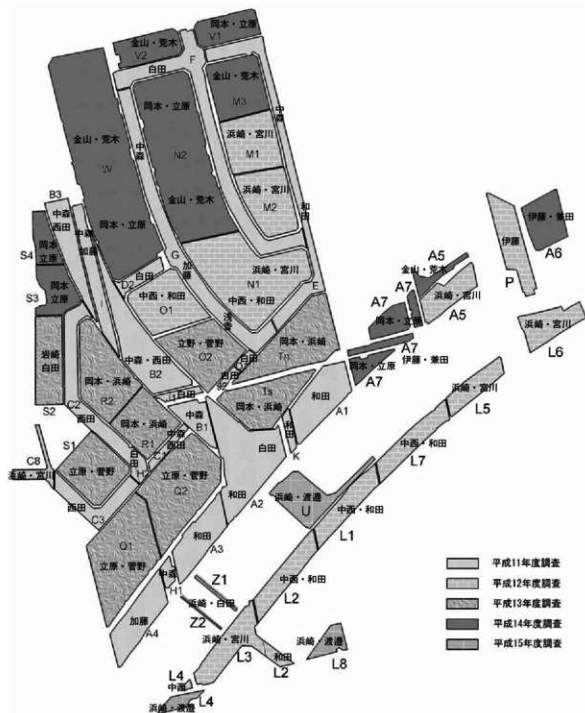


第4図 調査区位置図

開業が相次ぐ中での調査であった。事業地外での開発も活発化し、金沢市では一連の調査区の隣接箇所  
で3件の発掘調査を同年度中に実施している。

遺物整理は平成12年度から継続し、平成15年度には当該年度発掘分も含めて実測・トレースを終了し  
た。各種の自然化学分析・木製品の保存処理は調査中から平成16年度にかけて随時実施してきている。

調査結果の概略については当センターのHP・情報誌上に順次掲載したほか、現地調査中には随時現地  
説明会などを開催し、成果の公開に努めた。また、平成14年度にはリーフレット「大野郷を掘る」を作  
成し、当遺跡群を含む金沢西部第二土地区画整理事業にかかる発掘調査成果を紹介している。



第5図 調査区と主な担当職員

## 第3章 調査の結果

### 第1節 調査結果の概要

本書に取り扱われる範囲には、縄文時代後晩期、弥生時代中後期、古墳時代、奈良時代、平安時代後期～中世の遺構遺物が含まれている。

遺構は堅穴系建物6基、掘立柱建物21基、土坑・溝多数、河道2条などである。建物等の組み合わせ遺構については各地区通して番号を新に付し、単発の土坑・溝などについては地区毎に付けた現地調査時の番号で示した。

遺物は、本書所収地区からは土器石器類で約200箱、木片類で500点程度の出土をみている。本書には、土器類388点、石製品17点、土製品14点、金属製品4点、木製品75点、玉類216点を収録した。これらの数量は、実施してきた一連の調査で得られた遺物総量及び測図点数のそれぞれ1～4/11程度に相当する。

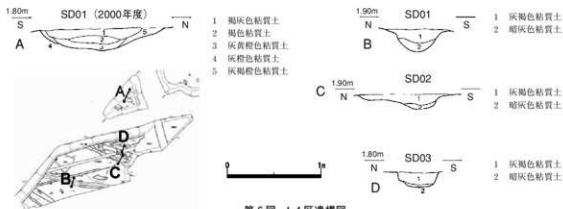
### 第2節 L地区の調査

#### 調査区の概要

L地区は福久・福増線の山側車線並びにそれ以南の箇所である。発掘調査前は水田や農道であった所が多い。大部分については2000年度に発掘調査を実施した。1999年度調査の際のA地区の分割線に倣ってL1～L4区を設定し、他、着手（決定）順に、L5～L7区を設定した。L4区の一部とL8区については2003年度に発掘調査を実施した。L6区については、上記道路の大徳川橋の建設にかかる仮放水路の南寄り部分（現地調査で「P3区」と呼称したことがある部分）も含めて報告する。

#### L4区

県道部の南西端にあたる。調査区の西端は金沢市教育委員会が2003年度に発掘調査を実施した箇所につながる。狭い範囲であるが、2000年度と2003年度の2次にわたって調査した。古墳時代中後期とみられる小規模な溝が数条、調査区を横断するように検出されている。遺構検出面の標高は1.75～1.85mである。遺物は両年度あわせても土器30片程度と非常に少ない。



第6図 L4区遺構図

SD01 調査区の南西端近くを東南東—西北西方向に進む溝。南東への延長は金沢市が2003年度に発掘調査を実施した地区で検出されている（金沢市埋蔵文化財センター「畝田・寺中遺跡」2004年、のA区SD15）。幅60cm前後、深さ25cm程度を測る。6世紀前半頃とみられる須恵器片が出土している。

SD02 SD01の北東4m付近を東南東—西北西方向に進む溝。幅60cm前後、深さ20cm弱程度を測る。

SD03 SD02に接するように北東側を東南東—西北西方向に進む溝。幅60cm前後、深さ20cm弱程度を測る。

SD04 2000年度に発掘した部分で検出された溝（2000年度調査区のSD02）。東南東—西北西方向に進む。幅20cm前後、深さ10cmを測る。

SD05 2000年度に発掘した部分で検出された溝（2000年度調査区のSD01）。東南東—西北西方向に進む。幅70cm前後、深さ20cm弱を測る。

### L3区

L3区では中程から東部にかけて古墳時代中・後期、鎌倉時代の遺構が検出されている。遺構検出面の標高は南西部で1.70m、北東部で1.50m前後である。古墳時代中・後期の土坑からを主に、15箱程度の遺物が出土している。

SB401 AM・AN24・25区に位置する掘立柱建物。4×4間（984cm×832cm）の総柱建物で、長軸はN4°Eを指す。

柱穴は径30cm前後で、深さは30cm程度を測る。

中世前期とみられる。ほぼ同位置あり規模が似通う掘立柱建物SB402とは、先後関係が不明ながら、継起的建替えの関係にあったものと考えられよう。

SB402 AM・AN24・25区に位置する掘立柱建物。4×4間（912cm×804cm）の総柱建物で、長軸はN4°Eを指す。

柱穴は径30cm前後で、深さは30cm程度を測る。

ほぼ同位置で規模が似通う掘立柱建物SB401とは、先後関係が不明ながら、継起的建替えの関係にあったものと考えられよう。

SB403 AL・AM26区に位置する掘立柱建物。2×2間の総柱身舎の西辺に半間規模の庇が取付く。東西514cm、南北444cmを測る。身舎の長軸はほぼ真北（N0°）を指す。

柱穴は径30cm前後で、深さは30cm程度を測る。庇柱穴は一辺30cm程度の方形で、中央の柱穴が浅い。

SB404 AK・AL25・26区に位置する掘立柱建物。5×4間（1024cm×824cm）の総柱建物で、長軸はN87°Wを指す。長辺5間として報告するが、6間以上と考える余地もある。

柱穴は径30cm前後で、深さは30cm程度を測る。

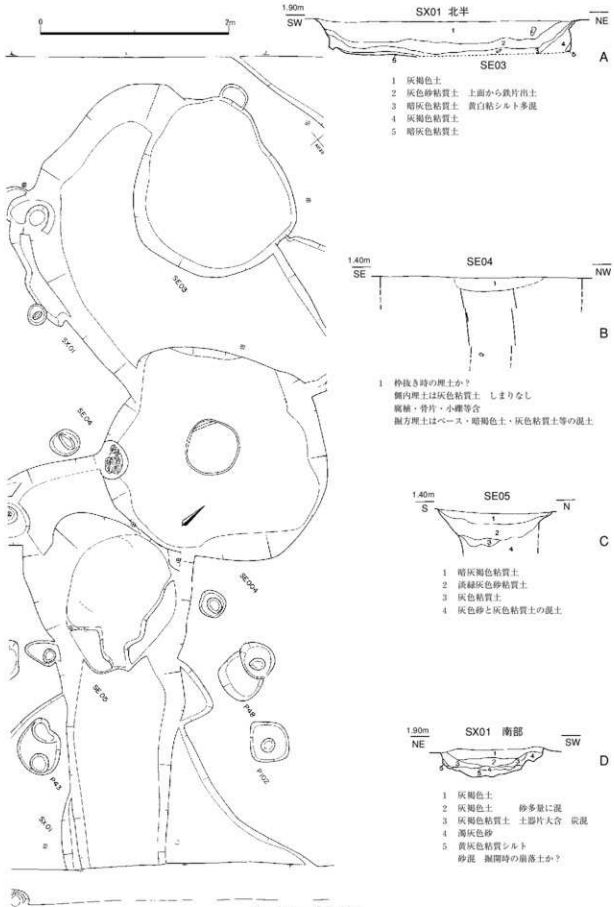
SB405 AK25・26区に位置する掘立柱建物。3×2間の総柱身舎の西辺に1/4間規模の庇が取付くものと考えてみた。南北612cm、東西394cmを測る。身舎の長軸はN4°Eを指す。

柱穴は径30cm前後で、深さは30cm程度を測る。

SB406 AM25・26区に位置する掘立柱建物。3間×1間以上（544cm×212cm以上）の総柱建物を想定している。長軸はN88°Wを指す。

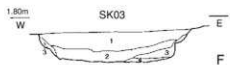
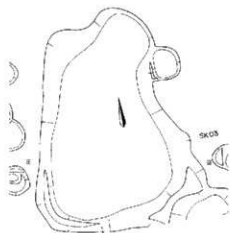
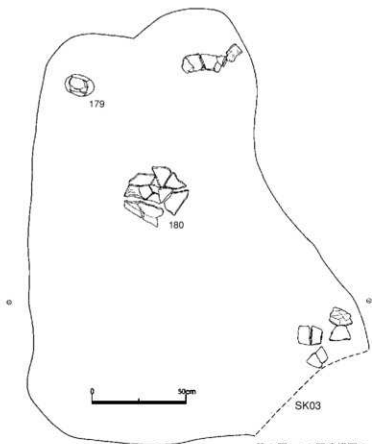
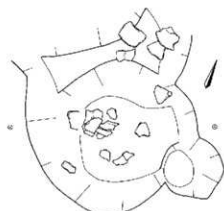
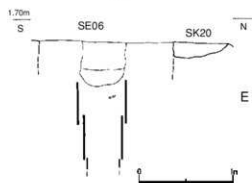
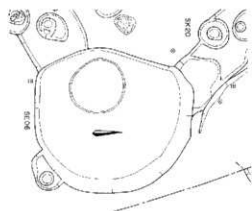
柱穴は径30cm前後で、深さは30cm程度を測る。

SB101 AM24区に位置する掘立柱建物。3×1間（440cm×424cm）の正方形に近いプランを呈し、両長側は布掘である。長軸はN41°Eを指す。布掘り溝は幅45cm前後・深さ30cm前後を測る。南西側の溝は真ん中の1間分途切れる。柱穴はすべて布掘り溝底よりも深い位置に礎板をおいた部分があり、実際に礎板が遺存していた柱穴もあったため、柱根の位置がほぼ推定可能であった。南西辺中央やや外側に位置する



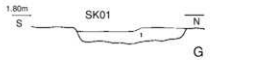
第7図 L3区遺構図1





- 1 暗褐色土
- 2 灰色粘質土
- 3 灰色粘質土とベース（淡黄灰色粘質シルト）の混土
- 4 灰色粘質土とベース（淡青灰色粘質シルト）の混土

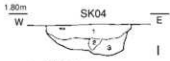
第8図 L3区遺構図2



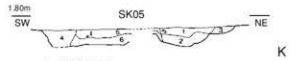
1 暗褐色土・灰色粘土・黄色粘土の混合土



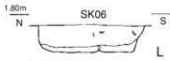
- 1 灰褐色粘質土 炭粒わずかに含
- 2 灰褐色粘質土 黄白シルト細粒多量に含
- 3 暗褐色粘質土 黄白シルトブロック含
- 4 (期) 灰褐色粘質土 炭粒多く含
- 5 (期) 灰褐色粘質土 地山ブロック含
- 6 黄白色シルト・(期) 灰褐色粘質土ブロック混



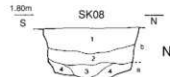
- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土と灰色粘質土
- 3 黄灰色粘質シルト 灰色粘質土粒混



- 1 灰褐色粘質土
- 2 灰褐色粘質土・地山ブロック(黄白色シルト)混  
炭粒少し含
- 3 (期) 灰褐色粘質土
- 4 暗褐色粘質土 炭粒わずかに含
- 5 (期) 灰褐色粘質土 炭粒多く含
- 6 (期) 灰褐色粘質土・地山ブロック混



- 1 暗褐色土
- 2 黄灰色粘質シルト 暗褐色土混



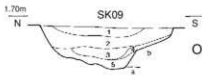
- 1 暗褐色粘質土
- 2 黄灰色粘シルトと1層の混土
- 3 黒濁土と黄灰色粘シルトの混土
- 4 灰白色砂 3層土少量混
- a 灰白色砂
- b 黄灰粘シルト



- 1 灰褐色粘質土 黄白シルト細粒少量含  
炭粒わずかに含
- 2 灰褐色粘質土 黄白シルトマール状に混



- 1 灰黒色砂質土 炭混
- 2 灰褐色粘質土 炭混 ベース土少混
- 3 暗褐色粘質土 ベース土塊混
- 4 暗褐色粘質土 ベース土少量混

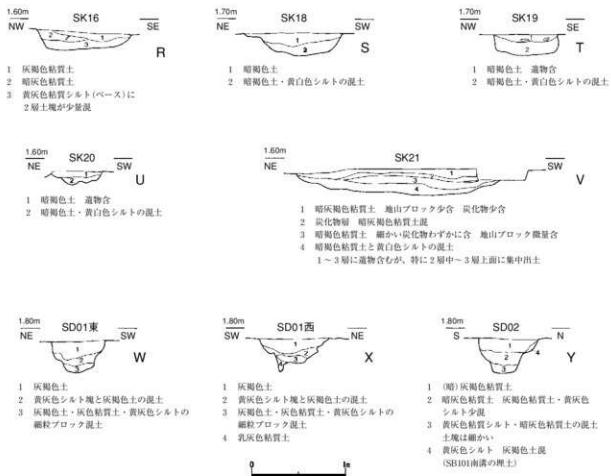


- 1 灰褐色土
- 2 暗灰褐色土
- 3 暗茶褐色土
- 4 黒灰色粘質土 黄白粘土塊多混
- 5 黒灰色粘質土
- a 灰白色砂
- b 黄白粘シルト
- 黒灰粘には炭多混
- 各層に少量の塊土混



- 1 灰褐色粘質土
  - 2 暗褐色粘質土
  - 3 暗褐色粘質土 黒色粘質土混
  - 4 ベース土塊・3層土塊・黒色粘質土塊の混土
- ※ 1層以上については横断面として取上げ

第9図 L3区遺構横切



第10図 L3区遺構図4

ことになる良好な柱穴は、他には組み合わせを見出せなかったもので、この建物の棟持柱穴である可能性がある。

SB102 AL26区に位置する掘立柱建物。現状で2×1間(380cm×340cm)を数える。長軸はN34°Wを指す。

柱穴は直径40cm深さ40cm程度で、埋土の黒色味が強く、周辺の柱穴の中でもしっかりしているもので構成される。古墳時代の土坑SK21に先行する。

1間である短辺が比較的短いことから、報告される掘立柱建物のなかでも古い段階に位置付けられるものとみている。南西脇に想定される竪穴系建物SH01との並存推定も可能であろう。

SH01 AL・AM25・26区に位置する。2段掘り構造をもつ土坑SK14・15がこの調査区では希少な弥生中期の遺構であることがわかった段階でこれの周囲を検討したところ、存在が推定されるに至った竪穴系建物。SK14・15を貯蔵穴もしくは灰穴に、P52・60・77及びP76に切り込まれる未命名柱穴を4基の主柱穴にみだっている。外周溝あるいは壁溝に比定できるような遺構は検出されていない。

柱組は一辺2.6～3.0mのやや歪んだ四角形プランである。柱穴は直径40～70cm、深さ20～55cmを測る。貯蔵穴もしくは灰穴は柱組内部、中心から南東柱穴寄りに偏った箇所位置する。SK15は長径80cm深さ40cmを測る隅円方形プランの土坑で、深さ10cm前後の浅い落ち込み部分(SK14)の中で検出された。SK15の坑底には指先大の木炭が点在していた。

遺物はSK14から弥生土器の口縁部及び底部184、SK15から弥生土器185が出土している。弥生中期後半、凹線文波及期の遺構であろう。

SE01 AN23区に位置する。近世の野井戸とみられる。直径1.8m程度の円形プラン。南東側半分を発掘できた。深さ55cmを測る。

SE02 AO24区に位置する。近世の野井戸とみられる。直径2.8mの円形プラン。北西寄りの3/4程度を発掘できた。深さ85cmを測る。

SE03 AM24・25区に位置する。直径1.8mの円形プランを有する井戸とみられる。南寄りの1/2強をSX01(北部)とした長方形土坑に切り込まれるが、SX01(北部)の底でプランを確認した段階で既に周壁の崩壊が始まっており、完掘できなかつた。深さは60cm以上。

図示に集える遺物は出土しなかつたが、埋土及び周囲の状況から、中世の井戸と考えられる。

SE04 AM25区に位置する。直径2.4m程度の略円形プランの掘り方を有する。掘り方のほぼ中央に曲げ物製井戸側を3段分検出している。上2段はかなり傾いた状態で検出されている。写真測量後、井戸側を取上げたが、極めて激しい湧水と周壁の崩落のため、作業は困難を極めた(沈殿槽が砂で埋まり泥水が溢れた)。井戸の構築に際しては、地下水位が発掘時よりも相当低くないと掘り方を掘ることすら充分には行えないように思われた。ちなみに3段目の曲げ物下端のレベルは検出面から135cm下位の標高-0.05mに復元される。

掘り方上位埋土の掘削中に南西部で礎板をいれた柱穴が切り込んでいることに気付いた。この柱穴は掘立柱建物SB402を構成するものと後に想定することになった。継起的建替を想定する掘立柱建物SB401とSB402がそれぞれに井戸とセット関係にあるとすれば、本址とSB401、SE03とSB402をセットに考えるのが配置上整合的であろう。その場合、SB401はSB402に先行することになる。

遺物には井戸側3段目の曲げ物W69と上位埋土出土の土師皿195・196がある。土師皿には13世紀後半を中心とした年代が想定できる。

SE05 AM25区に位置する。SX01(南部)とした溝状の落ち込みの底で検出された。直径1.6m程度の掘り方を持つ。周壁の崩落の恐れがあったため、完掘できなかつた。深さは80cm以上あり、井戸と考えられる。

6世紀前半の遺物を含むが、中世の遺物は認められなかった。掘り方の規模・形状や埋土の状況もSE03・04とは異なっていたようである。以上から古墳時代中後期の井戸とみておきたい。

SE06 AK26区に位置する。1.7m×1.5m程度の偏円形の掘り方をもつ。遺構検出面レベルで掘り方内西辺に寄った箇所に直径50cm弱の正円形の変色プランが確認できた。掘り下げると、その40cm下方で曲げ物製の井戸側の上端が検出された。井戸側は3段の遺存が確認できた。検出面で確認された正円プランと土層断面の状況から上位にもう1段あったことが想定できる。検出面からの深さは135cm以上である。調査中は側内を常時排水したが、排水しないと水位は曲げ物3段すべて没かる程度にまで上昇した。

遺物は井戸側の曲げ物と側内から出土した箸W29～31がある。井戸側は残存した内の上から2段目のものW68を図示した。

SK03 AN24区に位置する。南北2.3m東西1.0～1.6mの歪な台形を呈し、深さ30cmを測る。最下層の埋土は、他の多くの古墳時代の土坑の場合と同様、細かなベース土塊を主体とする。埋土中位に比較的多くの土器片を含んでいた。

土師器179・180から古墳時代中後期に属するものとみられる。

SK21 AL26区に位置する。長軸2.3m短軸1.7mの隅円方形プランの土坑で深さは30cm弱を測る。埋土上位から中位にかけて、古墳時代の土師器が環状に廃棄された状況で検出された（図版10）。

土器面の遺存状況に恵まれなかったため、図示できたのは186～189の4点にとどまったが、大量に出土した土器には須恵器が含まれていない。5世紀前半～中頃にかけての遺構かとみられる。

SD01 L3区の南西部を東南東—北西方向に横断する幅60cm深さ40cm程度の溝。掘方は整美な逆台形断面を呈し、埋土下位にはベース土塊を多く含んでいた。遺物はほぼ皆無で、中世以降とみられる小穴に切り込まれていた。

埋土・走向からみて、古墳時代の遺構である蓋然性が高いと思われる。

## L2区

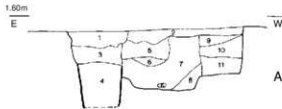
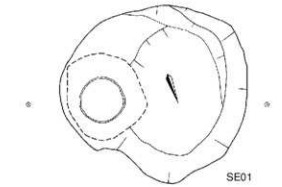
本線部分と脇道部分（L2区南部（枝））がある。本線部分の調査区中央を古墳時代～奈良時代の遺物を含む河道が横断している。河道の両側にはL3区と同様に古墳時代及び鎌倉時代の遺構が展開するが、古墳時代の遺構はやや少ない。南部には古墳時代の遺構が展開している。遺構検出面の標高は本線部分の南西部で1.50m、北東部で1.55m程度、南部で1.75m前後である。L2区からは土器類で80箱程度の遺物が出土しているが、その9割近くは河道出土である。

河道（SD08） 県道部分を地区の中央で北西—南東方向に横断する。南への延長部分がL8区で検出されている。また、北方への延長部分が後報告となる各調査区を縦断して、金沢市教育委員会が2003年度に発掘調査した地域（木曳野遺跡群）へ伸びているものと判断している。L2区では河道は上面幅16m前後深さ1.25m程度を測る。現地調査ではSD08と呼び、出土遺物や各種調査資料にはSD08の記載のものがある。

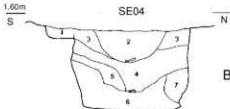
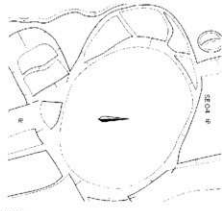
掘削に際しては10mグリッドを細分した2mグリッドで遺物の取上げにあたった（第14図）。A・B地区の調査で検出されていた河道の構成について、異時期のものも含んだ複数流路の集合の可能性が生じていたためである。また、掘削中に埋土に白玉が含まれていることが判明したため、掘削土の篩かけを実施した。

結果、土層・出土遺物の上から河道内中央やや北東寄りに奈良時代に属すると考え得る落ち込みを想定しうることが明らかになった。また、白玉・小玉類は690点近くに及ぶ検出をみた。

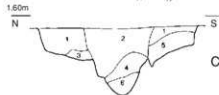
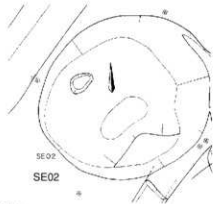
遺物は多数の土器及び木製品、玉類、少数の金属製品等が出土した。墨書土器はいずれも須恵器で、字句には杯蓋外頂部の「麻呂」F1、無台杯外底の「宮家」F2、同じく「吉」F4などがある。銀環



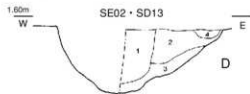
- 1 暗(赤)灰色粘質土
- 2 暗灰色粘質土 地山ブロック少含む
- 3 暗赤灰色粘質土 地山ブロック少含む 酸化鉄による赤化
- 4 黒灰色シルト
- 5 暗赤灰色粘質土 3層と似るが赤化進む
- 6 黒灰色シルト 地山ブロック大含む
- 7 黒灰色シルト 4層とほぼ同
- 8 黒灰色シルト 6層と同
- 9 暗灰色粘質土
- 10 暗灰色粘質土 地山ブロック含む
- 11 黒灰色シルト 8層と同か?



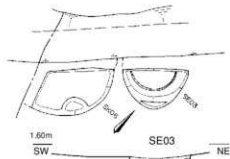
- 1 黒褐色粘質土 SD17埋土
- 2 黒灰色粘質土 黒灰色土がブロック状につまる
- 3 暗褐色土 上を切っている近代用水の影響でやや青味がかかる
- 4 黒灰色シルト 地山ブロック小含む
- 5 灰褐粗砂 井戸水溜の裏込砂 水溜があげられているので一部攪乱されている
- 6 黒褐色シルト 地山土(暗青灰粘砂)塊混 井戸側材・箸などを含む層
- 7 暗青灰粘砂 6層土ブロック小含む



- 1 黄褐色土 地山(やや砂混じり)中に2層土ブロック混じる
- 2 灰暗褐色土 地山ブロックわずかに含む 水溜抜き取り跡か?
- 3 2層土ブロック
- 4 暗灰粘質土
- 5 灰暗褐色土 2層より灰色弱 遺物含む
- 6 灰粗砂



- 1 暗灰粘質土 SE02水溜採取面 断面Cの2・4・6層に相当
- 2 黄褐色土 断面Cの1層と同
- 3 黄褐色土 地山土中にわずかに黒色土ブロック混じる
- 4 暗褐色土 SD13埋土



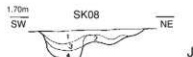
- 1 暗灰褐色土 灰砂混じり
- 2 暗赤褐色土
- 3 黒(灰)色シルト
- 4 暗灰粗砂



第11図 L2区遺構図1



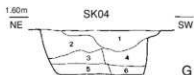
- 1 暗褐色砂質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 青灰色シルト 暗灰色系シルトブロック混
- 4 明青灰色シルト 暗灰色系シルトブロック混
- 5 明青灰色粘質土 強粘質
- 6 青灰色シルト 3と似ている



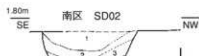
- 1 暗褐色粘質土 土器含む
- 2 暗褐色粘質土 地山土塊混
- 3 暗褐色粘質土 地山土塊少量混 1と4の中間層
- 4 暗灰(黒)粘質土



- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 1層より暗褐 地山土塊・粒多含む



- 1 (暗)灰色粘質土
- 2 (暗)灰色粘質土 地山ブロック多含む
- 3 暗灰色粘砂
- 4 暗灰色粘質土 地山ブロック多含む 2層に似る
- 5 黄灰色砂 地山砂に近い
- 6 暗灰色砂



- 1 暗褐色土 土器片少含む 炭粒少含む
- 2 暗褐色土 1層より黒味増す 大粒の炭粒多含む
- 3 4層中に地山土塊多含む 地山崩落土か
- 4 黒褐色粘質土 地山小土塊含む



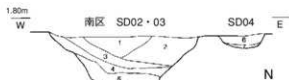
- 1 暗褐色土 多量の地山土塊含む
- 2 暗褐色土 地山粒含む(土塊入らない)
- 3 黒灰色粘質土
- 4 暗青灰粘砂 3層土混じる
- 5 暗青灰粘砂 3層土わずかに含む



- 1 暗褐色土 黒褐色に近い暗 炭粒含む
- 2 地山土+1層
- 3 暗褐色土 地山土塊多含む



- 1 暗褐色土 遺物多 やや灰褐色状の部分あり
- 2 暗褐色土 地山小土塊混
- 3 褐色土 別のビット



- 1 暗褐色土 地山粒(小)を多量に含む 別の遺物か?
  - 2 暗褐色土 SD02(断面Lの)1層に同
  - 3 暗褐色土 SD02(断面Lの)2層に同
  - 4 SD02(断面Lの)3層に同 地山傾り返し土が帯状に堆積
  - 5 黒褐色粘質土 SD02(断面Lの)4層に同
  - 6 暗褐色土 SD04覆土
  - 7 黄褐色土 SD04覆土 地山土中に6層土塊が入る
- ※SD02・03とも覆土はほぼ同系統だが 02が03を切る

第12図 L2区遺構図2



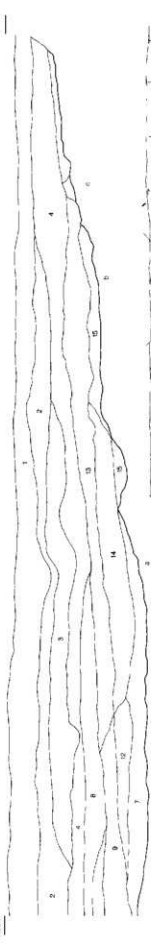
1,500m  
NE



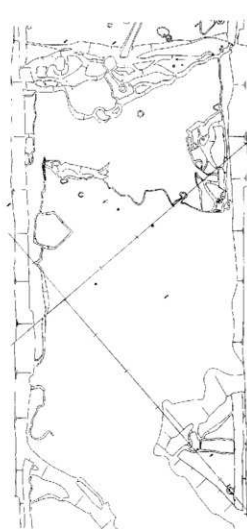
- 1 耕作・整地上
- 2 暗褐色土 上部が平水を含む
- 3 2層より灰色成層下 ほぼ同層か
- 4 赤褐色土 灰分集中 腐化により赤化する
- 5 暗褐色土 2層とはほぼ同 やや赤化が激しいか?
- 6 暗褐色土 暗褐色土 本質腐植物多含む 古代(8C(後)-9C(前))所部集中層
- 7 灰相砂 小礫含む
- 8 暗灰相砂 上部土をプロック状を含む 遺物断片出土層
- 9 暗灰相砂 ほとんど遺物を含まない層

0 3m

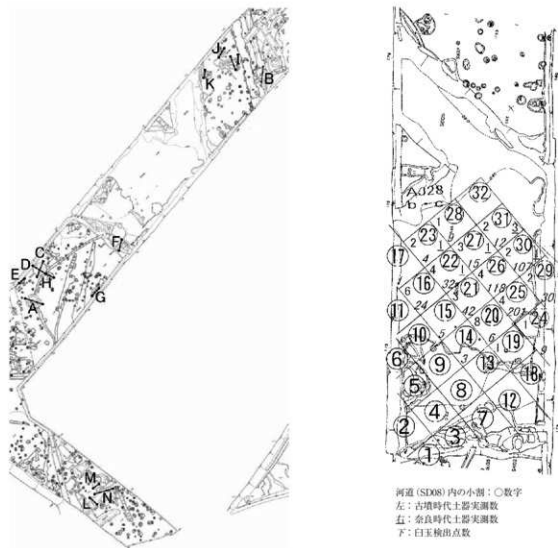
1,500m



- 9 暗灰砂
- 10 暗灰砂 上部土をプロック状を含む 本質腐植物多含む 古時代遺物層
- 11 ビットor溝 11層は5層に載る
- 11' 暗灰相砂
- 12 暗灰相砂
- 13 暗灰相砂
- 14 暗灰相砂 上部土をプロック状を含む 本質腐植物ほとんど入らない 遺物層
- 15 濁山+13層上の風じり土
- a 濁山 灰白細砂
- b 濁山 灰白細砂
- c 濁山 黄褐色



第13図 L2区遺物図3



第14図 L2区遺構図4

M1は中実の銅芯をもつもので重量22.1gを測る。玉類では滑石製の白玉644点、勾玉7点、管玉4点、ガラス製の小玉14点、丸玉1点、管玉1点、土製の丸玉3点、平玉6点、管玉1点などが出土した。644点の白玉の総重量は43.83g、長さの総延長は1540.81mmである。土製の丸玉・平玉の表面は黒色研磨仕上げで、概して非常に堅緻である。

SB103 AM・AN27区に位置する布掘溝SD05から、その東方にかけて存在が推定される掘立柱建物。長辺は3間（372cm程度）で短辺は320cm以上を測る。長軸はN24°Wを指す。

布掘溝SD05は幅40cm深さ20cm内外。柱穴はほぼこの溝幅内に納まるが、深さ60～70cmと深い。

出土遺物に恵まれないため年代を決め難いが、遺構の形状と周囲の状況から古墳時代前期頃と考えておきたい。

SB201 AH29区に位置する掘立柱建物。2×1間（378cm×171cm）で短辺側は南東方向にのびる総柱建物であろう。長軸はN30°Eを指す。

柱穴は径30cm前後で、深さは30cm程度の小型のものが多い。

SB202 AM26区に位置する2つの平行な柱穴列。624cm以上×540cmを測ることになる。長軸はN42°Eを指す。

SH02 SD09を外周溝にみだてることにより想定される竪穴系建物。大半が調査区外に位置する。SD09は幅30cm深さ10cm弱で埋土や溝底の状況などから、河道の埋没に先行するものとみられる。遺存部のプランから1辺15m余りの比較的整美な隅丸方形プランが想定される。主柱穴のうち2基程度が検出されているものとみられるが、組合せを確定し得ない。

図化遺物はない。遺構の形状から古墳時代前期頃のものと考えている。

SH03 L2区南部AN・AM27・28区に位置する。直交する溝状の落ち込みSD01A・Bを外周溝の南隅にみだてることにより存在が推定される竪穴系建物。SX01を北西辺にみだてるならば、区画の規模は南北8mを測ることになる。主柱穴は有無も含めて確定し得ない。

図化遺物は多数ある。SD01Aから82～86、土師質支脚、滑石製双孔円盤2点(K6・K7)、SD01Bから87・88、SX01から94～99が出土している。SD01Aの埋土中～下位付近には人頭大の焼土塊が廃棄されていた(図版7)。なお、土師器高杯92を出土したP43はSD01Bの掘削中には検出されず、溝底に至って見つかった別遺構である。SD01Aからは滑石製白玉2点(未図化)も検出されている。

SE01 AK26区に位置する。同位置で作り返えられている中世の井戸。古い段階のものは直径1.8m程度の掘り方を持ち、深さ65cmを測る。井戸側は抜き取られている。新しい段階のものは直径0.9mの円形の掘り方の中に曲げ物を井戸側として埋設していた。

遺存した曲げ物W66は1段で、直径52cm高さ45cmを測る。

SE02 AJ26区に位置する。直径1.8m程度の円形の掘り方を持ち、深さは70cmを測る。底はすり鉢状で、深部の上位から掘り込まれたような土層断面を呈する。

図化できた遺物はないが、中世の井戸であろう。

SE03 AK26区に位置する。直径65cmの円形プランを持ち、深さ85cmを測る。坑内下位に直径47cm高さ36cmの円形曲げ物W67が1段遺存していた。

一連の調査の中では、少ないながらもいくつか類例の知られるタイプの土坑で、中世に属する。

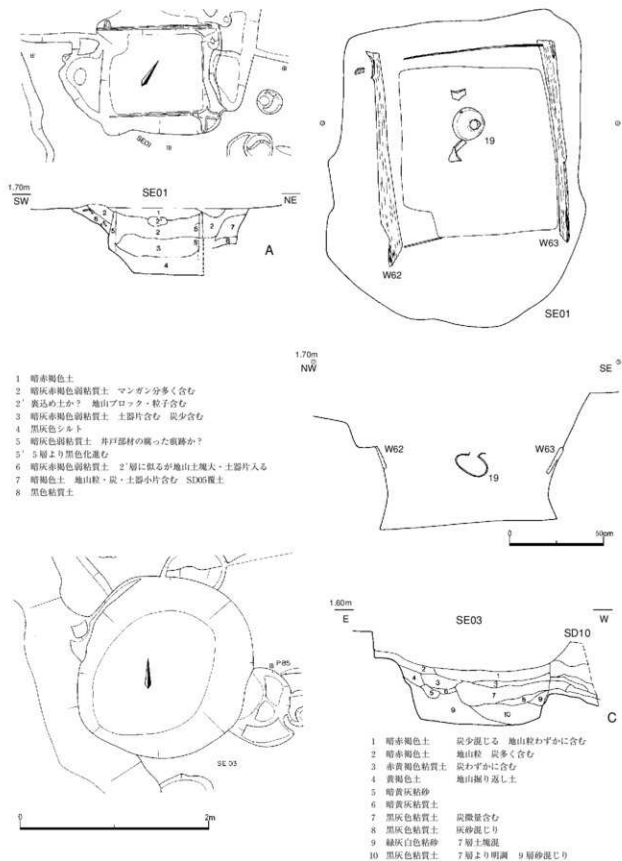
SE04 河道の東側、AH29区に位置する。長軸1.8m短軸1.4m弱の長円形プランの土坑で、深さ90cmを測る。最下層から井戸枠材片が検出されている。側材を抜き取られた井戸であろう。

遺物は最下層出土の箸W20～22を図示できた。中世に属するものであろう。

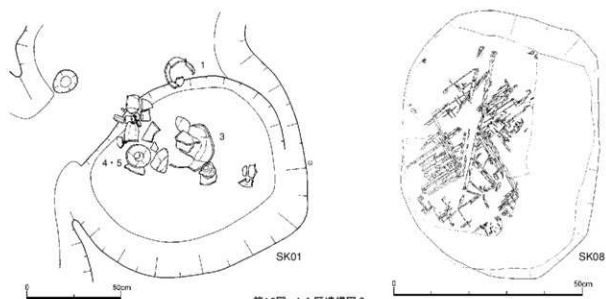
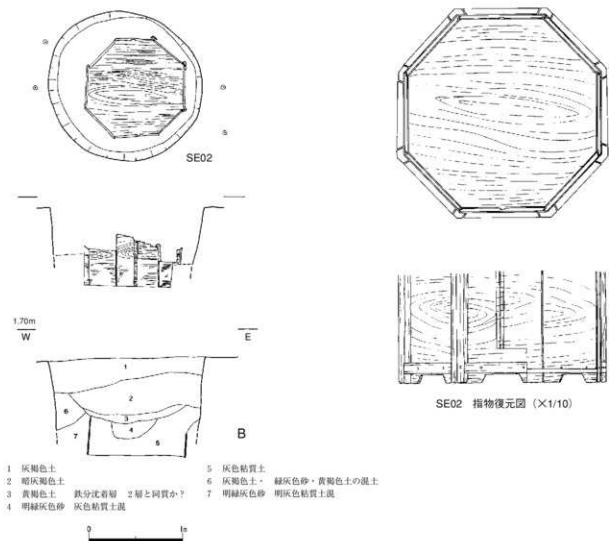
SD05 河道の北東肩を検出範囲東部で切り込む南北方向の溝。後報告となる北方の調査地区でこれに連続するとみられる溝が延々と検出されていることから、当初より人工溝(条里溝)として開削されたものと判断される。L2区での規模は幅4.5m深さ0.8mを測り、溝底の標高は0.7m程度である。発掘時には湧水し、肩が崩壊した。接していた河道の方が深かったためやがて湧水点が移動し溝肩の崩壊は進行が衰えたが、地下水位が現在と同等ならば、溝の掘削と維持には相当の困難を伴ったであろうと思われる。なお、SD05には河道と接する地点付近に西方にのびる東西溝が取り付いていた可能性があるともみている。SD05からの出土遺物は、L2区においては河道に由来すると考えられる古墳時代・奈良時代のものが多いが、中世の遺物も少量ある。なお、北方の延長部では12世紀後半～13世紀前半頃の遺物が出土している。

## L1区

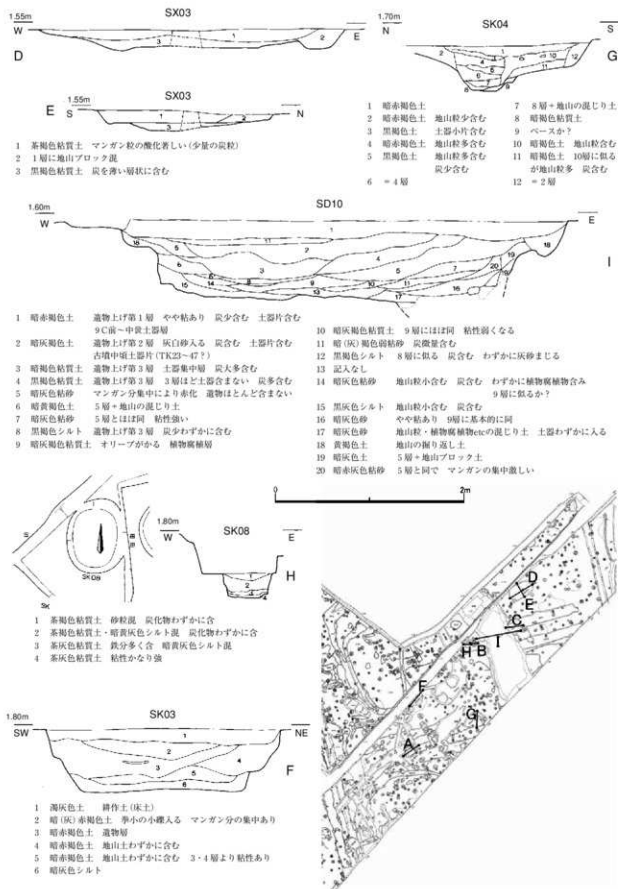
L1区には中央を横断して古墳時代後期に埋没した大溝(SD10)がある。古墳時代中・後期の遺構は、大溝より南西側に多く認められ、遺構の集中域をなしている。集中域には奈良時代と推定されるやや大型の掘立柱建物(SB301)がある。大溝を切り込んで平安時代の井戸(SE03)がある他、詳細な年



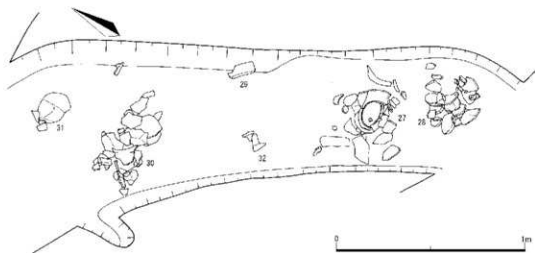
第15図 L1区遺構図1



第16図 L1区遺構図2



第17図 L1区遺構図3



第18図 L1区遺構図4

代は不詳ながら、中世にかけての遺構が全域に散在している。遺構検出面の標高は南西部で1.65m、北東部で1.50m前後である。20箱程度の遺物が出土しており、その7割程度が大溝出土である。

SB301 AF・AG30区に位置する5間以上×3間（768cm以上×604cm）の掘立柱建物。長軸はN32°Wを指す。

一辺50～80cmの隅丸長方形プランの掘り方の柱穴が目立つ。北西隅の柱穴P03から滑石製勾玉J1が出土している。

方位と上記遺物により古墳時代後期の建物と判断して紹介したことがあるが、ともに決め手にならないものと考え直した。ここでは、後に発掘され年代を推定し得た建物の方位と掘り方の形状により、奈良時代と捉えなおしておくたい。

SB203 AF・AG30・31区に位置する掘立柱建物。2間以上×1間（390cm以上×475cm）の身舎の北東側に155cm分の庇がつく構造を考えてみた。長軸はN38°Wを指す。

柱穴は長軸80cm前後の長方形に近い大型のプランをもち、深さは30cm程度を測るものが多い。

周囲の状況から古墳時代の建物と推定するが確信がもてない。現場で北西隅柱穴の認識が遅れたため、古墳時代中期と考える井戸SE01との先後関係が明確にできていない点が惜まれる。

SB204 AF31区に位置する。現状で2×1間（384cm×188cm）の掘立柱建物。長軸はN54°Eを指す。南側の調査範囲外にもう1ないし2間のびる、2×2（ないし3）間の総柱建物であろうとみている。

柱穴は直径40cm程度と小型であるが、深さはどれも45cm以上ある。北東辺の2つの柱穴ではともに穴底から8cm程度上位で礎板とみられる木質が認められた。

遺構の形状から、古墳時代中期頃とみている。

SB407 AD・AE32区に位置する。現状で4×2間（872cm×467cm）の掘立柱建物。長軸はN8°Wを指す。総柱建物であるが、東側（L1区）では検出面が降るため、特に東側への伸びが確定できない。

柱穴は直径35～50cm程度、深さは最大でも20cm程度と浅い。

遺構の形状と方位から中世前期とみられる。

SH04 AG・AH29・30区付近に位置する。半円を描いて両端が調査区外にのびるSD04並びにL2区のSD15を外周溝にみだてることにより想定される竪穴系建物。SD04は幅0.8～2m深さ30cm前後で重複する各遺構に先行するものとみられる。遺存部のプランから胴張りの強い隅丸方形プランが想定される。主柱穴のうち1ないし2基が検出されているものとみられるが確定し得ない。

図化遺物はない。遺構の形状から古墳時代前期頃のものと考えている。

SH05 AG・AH29・30区付近に位置する。「コ」字状に接続する溝SD02・SD07・L2区SD16を一直線の外周溝に見立てることにより想定される堅穴系建物。区画の1辺が8m程度なのでかなり小型の建物が想定される。

SD07出土の土師器33を図化した。古墳時代中後期の建物であろう。

SE01 AG30区に位置する。1.6m×1.3m程度の略方形プランを呈し、深さは70cm余りを測り湧水をみる。規模と形状から井戸とみられる。掘り方の中、深さ20cm程度の地点で長さ120cm弱の蒸籠組み可能な材が1段分検出された。材は対面する1対が比較的良好に遺存しており、これらに直交する材は腐朽が著しかった。材の端は掘り方内に木質が置き換わった痕跡として残った部分もある。これらの材は棧であろう。井戸側に相当するものは土層断面に残された直立する木質置換土である。従って井戸側は(縦)板とみられる。棧材から復元される内法は約92cm程度である。

遺物は棧W62・63の他に、土師器16・17、須恵器18・19がそれぞれ、井戸側内埋土中から出土している。杯蓋はTK23型式とみられる。本址は5世紀後半の遺構であろう。

SE02 AE31区に位置する。直径85cmの正円形プランの土坑で、壁は鉛直に掘り込まれ深さ55cmを測る。坑底に対角長58cmの八角柱形指物容器を正置していた。土層の状態からは容器は蓋をされた状態で坑内に納められた可能性が高い。容器本体以外にはこの土坑からの出土遺物は皆無であった。掘削開始時点では井戸と予想していたが、上記の状況から、容器を取めるための土坑であったものと判断される。

容器は下半部が遺存していた。遺存部は底板1点と側板・枠木・棧各8点を釘留めしたとみられるものである。釘は木釘とみられるが、遺存していなかった。また、蓋と考えられる材の出土も認められていない。底板と棧は遺存分については完存していたが、棧は6点のみ検出である。側板と枠木については全て埋設時の上位部分が腐朽しており、全形を知りうるものはなかった。本書ではこれらの部材のうち、底板W57と側板・枠木・棧の各1点(W58～60)を測図掲載した。この容器は類例に乏しい資料かと思われるので、以下に観察を述べる。

底板は1辺14cm対辺長50cmの八角形の板目板で厚さは1cm内外である。木表を容器の内面側に使用している。底板は一枚板ではなく、一辺が軸方向に割れている。割れた箇所には同樹種の別材を端面から木釘で3箇所打ちつけて補修している。側板は横長にとられた板目材の木表を外側に向け、木目が横方向になるように立てられている。幅20～22cm厚さ0.8cm内外で、高さは30cm以上である。木目の折り返し部から等分に木取りされているものとすれば、高さは40cm前後になろう。底板は側板の下端から3cm弱上方に据えられるが、側板には底板との圧着痕が認められるのみで、側板と底板とを直接緊結した痕跡は認められない。各側板の下端中央は下底11cm上底9cm高さ2.5cm程度の等脚台形に切り込まれ、組合せ後の容器の隅に8脚をなす。切り込みはほぼ底板外面の高さに及ぶ。各側板は両側縁(小口)を外面(木表)側から斜めに面取り、また、内側からみた各右側縁部を内面(木裏)側から幅1～2cm深さ3mm程度に浅く切欠いている。これらの切欠き部が内側から見て右隣の側板の左側縁の斜めに面取られた小口を順次受ける仕口となっている。なお、側板のうち底板の木目軸方向の辺に接する相対した2枚の内面中央には縦(年輪接線)方向に幅1cm深さ3mm程度の蟻溝が設けられている。この蟻溝は底板の圧着部分を越え、脚作り出しの台形の切欠き部分まで板を縦貫している。枠木と呼ぶものは側板側縁の重なり角部分を外側から蔽う部材である。横断面「へ」字形を呈し、幅4cm弱、厚さ1cm弱、最も長いものの残存長は28.5cmを測る。内角が左右の側板側縁外面に被る。材を立てて外側からみた場合の角右面の下端から4.3cmの箇所に貫通する釘穴がすべての材に認められる。釘は側板のあわせ部、内側から見て左側の板の仕口部と右側の板の薄くなった側縁を打ち抜き、底板



の端面に達していたものと見える。釘穴で高さを揃えると、桝木の下端は側板の隅脚の出とほぼ一致する。桝木は材の外面が比較的丁寧に調整されているのに対して、内角側は割取ったままで未調整のようにみえる。なお、側板側縁に残された釘穴には桝木においては対応する孔を見出せないものが、下位に1ヶづつと上位にも数ヶづつある。この点と内角の面調整が粗い点から、遺存していた桝木は補修材であった可能性がある。棧は縦断面が上底18cm下底19cm高さ1.5cmの台形を呈する角材である。材幅は3cm弱である。内側に蟻溝を施した2枚の側板の脇からは棧は検出されなかった。棧は側板の外面、下端から約4cmのところを下縁として水平に2箇所釘留めされる。縦断面でいう上底側の面が側板外面に圧着する。桝木は比較的丁寧に面調整されているが、圧着面の調整はやや粗い。釘穴はすべて側板をも貫通している。側板内側での釘痕は底板の圧着痕の上0～数mmにあり、圧着痕と重なる例はない。釘が底板に刺さるようことを意図的に避けたようにも思われる。なお、桝木の場合と同様、側板並びに底板端面に残された釘痕には、棧の方で対応する孔が認められないものがある。棧とした部材の機能は、この容器の構造からすれば、桝木とした材の留具であり木釘の緩衝材である。容器外面の装飾や取っ手の意味があったのかもしれない。

出土状況と観察結果を勘案し、第16図右上のようにこの容器を復元してみた。

なお、この木製品の部材については樹種同定並びにC14年代測定（AMS法）を実施している。樹種はW57・58がアカマツ（W57の補修材もアカマツ）、W59がヒノキ属、W60がスギと同定されている。年代測定は2試料について実施し、更正暦年代は側板W58でAD1440年、桝木W59でAD1475年との値をそれぞれ得ている。

SE03 AE31区に位置する。SD10の東肩を切り込む。1辺1.9mの隅円方形もしくは直径1.9mの円形プラン。深さ95cmを測り、湧水する。井戸であろう。側材は遺存していなかったが、抜き取られたものと考えられる。

図化遺物はないものの、出土位置・層位からみて、灰軸陶器段皿63が実際には本址に帰属する遺物であろうとみている。軸はハケ塗りであり内外の底部寄りには施軸されない。平安時代前期。

SK01 AF30区に位置する。SD03に切り込まれる。直径1.3m程度の円形プランに復元されよう。深さは50cmを測る。

遺物は埋土上位中央を中心に出土した土師器1～6を図化した。古墳時代中期頃に比定されよう。

SK03 AF30区に位置する。全体を検出していないが、正方位を指向する方形プランの土坑であろう。1辺1.8m以上深さ70cmを測る。

埋土中位に加賀焼甕の体部破片を含んでいた。中世の土坑であろう。

SK04 AF31区に位置する。不整な紡錘形プランを有し、長軸3.3m深さ35cmを測る。組合せは不明ながら、竪穴系建物の外周溝の可能性もあろう。SB204とは重複し、その柱穴と切り合うが先後関係は把握できなかった。

遺物には土師器7～12がある。古墳時代中期の所産であろう。

SK07 プランは不明。深さ25cmを測る。土坑底でSK08のプランが確認された。SK08の上位で壁が崩落し見かけ上プランが広がった箇所との判断も可能である。

遺物には土師器14・15がある。古墳時代中期頃に比定されよう。

SK08 長軸80cm短軸60cmの隅円方形プランの土坑である。SK07坑底でプランを確認したものであるが、遺構検出面からの深さにすれば45cm前後を測ることになる。

坑底北西寄せに編物が検出された。網代は二重になっており、2枚あるいは袋物とみられる。また、網代上面には2本の棒材が編み目は斜交した状態で検出されている。時期不明。

SX01 AF30区に位置する。長軸5m程度幅2.2m深さ30cmの溝残欠状の落ち込みである。建物外周溝の

一部である可能性もあるが、組合せを抽出できない。

遺物は土師器20がある。古墳時代後期に属する。

SX02 AF30区に位置する。堅穴系建物の外周溝の一部であることが2003年度の調査の結果判明したもので、遺構全体については後報告になる。

遺物は21～23を図化した。いずれも土師器で古墳時代前期前半に比定されよう。

SX03 AE31区に位置する。長軸3.2m短軸1.9mの長方形プランの土坑である。深さは20cm程度で大ききの割に浅い。長軸は東北東—西西南西方向を指す。

遺物は土師器24～26がある。古墳時代中期末頃とみている。大溝SD10以東では数少ない古墳時代の遺構である。

SD05 AF30区に位置する。堅穴系建物の外周溝の一部であることが2003年度の調査の結果判明したもので、遺構全体については後報告になる。

遺物は27～32を図化した。いずれも土師器で古墳時代後期に比定されよう。

SD10 L1区の中央やや東、AEAF31区付近を南南東—北北西方向に斜断する古墳時代の溝。多少曲がりくねりながら北北西へ進み、途中、河道や奈良時代大溝に切り込まれるところから連続性は不確実であるものの、事業地の西辺北端付近にのびて行くようである。L1区においては幅4.3～4.8m、深さ90cmを測る。溝底では随所から湧水をみた。

層序は第17図に示したとおりであるが、遺物の取上げは主要土層の変化に従い、上から第1層・第2層・第3層・第4層の4区分で行った。全体として古墳時代中後期の遺物が主体を占めるが、下層位には須恵器が含まれない傾向にある。なお、第1層には奈良時代以降の遺物も含まれる。木製品が遺存したのは第3層以下で、図示したものは第4層出土である。

SD11・12 SD10の東側で、幅1m強の溝状の落ち込みが同程度の間隔をおいて2条検出されている。部分的にはSD10の西側にものびている。これらは近世以降の土取りに伴う溝であろう。周辺での検出事例との比較でみれば、当調査対象地においてはあまり多くなかったもので、攪乱の深度も10cm前後と浅い。

略完形の滑石製紡錘車K1が北側の落ち込みSD11から検出されている。

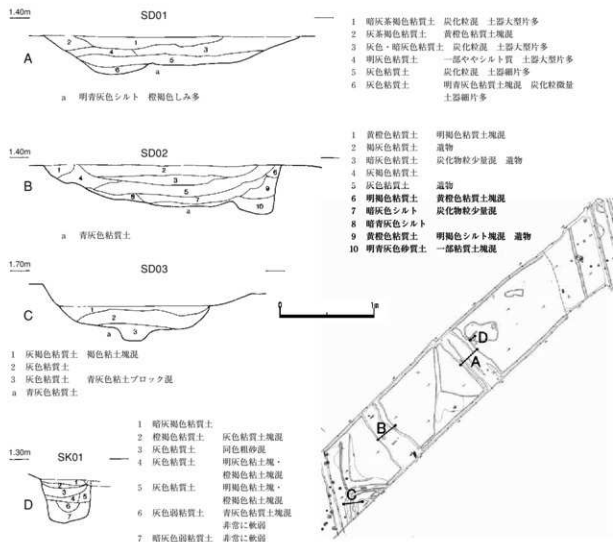
## L7区

L7区では南西端以東で遺構検出面が一段下る。後世の耕作による影響が考えられるが、遺構は古墳時代中期の溝2条と中世と推定される溝1条のみで、元来居住地であったことが少ない地点であったものと考えられる。遺構検出面の標高は南西端で1.50m、それ以外の多くの箇所では1.15m前後である。遺物は古墳時代中期の溝2条から合わせて8箱出土した。

SD01 AB34区付近に位置する。L7区の中央部を南東—北西方向に横断する溝である。幅3.0m程度深さ40cmを測る。溝底は2条の深み部分をなす範囲が多いが、先後関係ではとらえられていない。北方の区画整理事業地内ではこの溝の延長部と想定しうる溝は把握されていない。

遺物は古墳時代の土師器227～235と黒漆塗りの堅櫛W27がある。古墳時代中期に属するものであろう。

SD02 AC33区付近に位置する。L7区の西部を南東—北西方向に横断する溝である。幅2.8～3.8m深さ45cmを測る。上述のSD01と規模・走向の点で共通する。後報告を予定している地区で北西への延長部が検出されているものとみている。L1区のSD10と同様に、多少曲がりくねりながら北北西へ進み、途中、河道や奈良時代大溝に切り込まれるところから連続性は不確実であるものの、事業地の西辺北端付近にのびて行くようである。なお、検出範囲南端近くの溝底立ち上がり付近で基盤層に突き刺さっ



第19図 L7区遺構図

た直径30~40cmの樹根を検出している。この溝の開削に先行して生育していた自然木のものとみている。SD01の東岸にあるシミ状の変色部SX01や小型の土坑SK01も類似のものか。

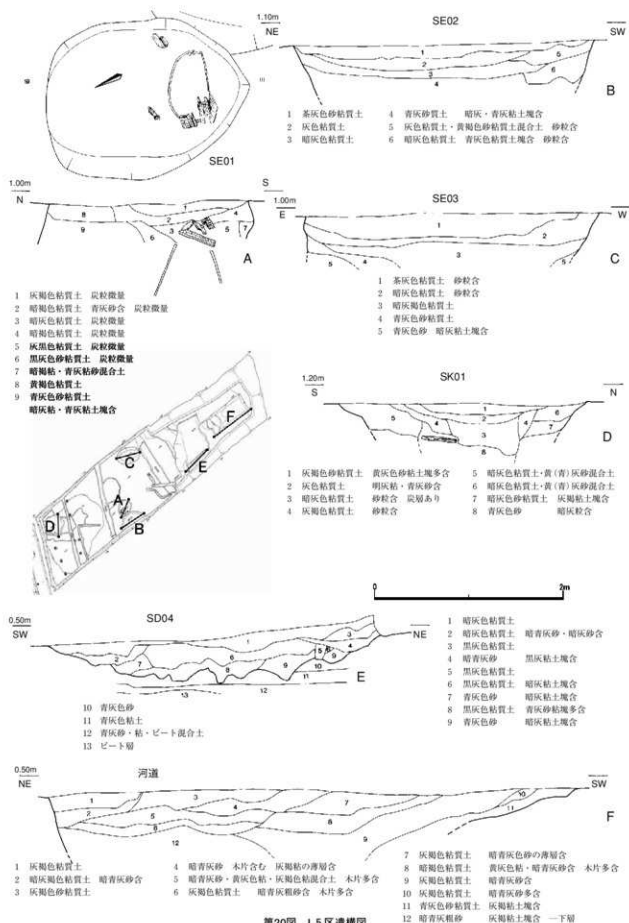
遺物は古墳時代の土師器237~243がある。赤彩の小型壺237の体部の穿孔は焼成後に施されたものである。古墳時代前期末頃に属するものであろう。

SD03 AD33区に位置する。L7区の南隅部で直角に折れ、南及び東方向にのびる溝。幅1.6m程度深さ45cm程度を測る。溝の走向と埋土の状況から中世の溝とみられる。

遺物は前代の土師器片が少量ある程度であった。

## L5区

L5区では調査区の東半が古墳時代初頭頃の河道にあたっている。河道は埋没後も永く鞍部地形であったものと見られ、同位置には中世の溝や改修前の大徳川が重複する。西側では平安時代末期の井戸や土坑が検出されている。遺構検出面の標高は南西部で1.05m、中央部の河道落ち肩付近で0.90m程度である。河道から4箱、遺構から1箱の土器類が出土している。



第20図 L5区遺構図

SB408 AA36区に位置する。現状で2×1間(376cm×276cm)の掘立柱建物。側柱建物とみられる。長軸はN22°Wを指す。

柱穴は直径30cm前後と小型のもので占められる。比較的黒色味の強い埋土をもつ。

周辺の遺構の状況から中世前期としておくが、確定は難しい。

河道 幅12m以上、深さ1.3m以上を測る。川底は大徳川方向に向かって更に降るものと予想され、L6区西部に対岸をもつ幅30m以上の河川帯の西岸付近と判断される。

上層位については重機により掘削した。遺物の包含は概して乏しかった。下位は人力掘削した。古墳時代初頭前後の土器が若干出土している(204~208)。アカ取り(あるいは粉掘い)とされる木製品W28のほか、履物とみられる木製品が出土している(図版49・未実測)。

SE01 Z37区に位置する。長軸2.2m短軸1.7mの偏円形プランを呈し、掘り方南西部に寄せて井戸側を設置する井戸。深さ1m以上を測る。井戸側は高さ60cmで直径が60cm弱に復元される曲げ物を検出した。曲げ物は土圧により著しく変形している。曲げ物の周囲には隅柱状の木杭や縦板状の板が部分的ながら認められ、二重側構造を示す。

遺物は折敷と推定される方形の薄板が出土している。W24はヒノキ、W25はスギの、それぞれ柁目板である。長軸はW24で31cm、W25で30cm程度を測る。板は両面に刃物痕跡を留めるほか、年輪軸方向の縁寄りに2箇所づつ、直交方向の縁寄り中央に1箇所づつ、点刻状の小孔が2孔1対で認められる。W24には破片がもう1つあり全形が知られる(図版44)。

周辺の状況から12世紀ころのものとみられる。

SE02 Z37区に位置する。全形を検出していないが、1辺2.6m強の胴張りの強い隅円方形プランと予想される。深さ70cm以上を測る。完掘できていない上に井戸側の痕跡を見つけられていないが、規模から井戸であろうとみている。プランではSE01に切り込まれるものと観察した。

遺物は回転糸切の土師器皿199を図示した。12世紀前半頃の所産であろう。

SE03 Y37区に位置する。長軸3.1m短軸2.2mの卵形のプランをもつ。深さは60cm以上で完掘できていない。規模から井戸とみている。

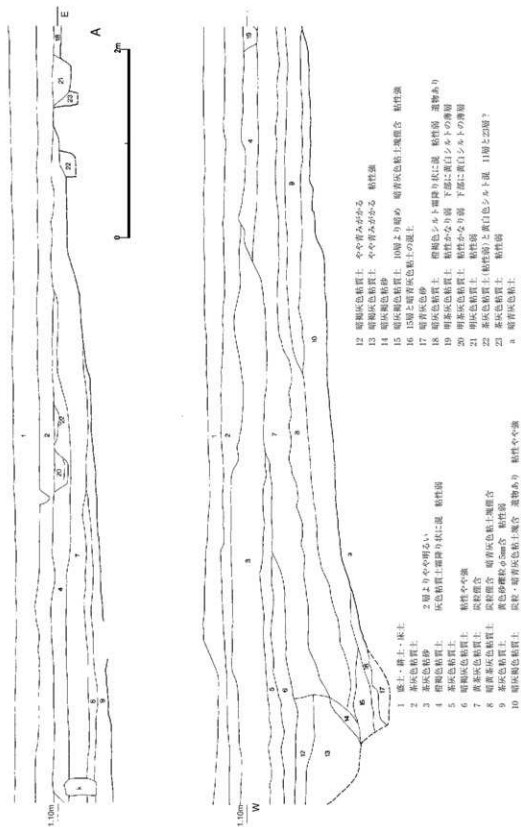
遺物は土師器の有台壇263、皿200・201、白磁の碗202などがある。11世紀後半~12世紀前半頃のものであろう。

SK01 Z36区に位置する。一辺2.5m程度の不整形プランの土坑。完掘できていない。深さ60cm以上。土層断面には中央に後から埋まったかに見える範囲があるため、井戸であった可能性がある。この部分からは机の天板と想定される有孔の方形板W26が、孔内に脚と想定できる棒材を伴った状態で検出されている(図版12)。

遺物は回転糸切の土師器皿198と上記の板を図示した。W26は長辺57cm短辺27.5cm厚さ2cmのスギの板目材で、四隅に幅2cm長さ3~4cmの方孔を穿ってある。棒材の方は腐朽が著しいため図化していないが、遺存長20cm程度を測る。

SD01 Z・AA36区に位置する。SB408の北隅柱穴を切り込んで調査区外の南南東一北北西方向に直線的にのびる細溝。幅30~50cm深さ25cmを測る。溝底に葦束を敷き並べた近代以降の暗渠であるが、当遺跡群での検出は稀であった。今回報告のA5区西部を南北に横切るように検出された暗渠と一連のものであろう。

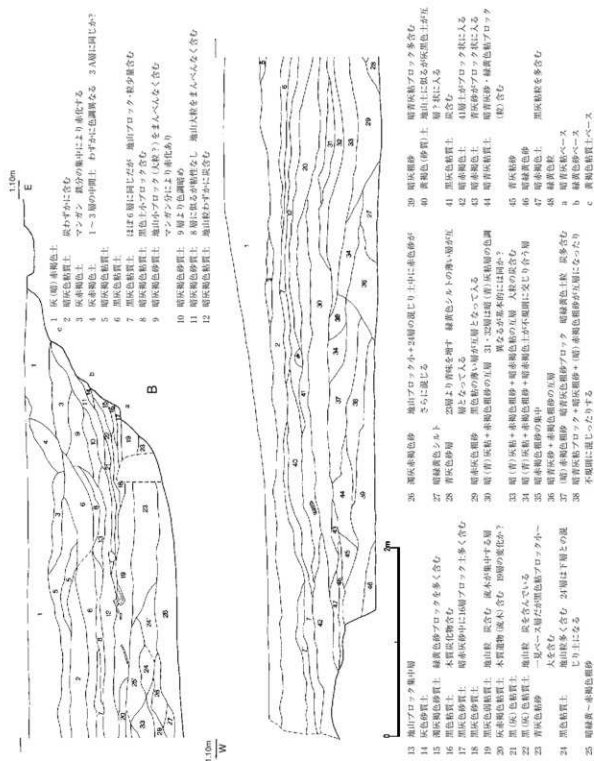
SD05 Y38区に位置する。河道の西岸部を切り込んで南北方向にのびる溝。幅4m余り、深さ90cmを測る。規模と延びの方向から、今回報告のA5区で検出された溝SD01と連続する可能性がある。中世の溝であろう。



第21図 L6区横断面1

L6区

L6区は大徳川を渡った東岸の調査区である。西半は大徳川へ降る傾斜面となり、さらにその南辺は古墳時代初頭頃の遺物を含む河道である。東側では中世の遺構が若干検出されている。遺構検出面



第22図 L6区遺構図2

の標高は調査区中央で1.05m程度、東端で1.30m弱である。出土遺物は河道からの古式土師器を中心に10箱程度であった。

SB409 この建物は南辺が金沢市教育委員会が調査した部分にかかる(金沢市埋蔵文化財センター編「畝田大徳川遺跡」2003年のSB01)。本書の地区割ではV・W42区に位置する。3×2間(608cm×480cm)の掘立柱建物で、側柱建物である。長軸はN22°Wを指す。

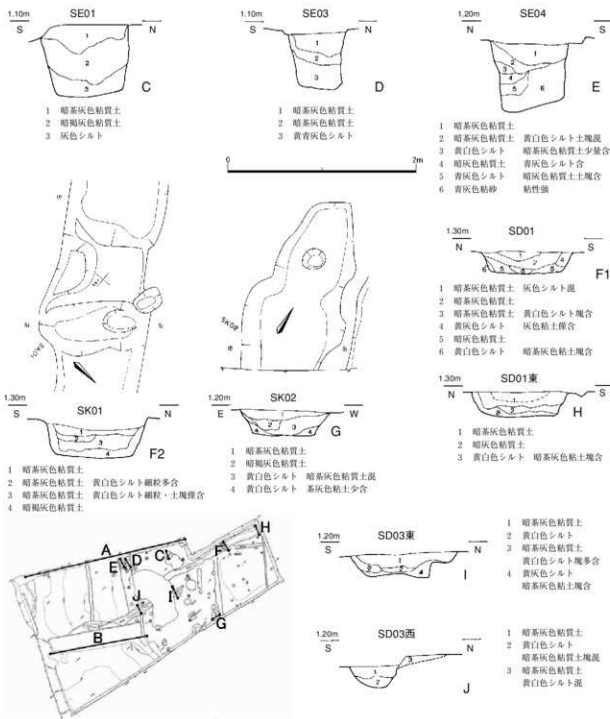
柱穴は直径80cmを超えるような大きなもので、特に東側柱列が大きい。建物と認識できるまでには土

坑あるいは井戸と推定していたものすらある。各穴の深さが30~40cm程度であることが判明すると、建物柱穴と理解された。

周辺の状況から中世の建物であるとみられる。

SB410 V43区に位置する。現状で1×1間 (320cm×256cm)。長軸はN60° Eを指す。

柱穴は直径25cm前後、深さ10cm内外と弱いが、遺構面精査の段階で組合せが充分に予測できる程度にそれぞれ明瞭に検出されていたものである。



第23図 L6区遺構図3



周辺の状況から中世の建物とみられる。

河道 L6区で河道とした部分には、大徳川に向かって緩やかに降る中世以降の傾斜地とそれを除去して検出される古墳時代初頭頃までの遺物を含む蛇行する河道といった2つの異なった落ちを含んでいる。前者については遺物の乏しいもので等高線が大徳川に平行する方向にはいる。後者は幅の広い落ち込みとなるもので、調査範囲では標高-0.5m付近で河底らしき砂層を検出した。南方から進んできて調査区南部を挟むようにして方向を西に変えている。L5区で検出された河道とは一連の流路である可能性もあろう。

SE01 V42区に位置する。直径1m程度の円形プランを呈し、深さ60cmを測る。側材をもたない小規模な円筒土坑で、調査時の湧水も僅かであったため、井戸とはみなし難い。

時期を決定できるような遺物は出土していないが、遺構の特徴と周辺の状況から中世のものともみている。

SE03 V41区に位置する。長径90cm程度の楕円形プランを呈し、深さ60cmを測る。側材をもたない小規模な円筒土坑で、調査時の湧水も僅かであったため、井戸とはみなし難い。SE04とは接するように検出されているが、切り合い関係では捉えられなかった。併存の可能性もある。

時期を決定できるような遺物は出土していないが、遺構の特徴と周辺の状況から中世のものともみている。

SE04 V41区に位置する。長径1m程度の楕円形プランを呈し、深さ60cmを測る。側材をもたない小規模な円筒土坑で、調査時の湧水も僅かであったため、井戸とはみなし難い。

土師器の柱状高台片209が出土しており11世紀末頃を中心とした前後の年代が考えられる。

SD01 L6区の北東隅から南南西方向にのびる溝。幅1m前後を測り、比較的直線的な走向を示す。検出範囲中程で、土坑SK01が溝幅一杯に掘り込まれている。溝底はSK01の西1m弱の地点で15cm前後低くなる。SK01はSD01に付随する遺構であろう。SD01の西端は攪乱によって切り込まれた先が不明である。攪乱範囲内でSD03に続いていた可能性がある。

遺物は須恵器無台杯210がある。平安時代前期頃か。

SD03 調査区中央を東北東-西南西方向に走る溝。幅1m前後を測り、比較的直線的な走向を示す。溝は攪乱により東西に分断されているものと判断した。

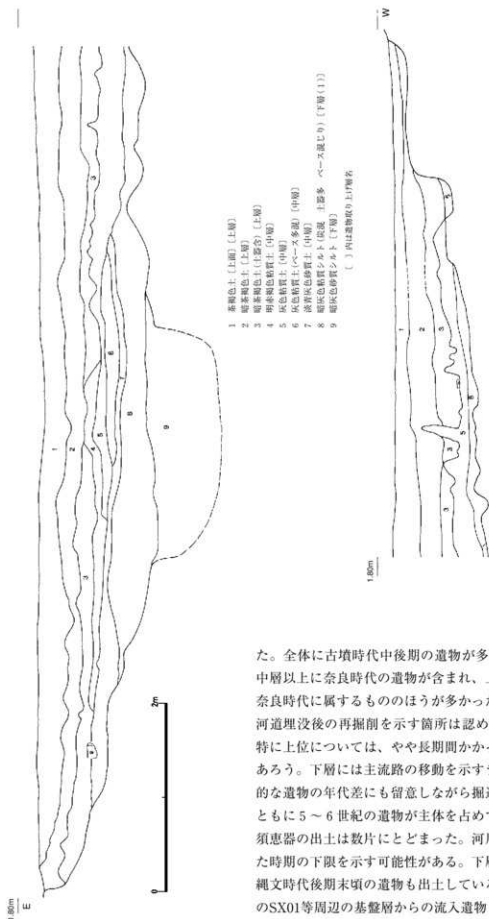
遺物には須恵器無台杯F5がある。外底面に墨書「平」がある。平安時代前期頃とみられる。

## L8区

L8区では調査区の中央から西端にかけて河道が検出された。河道以東では柱穴や古墳時代中後期の土坑が検出されている。また、河道東側に縄文時代後期の落ち込みが検出されている。遺構検出面の標高は東辺部で1.6m前後を測る。遺物は河道出土分を中心に40箱程度出土した。

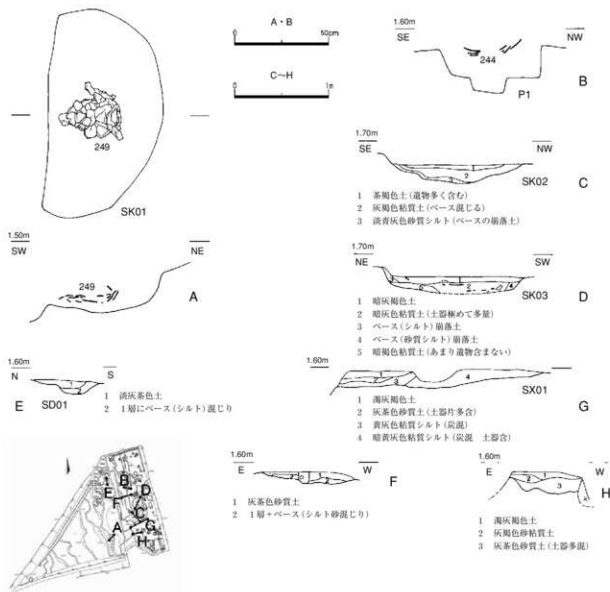
河道 調査区中央から西部にかけて検出されている。西端は基盤層が立ち上がるため、この付近での上面幅は20m程度と予想される。標高0.2m位まで掘り下げた時点で著しい湧水による東東部の崩落が始まったため完掘できていない。下位埋土のボーリング探索を試みたところ、河道内の複数地点の標高-0.3m付近で締まった灰色細砂層にあたったため、ほぼ、このレベル付近が河道底であろうと推定された。規模と位置関係から判断して、L2区で検出された河道SD08と一連の落ち込みであろう。なお、L2区において河道に重複する中世溝SD05の延長に相当するような落ち込みは、当地区では確認されなかった。

河道は掘削できた分については上から上層・中層・下層・下層2の4層位区分で遺物の取上げを行っ



第24図 L8区遺構図1

た。全体に古墳時代中後期の遺物が多く出土しているが、中層以上に奈良時代の遺物が含まれ、上層の実測土器では奈良時代に属するもののほうが多かった。分層の結果には河道埋没後の再掘削を示す箇所は認められなかった。特に上位については、やや長期間かかって埋没したものであろう。下層には主流路の移動を示すラインがあり、平面的な遺物の年代差にも留意しながら掘進したが、新旧流路ともに5～6世紀の遺物が主体を占めていた。下層2では須恵器の出土は数片にとどまった。河川として機能していた時期の下限を示す可能性がある。下層及び下層2からは縄文時代後期末頃の遺物も出土しているが、こちらは後述のSX01等周辺の基盤層からの流入遺物とみられる。



第25図 L8区遺構図2

河道からは多くの土器や木製品が出土した。埋土に滑石製白玉 (J161~178) が含まれていた点もL2区で検出された河道SD08の場合と同様である。須恵器坏身301は、上記の新流路の下位にあたる箇所からの出土であり、流路の変遷年代を示す資料ともなりうる。厚手の器壁を持つ土師器壺311の体部内面には、長径8mm程度の回転長円体状の空隙が認められ、焼成前の土器胎土中に何らかの種子が混入していたことを窺わせる。土製品E7は土偶の頭部とみられる。墨書土器はいずれも須恵器無台杯で、字句は外底に「秋葛」F6、「倉持」F7とある。F7口唇にみられる小さい欠損部付近には油煙状の黒色物質が付着している。灯明器として用いられた可能性があろう。小型の不明木製品W75は丁寧な面調整で仕上げられている。材はムラサキシキブ。

SB302 AL・AM30・31区に位置する。建物の半分程度が調査範囲外にあるが、3×1間(548cm×206cm)以上の掘立柱建物で、側柱建物であろう。長軸はN19°Wを指す。柱穴は直径乃至1辺が50cm程度で深さ20cm内外を測る。柱穴には古墳時代の土坑SK02・03を切り込むものがある。

奈良時代頃のものともみている。

SK01 AM30区に位置する。河道東肩部にあたる箇所であり、遺構としての認識が遅れたため、河道との先後関係は不明。周辺の遺構との規模・形状の比較では土坑SK03に近似したものの感を受ける。

遺物は土師器249が出土している。古墳時代中期の遺構であろう。とすれば、河道の埋没に先行したのか。

SK02 AM30区に位置する。長軸3.2m短軸1.5m前後の不整楕円形の落ち込みで、深さ20cm程度を測る。

遺物は土師器片が出土している。古墳時代中期の遺構であろう。

SK03 AL30区に位置する。直径1.4mの円形プランの土坑で深さ25cmを測る。

埋土上位に須恵器壺破片254が、中央付近の坑底に完好品の土師器壺4点250～253が検出された。古墳時代中期の遺構であろう。

SX01 河道の東岸に沿うようにして、土器片や炭化物をまじえたシルトが帯状に認められたためこれをSX01として掘削した。長さ10mにわたって検出した。幅については最大で3m以上を測るが、落ち込みの西側が攪乱され、また河道によって削平されているため深さとともに詳細は不明である。

縄文時代後期末頃の落ち込みである。当時における自然地形の落ち肩部分であった可能性もあろう。

### 第3節 A5・6・7区・P区の調査

#### 調査区の概要

A地区は都市計画道路福久・福増線の海側車線に相当する箇所である。本書では調査区東端部にあたるA5・A6・A7区の調査結果を所収する。P地区には、上記の道路に加え、その大徳川橋の建設に際して掘削された仮放水路部分をも含んでいる。A5区南部については2000年度に、P区については2001年度に、その他の地区については2002年度に、それぞれ発掘調査を実施したものである。P区については平面精査後のトレンチ調査である。

#### A7区

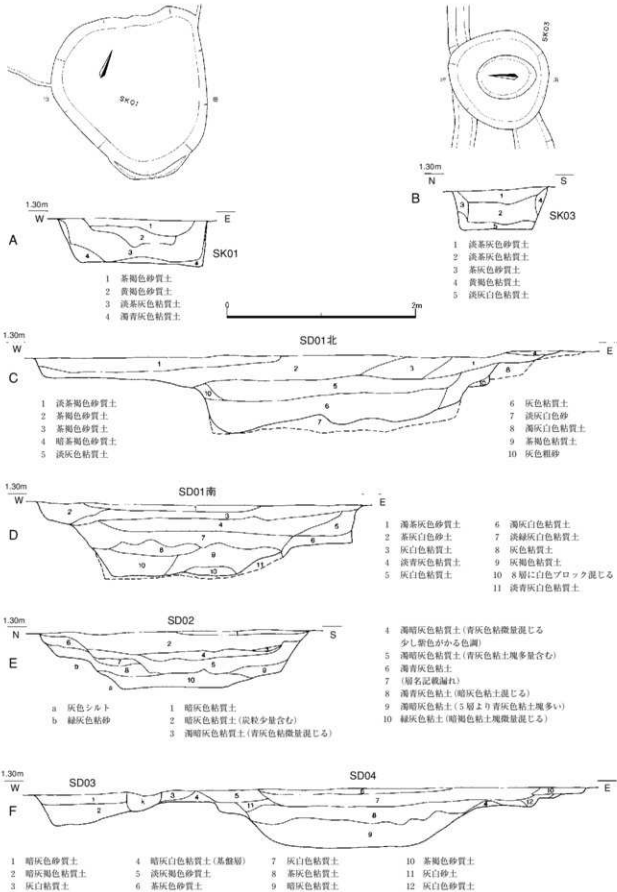
A7区については2002年度に発掘したものである。現道部が多く細切れの調査となった。中世溝がT字状に分岐する部分が多く検出されている。攪乱や未調査箇所により、全形を窺えなかった部分も多いが溝の接続と先後については後述のように判断している。SK02など野井戸とみられる円形の攪乱坑が比較的多い地区である。遺構検出面の標高は南西端で1.4m、北東部で1.15m程度である。遺物は合計しても2箱程度と少ない。

SK03 Y31区に位置する。直径1mの円形プランをもつ円筒土坑。底で長径50cm程度の落ちがあり、深さ60cmを測る。

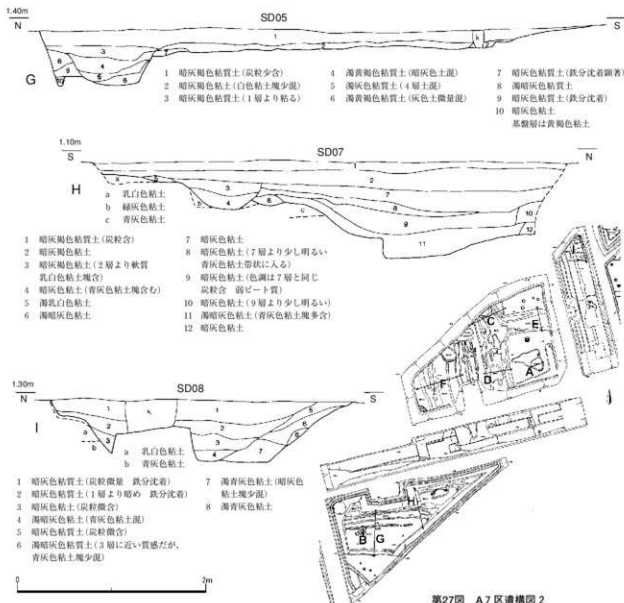
遺物はないが、中世に属するものと判断している。

SD01・02・07 SD01はA7区北部を南北に進む溝で調査範囲内で東へのびる溝SD02を分岐する。SD02は市道部分の調査区にはのびていないので、未調査範囲内で立ち上がるもしくは南北に折れるものであろう。また、調査区南部を東西に進む溝SD07は調査区東方で折れてSD01につながるものとみている。それぞれ幅3～4m深さ60～80cmを測る。

土師器小皿363～366、白磁碗368などが出土しており、13世紀頃の土地区画に関係する溝であろう。SD03・04 SD01の西方3mより西を南北にすすむ溝で、2つの深み部分からなる。SD04は東西市道下で検出され、西側へのびる溝（未命名・後報告のT区においてはSD01）と一連のものである。



第26図 A7区遺構図1



SD03については同溝を越えて南にのびることはない。SD04で深さ70cmを測る。

掘削範囲では良好な遺物に恵まれなかったが、走向・埋土・規模などからみて、中世の土地区画に関係する溝であろう。

SD05 調査区南部を東西方向に直線的に横断する溝。西方へののびはA1区・T区などで検出されているものとみられる。幅1m弱深さ40cm前後で、他の東西・南北方向の溝よりは小規模である。SD07の南辺をすすみ、その上層埋土を切り込んでいる。

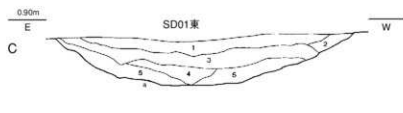
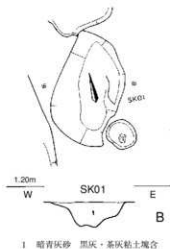
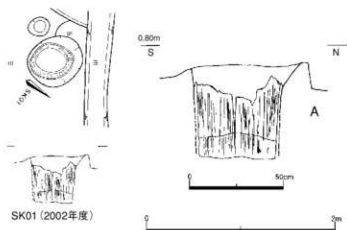
掘削範囲では良好な遺物に恵まれなかったが、中世の土地区画に関係する溝であろう。

SD08 A7区北東部で検出されたこの溝は、A5区(2000年度調査)のSD01に直統する東西方向の溝である。

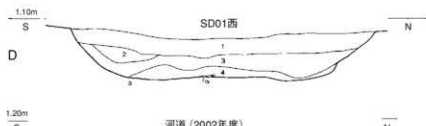
掘削範囲では良好な遺物に恵まれなかったが、中世の土地区画に関係する溝であろう。

#### A5区

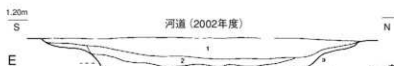
A5区は大徳川西の部分である。2000年度に南部を、2002年度に北部を発掘調査した。2002年度の



- 1 薄灰色粘砂
- 2 (暗) 緑灰砂 (暗) 緑灰粘質土混
- 3 黒灰色粘質土 やや砂味がかる 炭粒含
- 4 暗灰色粘土
- 5 緑灰砂 3層土ブロック含む
- a (暗) 緑灰粗砂



- 1 薄灰色粘砂 鉄分粒が逃げて集中 炭粒含む
- 2 (暗) 緑灰砂 3層土ブロック含む
- 3 黒灰色粘質土 4層土ブロック散在する やや砂味がかる
- 4 緑灰砂
- a (暗) 緑灰粗砂



- 1 暗青灰色粘質土(細砂多含 鉄分沈着 固くしまる 炭粒含)
- 2 暗灰褐色粘質土(青灰色粘質土塊多含 炭粒含 細砂少含)
- 3 暗灰褐色粘質土(青灰色粘質土塊と青灰色細砂を多含 炭粒含)
- 4 暗灰褐色強粘質土(青灰色粘質土塊・青灰色細砂を多含 黄白色粘質土をシミ状に含 炭粒少含)



- 1 黒灰色粘質土(鉄分沈着)
- 2 灰褐色粘質土(斑点状に黒褐色粘質土塊を含)
- 3 暗灰褐色粘質土(シミ状に青灰色粘質土を少含)
- 4 暗青灰色粘質土
- 5 灰褐色粘質土(細砂多含 鉄分沈着)
- 6 濁暗灰褐色粘質土(青灰色の細砂と粘質土塊を多含)
- 7 暗灰褐色粘質土(シミ状に青灰色粘質土を少含)
- 8 青灰色粘質土



第28図 A5区遺構図

調査工程上、空中写真測量を実施できなかった。遺構検出面の標高は南西部で1.1m北部で0.95mを測り、東半は大徳川に向かって降り標高0m程度になる。遺物は合わせて6箱程度である。

SB424A V35・36区に位置する。東西2間(480cm)以上南北1間(208cm)以上の総柱建物でN4°Wを指す。柱根が遺存した近在近似の5柱穴から想定したものであるが、柱列の通りは良くない。柱穴は直径35cm程度で樹種同定を経た4本の柱はいずれもネズコであった。

方位及び建物の構造から、中世に属するものであろう。

SB424B V35・36区に位置する。東西1間(240cm)以上南北1間(240cm)以上の建物でN3°Wを指す。

方位及び建物の構造から、中世に属するものであろう。

SH06 T・U36区に位置する。調査区中部南より検出された溝SD02を外周溝に見立てることによって想定される堅穴系建物。SD01の屈曲部付近を建物の中心付近に見立てれば一辺14m程度の隅方方形プランに復元される。この場合、外周溝の1/4程度が検出されたことになり、主柱穴は4基のうち南東辺の2基が検出されたことになろう。

周溝及び柱穴からは時期決定につながるような遺物は出土していない。遺構の形状と埋土の状況からは弥生時代中期～後期頃に属することが予想される。

SK01(2002年度調査) S36区に位置する。長軸60cm短軸50cmの楕円形プランの筒型土坑の中に、底のない楕円形の木製桶W61を埋設した遺構である。近辺での類例から井戸と考えている。検出面からの深さは60cmを測り、底部で湧水をみた。

井戸側内からは土師質の管状土鍾E11が出土しているのみであるが、遺構の類例から年代は弥生時代後期を中心とした前後の時期幅で考えられる。

SD01 調査区中央の東西溝で、幅3.2m深さ70cmを測る。東端は調査区内で屈折して南へのびる。西方へは当区2002年度調査区の南端の落ち込み(「河道2」とした部分)・A7区SD08を経て、さらにのびる。ただし、延長線上方の調査区には相当する溝が検出されていないので、A7区で検出の南北溝群のいずれかと一連の水路であったものとみられる。南方への延長部にはL5区SD04が位置しており、こちらとは連続する可能性がある。

SD01からは白磁や土師皿が出土しており12～13世紀を中心とした年代が考えられる。なお、前代の混入遺物とみられる土師質の摩滅した土器片352は、器種不明なまま「匙」に見立てて図化しているが、瓶底部の蒸気孔間の破片であろう。

SD04 SD01の北方2m程度あけて東西にすすむ溝。2002年度調査区においては「河道1」としている。幅2.8m深さ55cm程度を測る。延長部については、西方は未調査、東方は検出面の削平による降下により調査区内で立ち消えとなる。

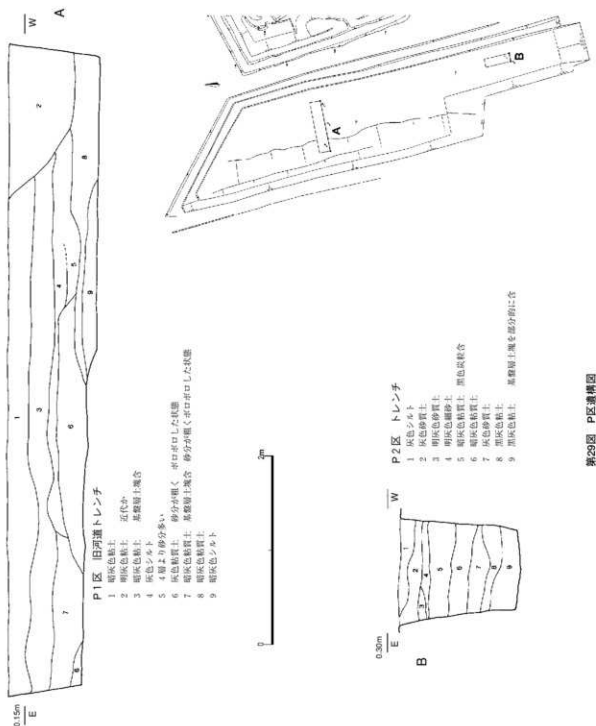
検出面で開元通宝M2、埋土内から青白磁合子身347が出土している。SD01と相前後した時期の溝で、土地区画に関連したものであろう。

## A6区・P区

A6区は大徳川東の調査区で、調査区の全体の中でも最も東北にあたる箇所である。調査区の西寄り2/3以上が中世の河道であり、東側には柱穴様の小穴が散在する。検出面の標高は東端で1m余りを測り東方へはさらに上昇気味である。河道については、北から1・2・3トレンチとした3本の調査溝で標高-0.6m程度まで掘り下げて基盤層を確認したが傾斜は続いており、流路の最深部はもっと西側にあるものと予想される。遺物は全て河道からの出土で、15箱程度の土器類のほか木製品も多量にある。

河道はP区全体を範囲に含んでいる。同区では河道が全城に及ぶことを平面的に確認した後、トレ

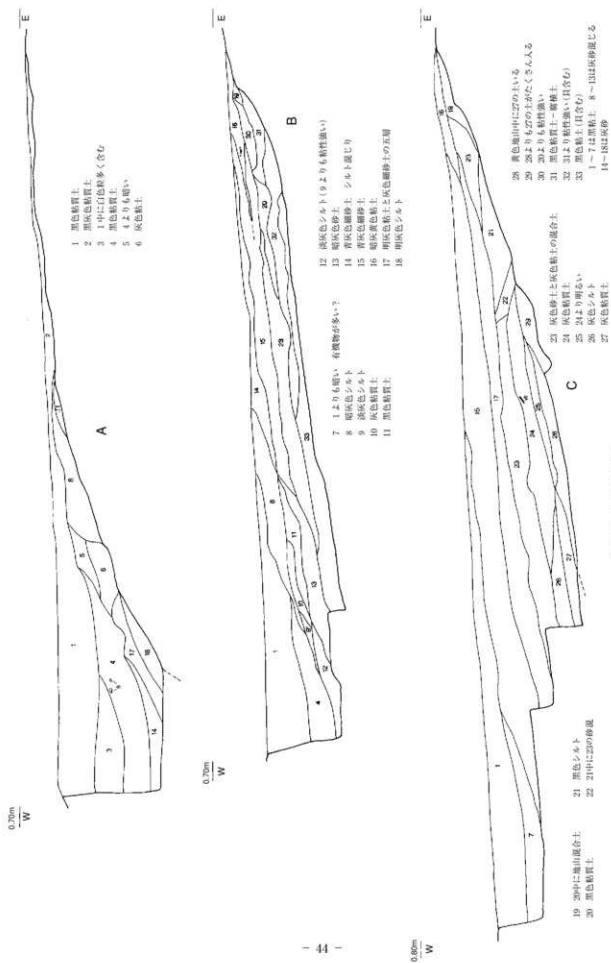




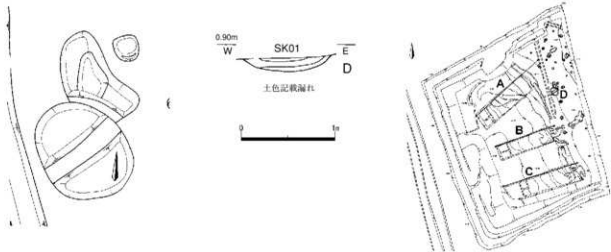
ンチ2箇所による土層観察を行った。南側のトレンチでは標高-1.1m余りまで掘り下げているが川底には至らなかった。P区のトレンチからは弥生時代末頃の土器が1箱弱出土している。

これらの落ち込みは、単一時期の流路ではないものの、現在の大徳川流路付近を軸にして東西の振幅30～50m程度の河道帯をなしていたものの一部であろう。

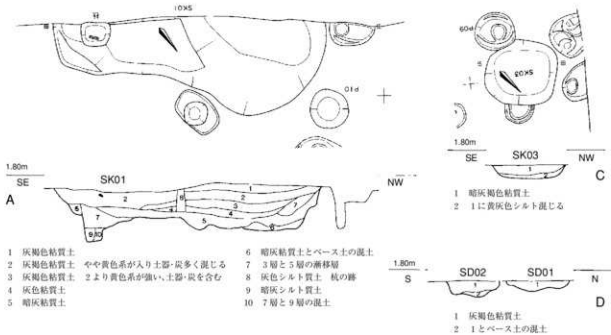
遺物はA6区出土のものを図示できた。12世紀代を下限とする土器類のほか、木製品・鉄製品M3・4が出土している。木製品には挽物の椀類W46～56が多く含まれていた。また、呪符W70（本遺跡の9号木筒）、032型式の付札木筒W71（12号木筒）や鳥形W72も出土している。W71には片面のみ墨書が認められ「□会手八斗」と判読される（当センター和田龍介による）。



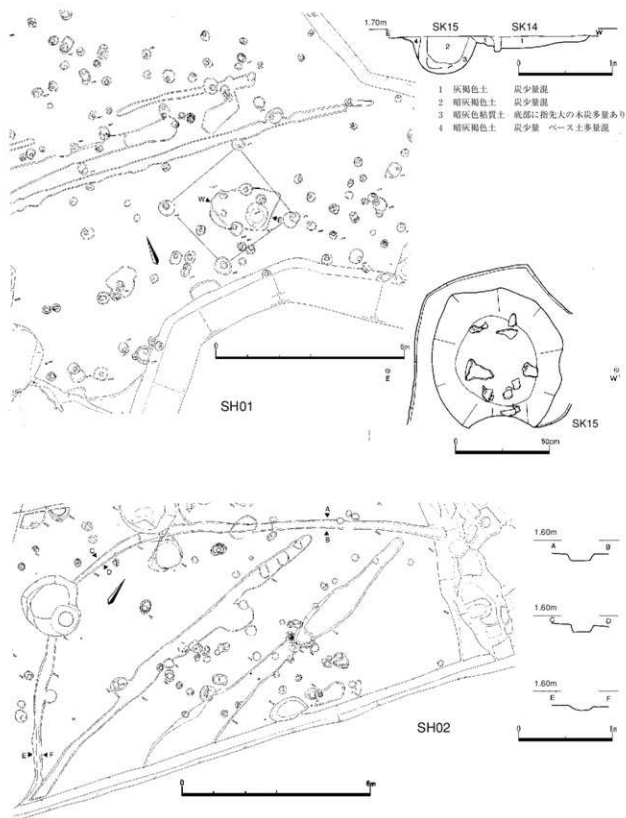
第30図 A5区横断図1



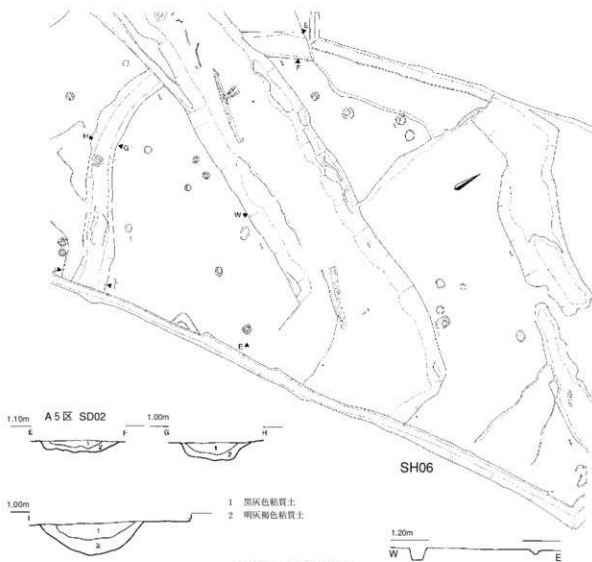
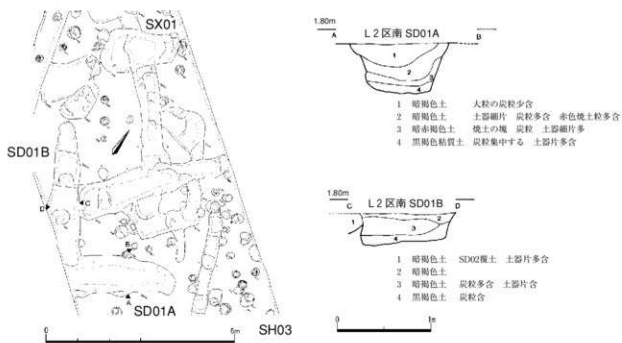
第31図 A6区遺構図2



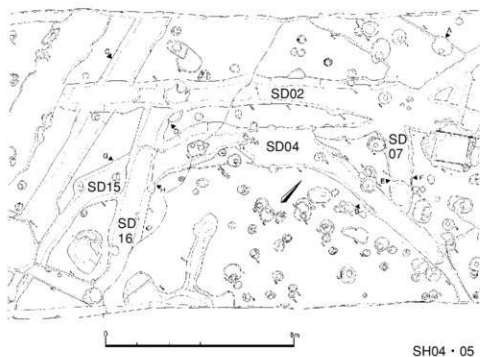
第32図 Z区遺構図



第33図 建物跡遺構図1



第34図 建物跡遺構図 2



SH04・05



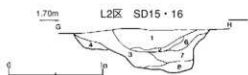
- |           |                    |             |                        |
|-----------|--------------------|-------------|------------------------|
| 1 暗褐色土    | SD01覆土 灰色ブロック土混    | 6 赤褐色土      | ブロック?                  |
| 2 暗褐色粘質土  | 地山ブロック小混じる         | 7 暗褐色土      | 土器混じる 灰入る              |
| 3 (暗) 褐色土 | 土器混じる SD03の物か?     | 8 黒褐色土      | 土器多量に含む 灰わずかに入る SD07覆土 |
| 4 暗褐色粘質土  | 2層に似る              | 9 暗(灰)赤褐色土  | 土器小片含む 灰わずかに含む         |
| 5 暗灰褐色土   | 地山ブロック大混じる SD03覆土? | 10 暗(灰)赤褐色土 | 9層より黒味帯びる              |
|           |                    | 11 暗(灰)赤褐色土 | 地山土入る                  |



- |        |                       |                    |                    |
|--------|-----------------------|--------------------|--------------------|
| 1 暗褐色土 | 地山砂多含む                | 4 黒灰粗砂             | 地山ブロック小含む          |
| 2 暗褐色土 | 1層より暗 地山ブロック大多含む      | 5 暗褐色土             | 2層と似たがほとんど地山土を含まない |
| 3 暗褐色土 | 灰粒わずかに含む              | 6 暗黄褐色土            | 地山土の混り返し土か         |
|        | 2層とはは同だが地山ブロック小になる(多) | 7 暗褐色土             | 赤褐色地山土粒小含む         |
|        |                       | 8 黒褐色粘質土           |                    |
|        |                       | 1~5層がSD14(赤黒建物跡)埋土 |                    |

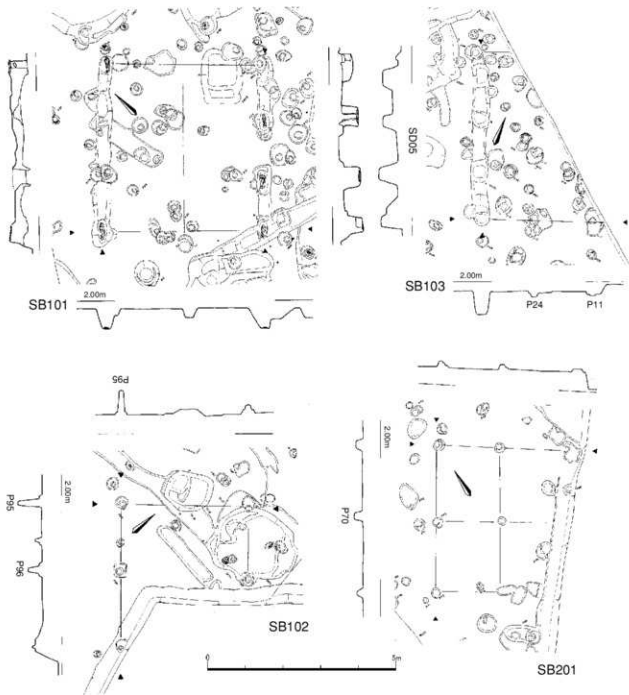


土層注記もれ



- |              |                            |
|--------------|----------------------------|
| 1 暗褐色土       | SD16埋土                     |
| 2 地山ブロック密状集中 |                            |
| 3 黒褐色粘質土     | SD15埋土                     |
| 4 暗褐色土       | 地山+3層土混じり                  |
| 5 暗褐色土       | 地山小ブロック多含む SD16埋土          |
| 6 暗褐色土       | 1層にはは同 わずかに地山ブロック含む SD16埋土 |
| 7 黒褐色土       | 地山ブロック小多集中 SD15埋土          |

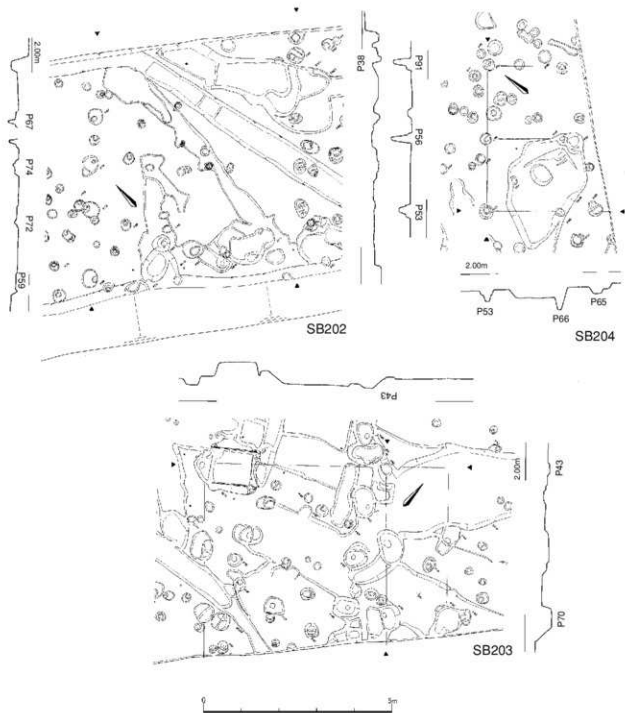
第35図 建物跡遺構図 3



第36図 建物跡遺構図4

#### 第4節 Z地区の調査

Z区はL3区とA3区間の金沢東部環状道路予定地を横断する水路が設置される地点で、北東側に幅2mのZ1区、南西側に幅1mのZ2区の平行する2筋の直線トレンチである。2001年度に発掘調査を実施したが、着手時点までに盛土されていたため見かけ上、非常に深い調査区となった。遺構検出面の標高は平均で1.6m前後を測る。

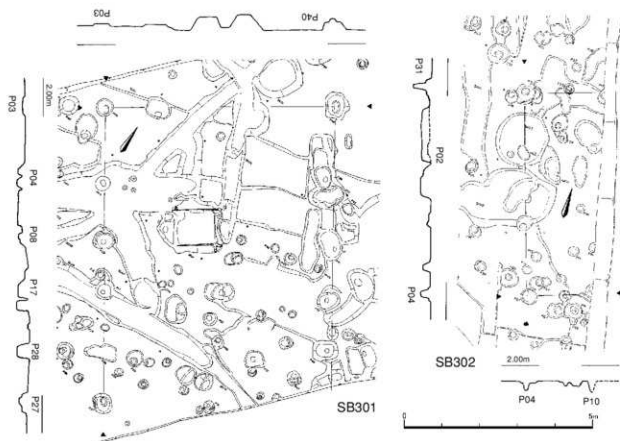


第37図 建物跡遺構図5

Z1区Z2区ともに柱穴・溝が遺構の主体を占める。調査範囲が狭小なため詳述は控える。Z1区南端の柱穴はL3区SB404の一部であるかもしれない。

Z区からは遺物の出土は1箱弱にとどまった。良好な一括遺物及び希少な出土物もない。出土遺物は中世ないしは古墳時代中後期に属する。





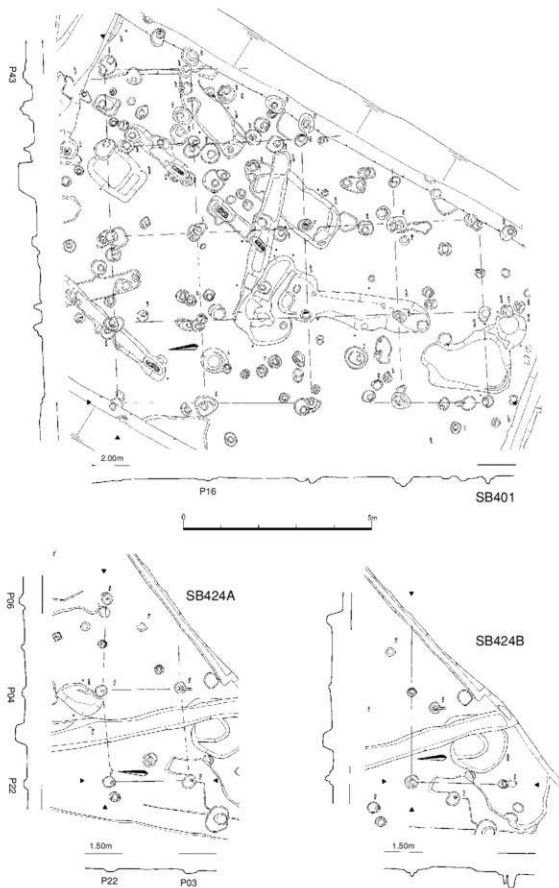
第38図 建物跡遺構図 6

建物番号	時期	構成遺構地区	構成遺構番号	全体プラン	全形規模	柱穴配置	柱穴間距離	構成柱穴番号	柱穴実測遺物	構成遺構出土実測遺物
SH01	弥生	L3	SK14・15			正方4	300	P52 60 76 77		184 185
SH02	古墳	L2	SD09	圓丸方	辺13m以上					
		L2南	SD01A							82-86 867 88
SH03	古墳 後期	L2南	SD01B	方	辺約7m					94-99
		L2南	SK01							
		L1	SD04							
SH04	古墳 中期	L2	SD15	張丸方か						
		L1	SD02							
SH05	古墳 後期	L1	SD07	方か	辺約7m					
		L2	SD16							33
SH06	弥生	A5	SD02	圓丸方	辺14m程度か	正方4か	310			

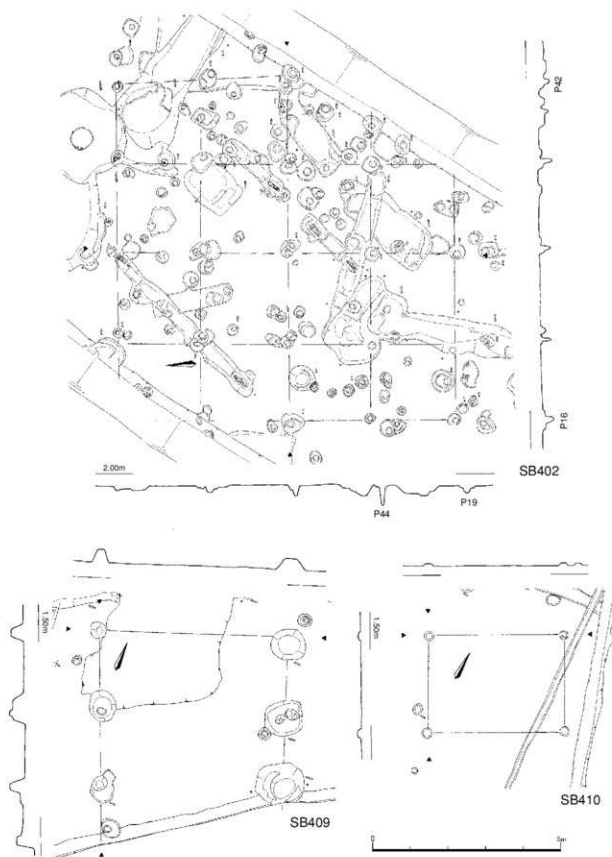
第3表 竪穴系建物一覧

報告番号	地区	時期	長軸方位	補正方位	長辺間規模	短辺間規模	長辺実規模	短辺実規模	特記事項	構成柱穴文字による実測遺物あり の柱穴番号(下線は遺構あり)	実測遺物
SB101	L3	古墳前期	51E		3	1	440	424	布面(瓦葺軒社)		
SB102	L3	弥生中期	34W		2+	1	380	340	礎柱	95 96 98	
SB103	L2南	古墳前期	24W		3	1	372	300	布面	SD05	
SB201	L2	古墳か	30E		2	1+	378	171	礎柱か	70	
SB202	L2南	古墳中期か	42E		3+	1+	624	540	平行する柱列	38 59 67 72 74	
SB203	L1	古墳か	38W		2+	1+	390	648	東庭	43 70 44 50	92
SB204	L1	古墳か	54E	36W	2	1+	384	188	礎柱	53 56 66 68 90 91	
SB301	L1	奈良	32W		5+	3	768	604		03 04 08 17 28 27 40 39 41 42 48	J1
SB302	L8	奈良か	19W		3	1+	548	206		02 04 17 31	
SB401	L3	中世	4E		4	4	984	832		16 20 21 10 31 25 42 43	
SB402	L3	中世	3E		4	4	912	804		16 37 29 44 19 24 41	
SB403	L3	中世	0		2+1	2	514	444	西庭	54 55 82 83	
SB404	L3	中世	3E		5+	4	1024	824	礎柱	89 94 90 L251 L252	
SB405	L3	中世	4E		3	2+1	612	394	礎柱 西庭	86 94 88 93	
SB406	L3	中世	86W	2E	3	1+	544	212			該当なし
SB407	L1	中世	8W		4+	1+	880	220	礎柱	77	
SB408	L5	中世	22W		2+	1	376	276	礎柱		該当なし
SB409	L6	中世	22W		3	2	608	480			該当なし
SB410	L6	中世	60E	30W	1+	1	320	256	柱穴浅い	08 SE02 SK04 SK03	
SB424A	A5	中世	86E	4W	2+	1+	480	208			該当なし
SB424B	A5	中世	3W		1+	1+	240	240			該当なし

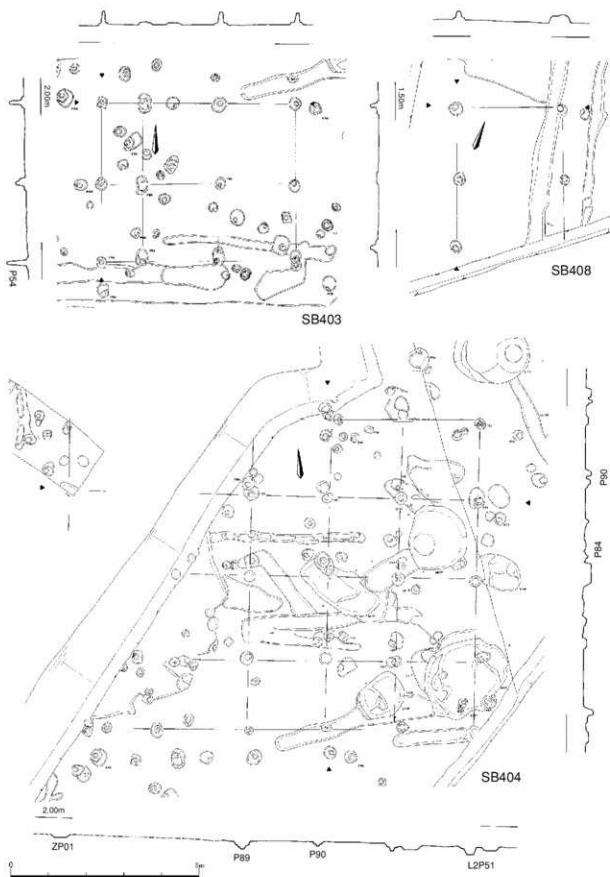
第4表 掘立柱建物一覧



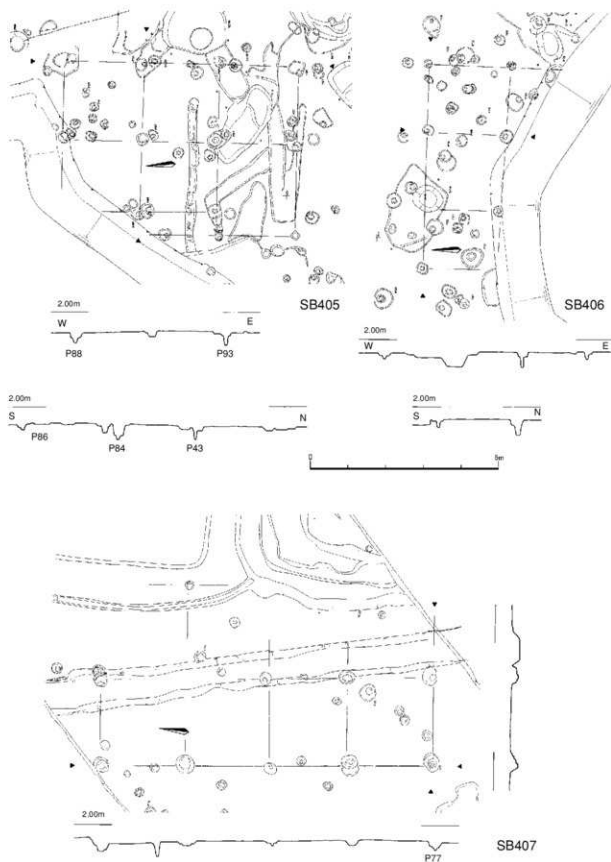
第39図 建物跡遺構図7



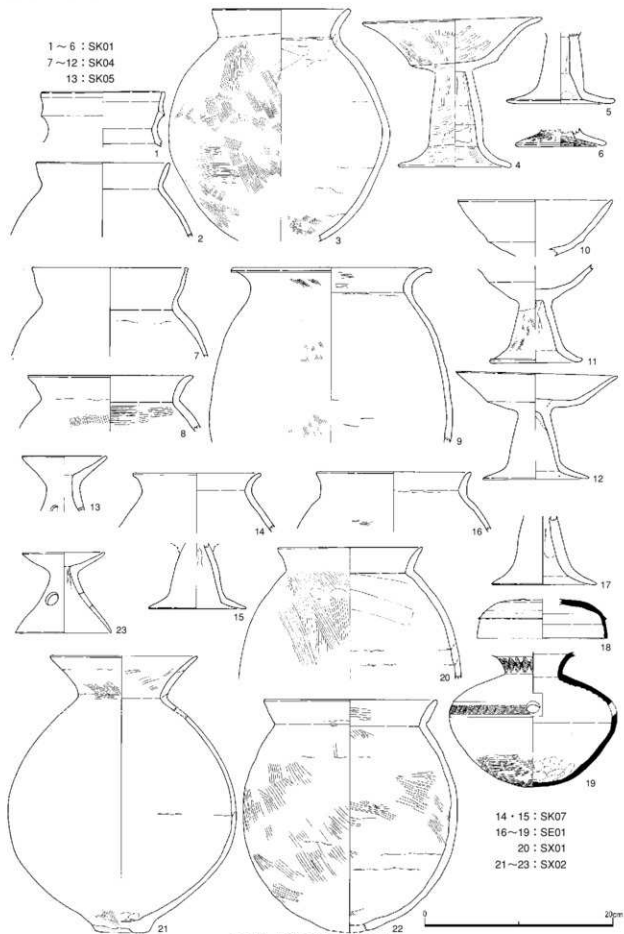
第40図 建物跡遺構図8



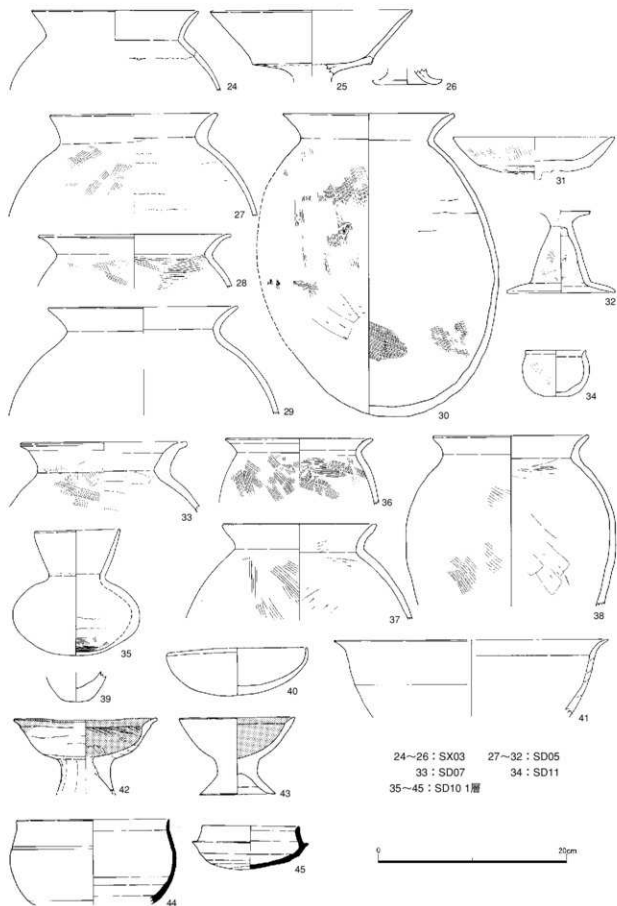
第41図 建物跡遺構図9



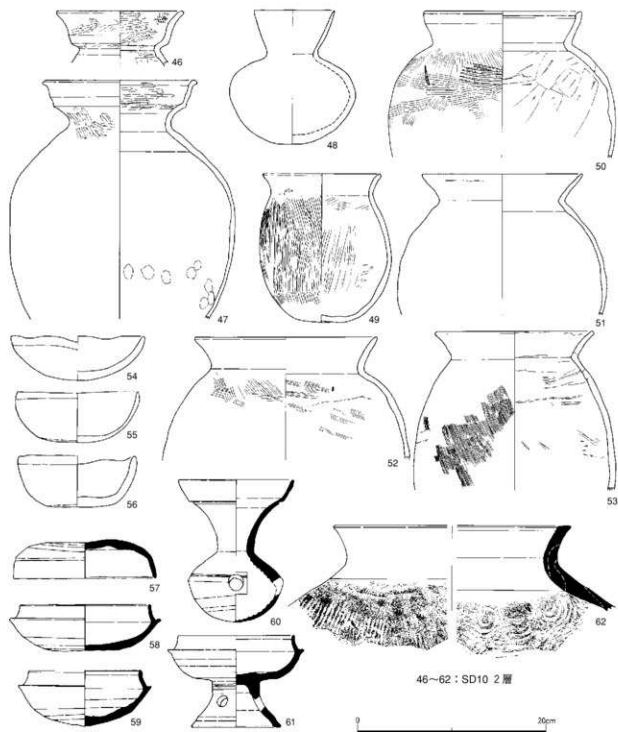
第42図 建物跡遺構図10



第43図 土器実測図 (L1区の1)



第44図 土器実測図 (L1区の2)

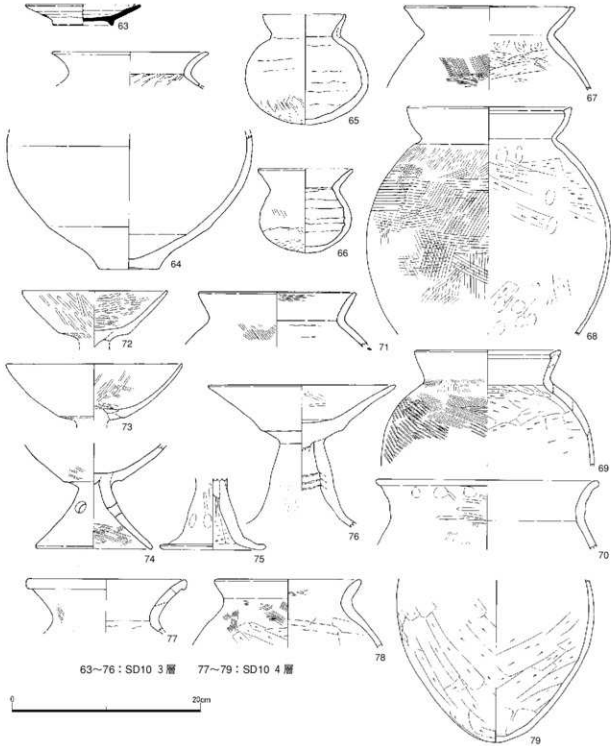


第45図 土器実測図 (L1区3)

登録号	種別	器種	細分器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	埋没深さ	口径	器高(残存高)	底径	その他の寸量	実測出	ランク	登録号
1	土器	壺	E1c5	00	L1	SK01		B			127	(59)			01b	C	35
2	土器	壺	J1	00	L1	SK01					140	(78)			01b	C	32
3	土器	壺	J2	00	L1	SK01		C			142	(246)			01b	C	30
4	土器	高坏	11か	00	L1	SK01		A			190	153~160	120		01b	C	31
5	土器	高坏		00	L1	SK01		A				(76)	155		01b	C	34
6	土器	脚座部		00	L1	SK01						(19)	89		01b	C	33

第5表-1 土器一覧1

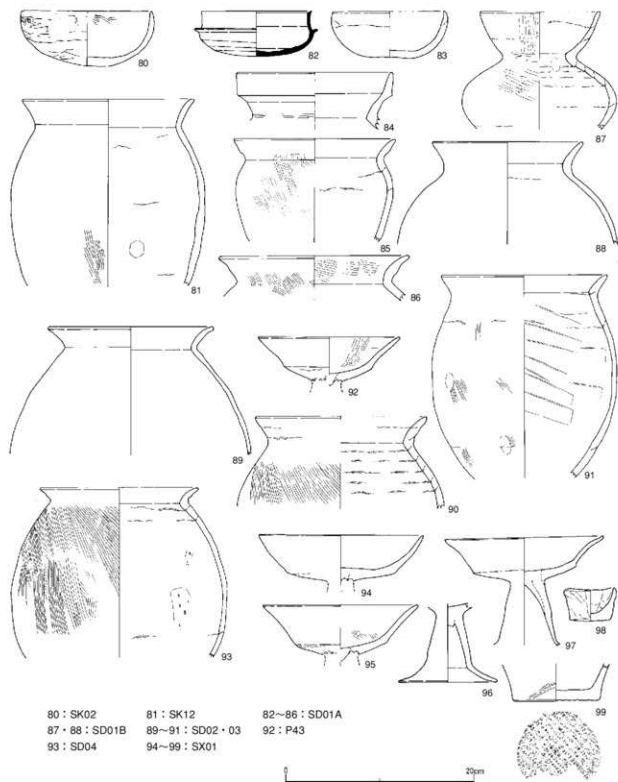




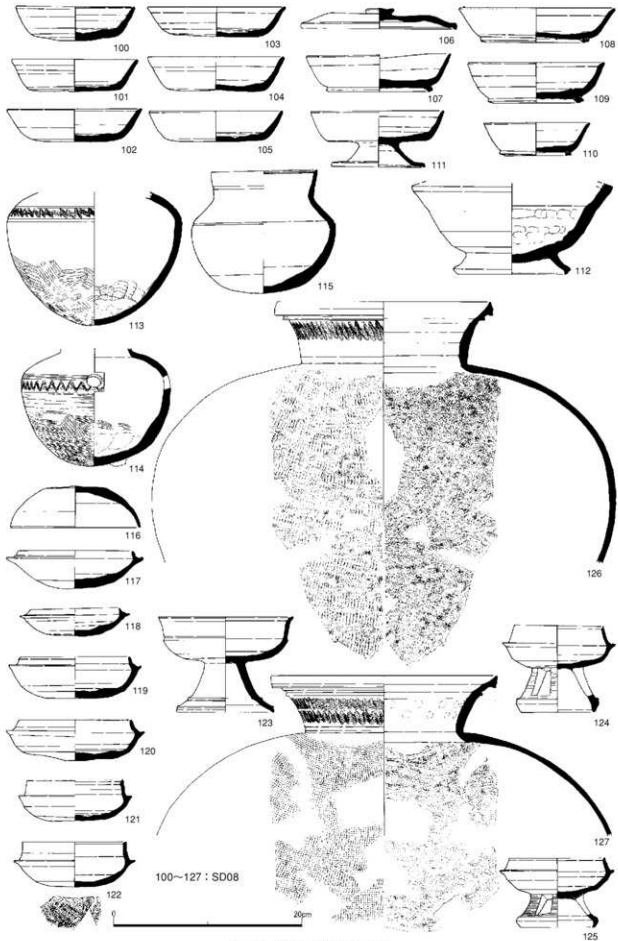
第46図 土器実測図 (L1区の4)

図録№	種別	器種	部分器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	発掘面#	口径	器高(残存高)	底径	その他の流量	実測尺	ラング	図録№
7	土師器	壺	J5	00	L1	SK04					163	(94)				01b	C 36
8	土師器	壺	J3	00	L1	SK04					172	(59)				01b	C 37
9	土師器	壺	J4	00	L1	SK04					208	(185)				01b	C 46
10	土師器	高坏	H	00	L1	SK04					162	(59)				01b	C 38
11	土師器	高坏	H	00	L1	SK04						(104)	90			01b	C 39
12	土師器	高坏	H	00	L1	SK04					170	115	110			01b	C 40

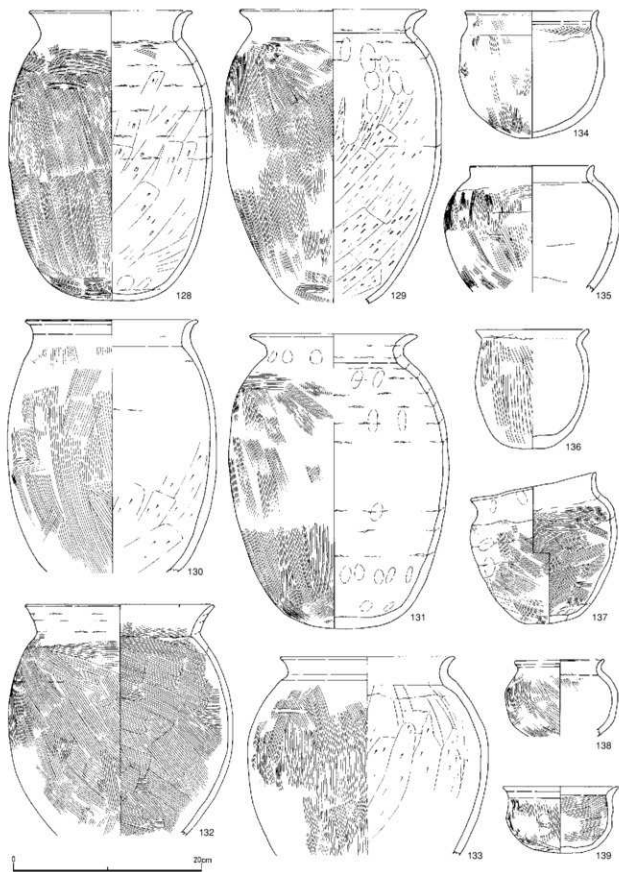
第5表-2 土器一覧2



第47図 土器実測図 (L2区の1)

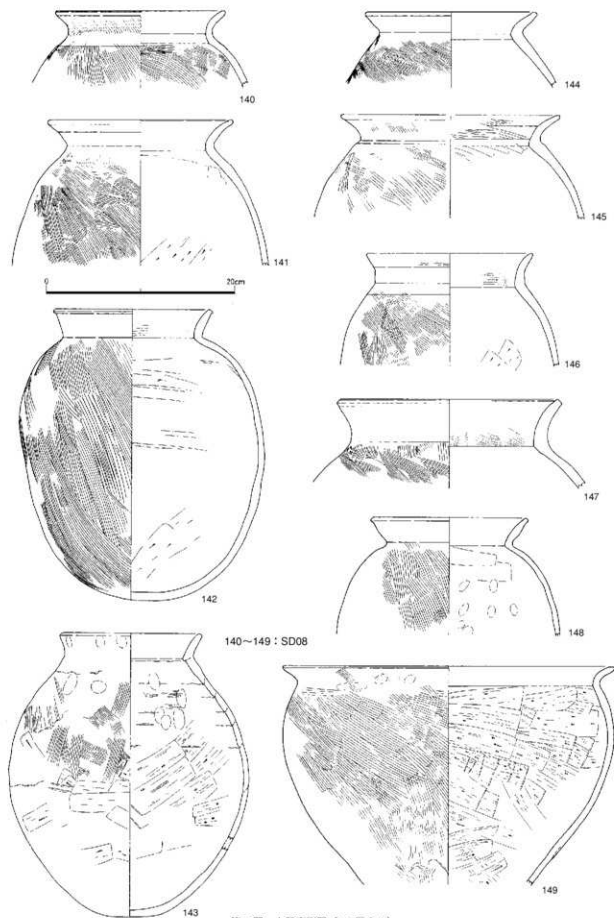


第48図 土器実測図 (L2区の2)

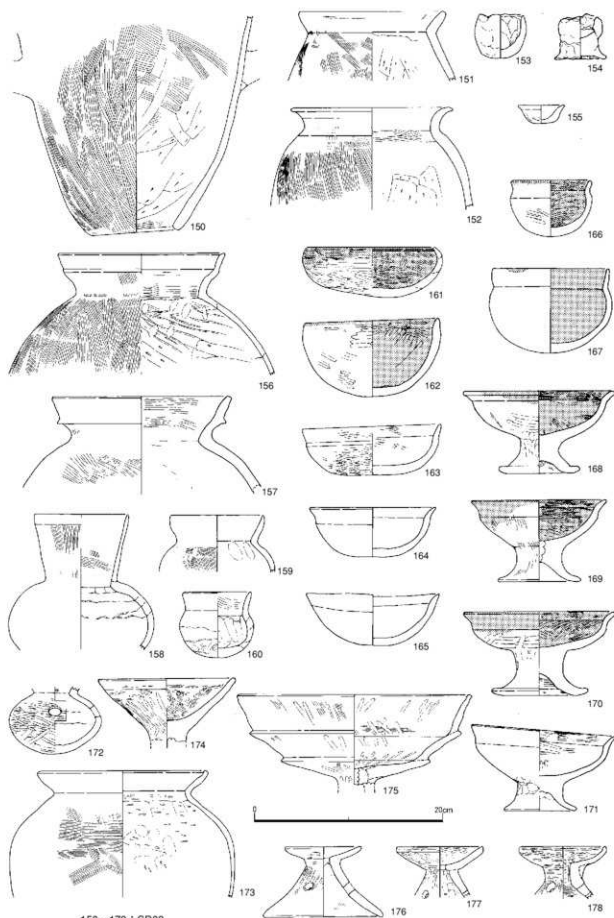


128~139 : SD08

第49図 土器実測図 (L2区の3)

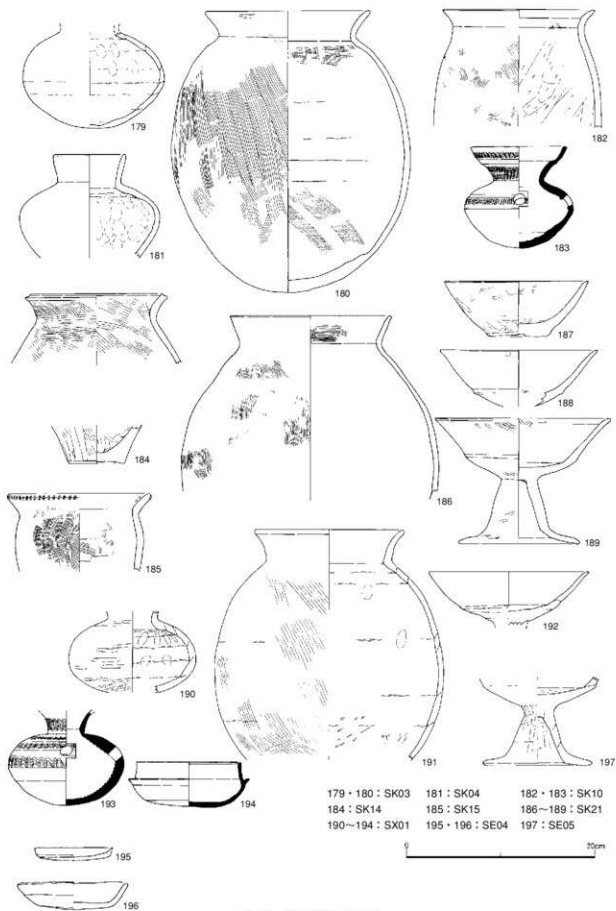


第50図 土器実測図 (L2区の4)



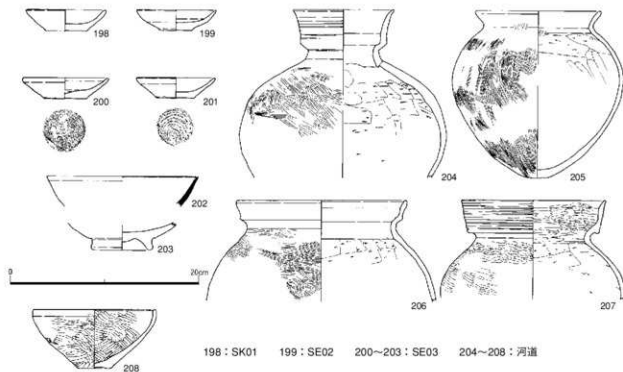
150~178 : SD08

第51図 土器実測図 (L2区の5)



179・180：SK03    181：SK04    182・183：SK10  
 184：SK14    185：SK15    186～189：SK21  
 190～194：SX01    195・196：SE04    197：SE05

第52図 土器実測図 (L3区)



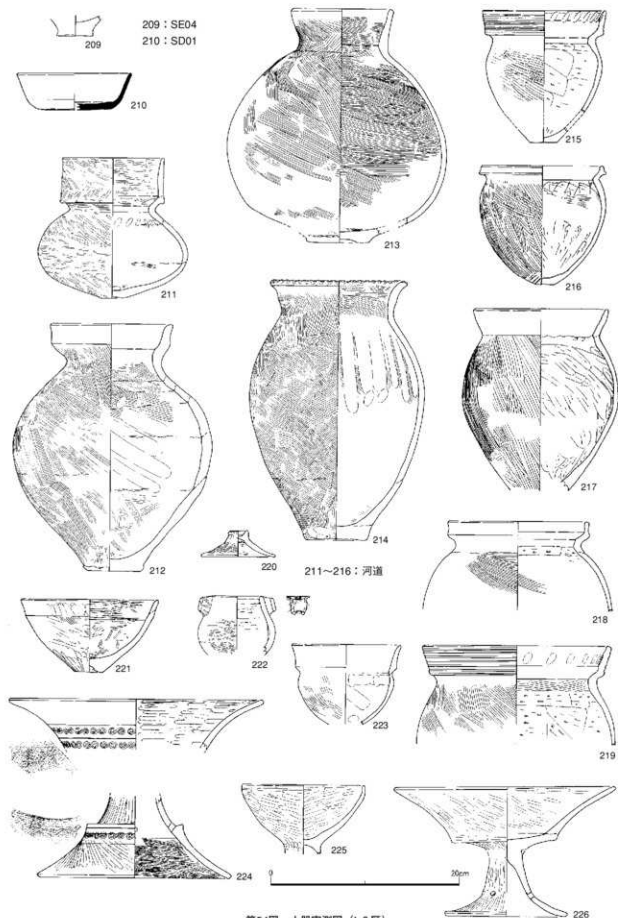
198 : SK01 199 : SE02 200~203 : SE03 204~208 : 河道

第53図 土器実測図 (L5区)

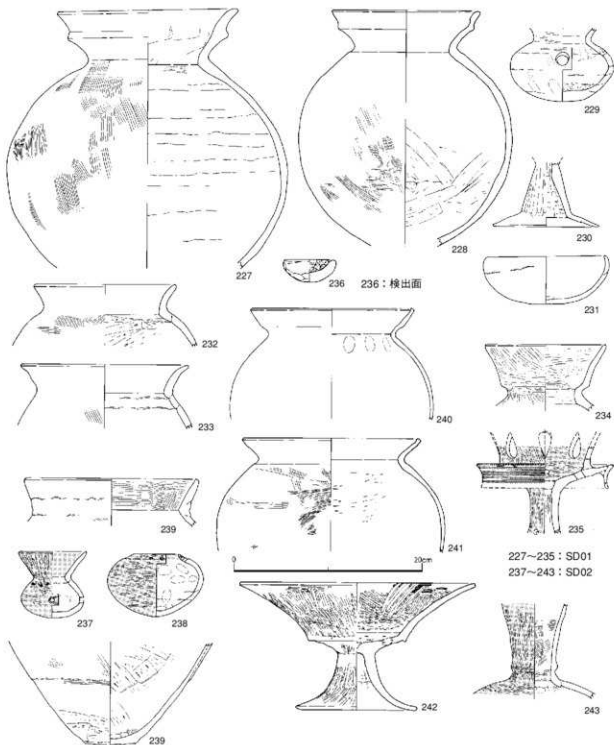
群集別	種別	器種	群分器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	発掘時期	口径	器高(残存高)	底径	その他の法量	実測図	ランク	群集別
13	土師器	小型器台		00	L1	SK05					88	59			01b	C	41
14	土師器	壺	J3	00	L1	SK07					133	63			01b	C	42
15	土師器	高坏		00	L1	SK07					(70)	100			01b	C	43
16	土師器	壺	J4	00	L1	SE01					161	63			01b	C	44
17	土師器	高坏		00	L1	SE01					73	108			01b	C	45
18	須恵器	蓋		00	L1	SE01				種出箇	137	(42)			01b	D	25
19	須恵器	はそう		00	L1	SE01		段崖土器			(144)				01b	D	24
20	土師器	壺	J3	00	L1	SK01					151	(139)			01b	C	47
21	土師器	壺	I3	00	L1	SK02		土器1/2			153	(293)	58		01b	C	49
22	土師器	壺	G	00	L1	SK02					180	245	(40)		01b	C	50
23	土師器	小型器台	I3	00	L1	SK02					86	85	(100)		01b	C	48
24	土師器	壺	J2	00	L1	SK03					175	(85)			01b	C	51
25	土師器	高坏	I2	00	L1	SK03		アゼ中			212	(69)			01b	C	53
26	土師器	台部		00	L1	SK03						(17)	73		01b	C	52
27	土師器	壺	J3	00	L1	SD05		土器⑤			174	(108)			01b	C	57
28	土師器	壺	J3	00	L1	SD05		土器⑥			200	(57)			01b	C	56
29	土師器	壺	J3	00	L1	SD05		土器⑤⑧			196	(115)			01b	C	55
30	土師器	壺	J3	00	L1	SD05		土器②			181	322			01b	C	54
31	土師器	高坏	J1か	00	L1	SD05		土器①			169	(46)			01b	C	58
32	土師器	高坏		00	L1	SD05		土器④				(87)	113		01b	C	59
33	土師器	壺	J4	00	L1	SD07		アゼ			171	(76)			01b	C	60
34	土師器	ミニ鉢		00	L1	SD11			2層		63	49	31		01b	C	61
35	土師器	壺	M2	00	L1	SD10			1層		88	103			01b	C	62
36	土師器	壺	J3	00	L1	SD10			1層		141	(75)			01b	C	65
37	土師器	壺	J2	00	L1	SD10			1層		158	(100)			01b	C	64
38	土師器	壺	J3	00	L1	SD10			1層		163	(181)			01b	C	63
39	土師器	トリハ埃		00	L1	SD10			1層				25		01b	C	167
40	土師器	埴	A1c	00	L1	SD10			1層		146	52			01b	D	22
41	土師器	鍋		00	L1	SD10			1層		290				01b	D	21
42	土師器	内黒台付埴		00	L1	SD10			1層		152				01b	D	16
43	土師器	内黒台付埴	C1	00	L1	SD10			1層		122	82	80		01b	D	20

第5表-3 土器一覧3





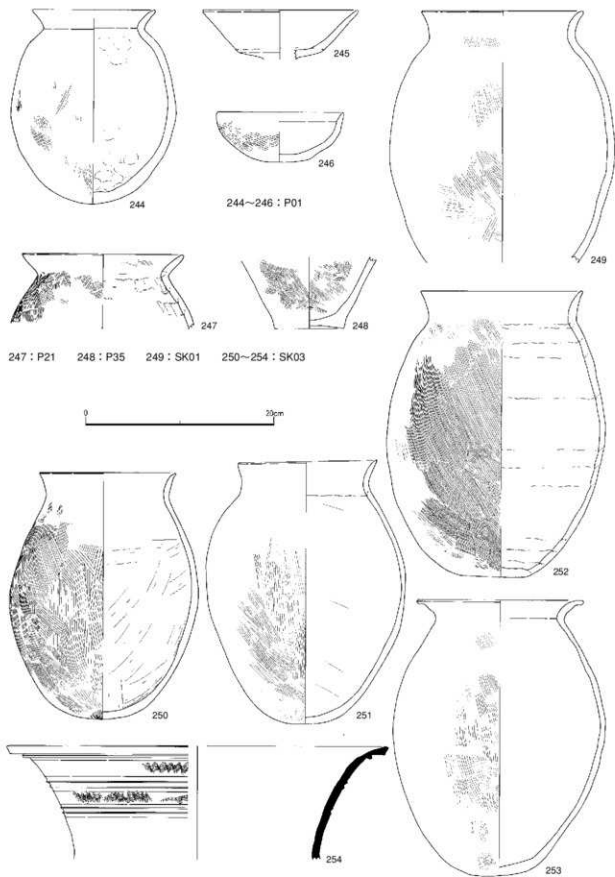
第54図 土器実測図 (L6区)



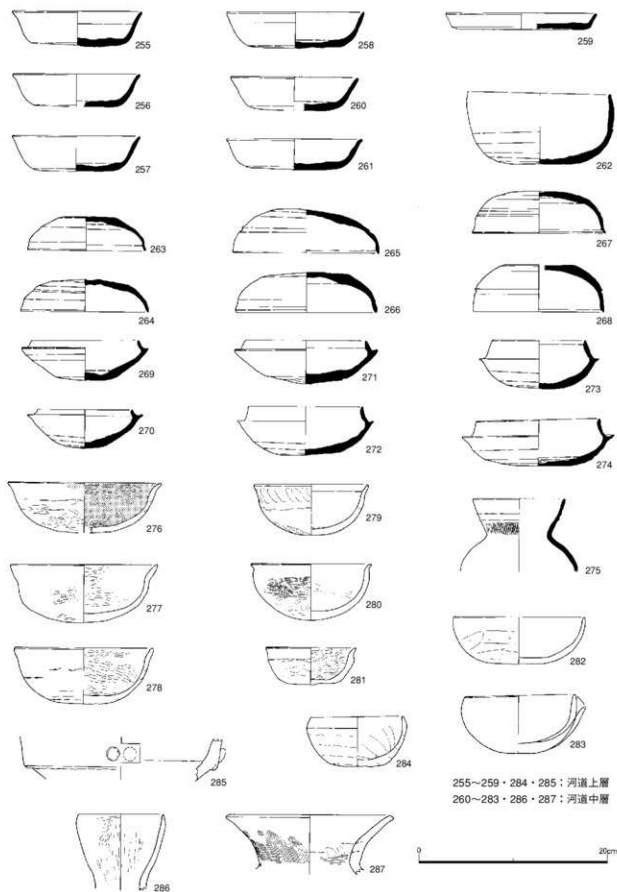
第55図 土器実測図 (L7区)

登録号	種別	器種	細分類種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	埋没深さ	口径	器高(残存高)	底径	その他の寸量	実測図	ランク	登録号
44	須恵瓦	鉢		00	L1	SD10			1層 2層		160	(90)			01b	D	26
45	須恵瓦	钵H身		00	L1	SD10			1層		102	47			01b	D	18
46	土師瓦	壺	A1	00	L1	SD10			東側 2層の地の下		132	(59)			01b	C	70
47	土師瓦	壺	E1c2	00	L1	SD10			土師窯2		156	(253)			01b	C	66
48	土師瓦	壺	N	00	L1	SD10			2層		(85)	153			01b	C	78
49	土師瓦	小壺		00	L1	SD10			2層		124	157	55		01b	C	76

第5表-4 土器一覧4

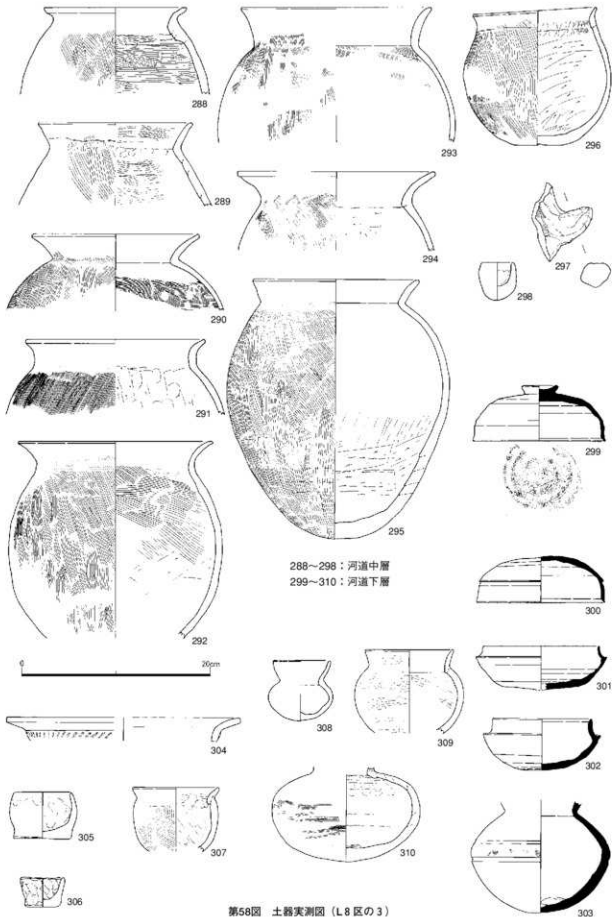


第56図 土器実測図 (L8区の1)

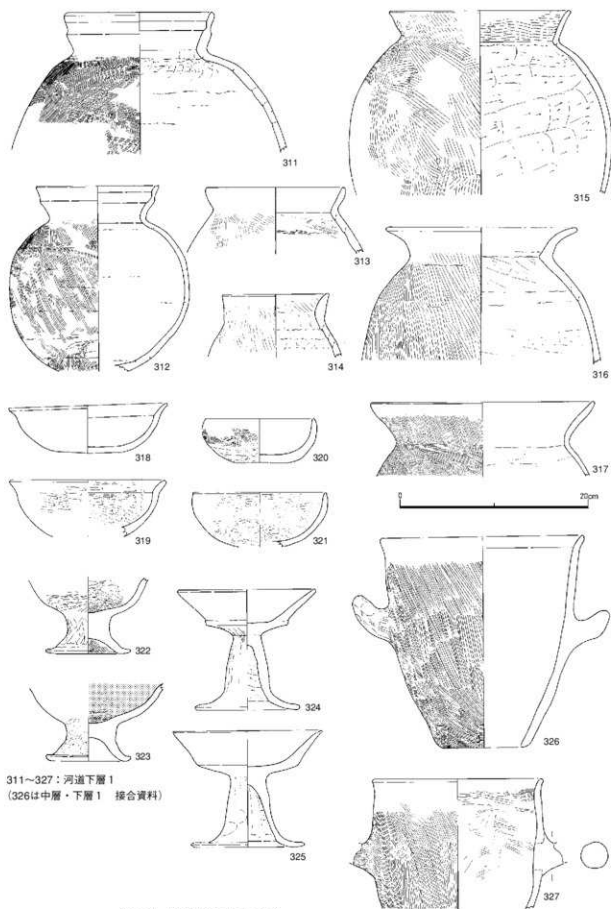


255~259・284・285：河道上層  
 260~283・286・287：河道中層

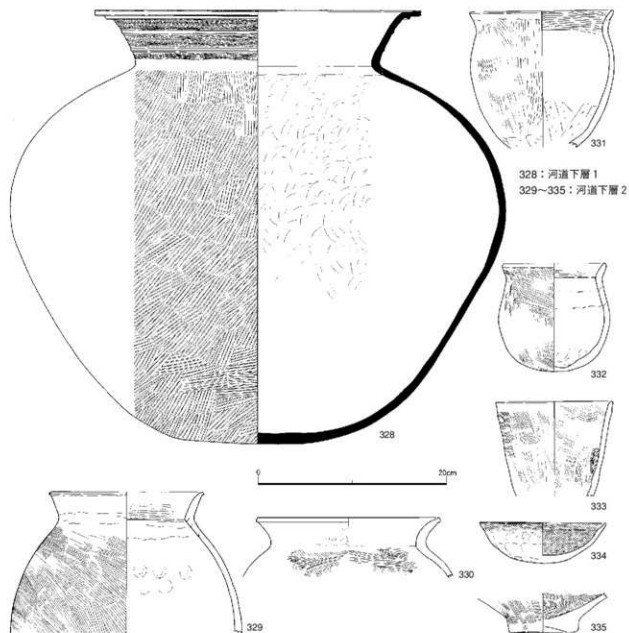
第57図 土器実測図 (L8区の2)



第58図 土器実測図 (L8区の3)



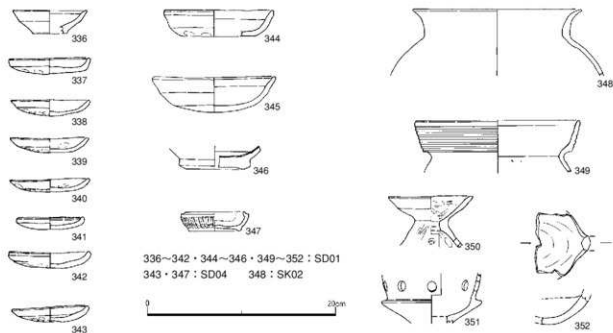
第59図 土器実測図 (L8区の4)



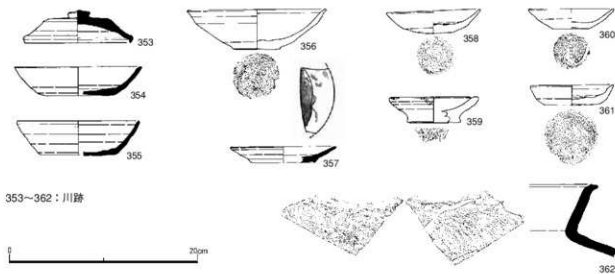
第60図 土器実測図 (L8区 の5)

図録	種別	器種	部分各種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	調査経緯	口径	器高(保存高)	底径	その他の法量	実測値	ランク	実測番号
50	土師器	甕	I6	00	L1	SD10			2層		164				01b	C	77
51	土師器	甕	J3	00	L1	SD10			2層		168				01b	C	67
52	土師器	甕	J2	00	L1	SD10		土器溜1	2層		132	(130)			01b	C	68
53	土師器	甕	J2	00	L1	SD10			2層		164	(169)			01b	C	69
54	土師器	埴		00	L1	SD10			2層		140	47			01b	D	14
55	土師器	埴		00	L1	SD10			2層		127	55	46		01b	D	15
56	土師器	埴		00	L1	SD10			2層		122	54	75		01b	D	13
57	須恵器	坏H蓋		00	L1	SD10			2層		150	41	124		01b	D	9
58	須恵器	坏H身		00	L1	SD10			2層		137	50	(54)		01b	D	10
59	須恵器	坏H身		00	L1	SD10			2層		118	59			01b	D	19

第5表-5 土器一覽5



第61図 土器実測図 (A5区)

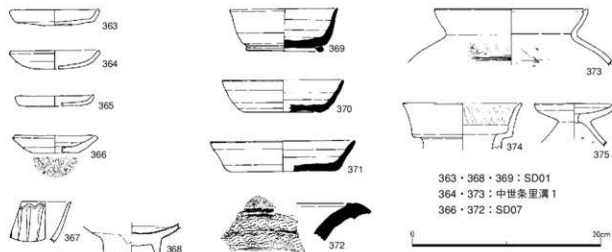


第62図 土器実測図 (A6区)

目録	種別	器種	部分器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	深さ(地表面)	口径	器高(保存品)	底径	その他の法量	実測区	フランク	実測番号
60	須恵器	はそう		00	L1	SD10			2層	122	151				01b	D	17
61	須恵器	有蓋高坏身		00	L1	SD10			2層	122	97	93			01b	D	12
62	須恵器	壺		00	L1	SD10			2層	247					01b	D	23
63	灰釉	皿		00	L1	SD10			3層	125	22	64			01b	D	11
64	土師器	壺底		00	L1	SD10			3層	160		60			01b	C	84
65	土師器	壺	E1	00	L1	SD10		南	3層	86	117				01b	C	79
66	土師器	壺	E1	00	L1	SD10		南	3層	98	89				01b	C	80
67	土師器	壺	I2	00	L1	SD10			3層	175	(89)				01b	C	83
68	土師器	壺	I5	00	L1	SD10		南	3層	172	(242)				01b	C	71
69	土師器	壺	I5	00	L1	SD10			3層	196					01b	C	85

第5表-6 土器一覧6





第63図 土器実測図 (A7区)



第64図 土器実測図 (Z区)

群集	種別	器種	部分器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	非調査区	口径	器高(残存高)	底径	その他の法量	家源田	ランク	群集
70	土師器	甕	F	00	L1	SD10			3層		232	(73)			01b	C	72
71	土師器	甕	J1	00	L1	SD10			3層		163	(58)			01b	C	82
72	土師器	高坏	E4	00	L1	SD10			3層		152	(59)			01b	C	74
73	土師器	高坏	E3	00	L1	SD10			3層		186	(59)			01b	C	73
74	土師器	高坏	E	00	L1	SD10		南	3層		(112)	120			01b	C	81
75	土師器	高坏		00	L1	SD10		南	3層		(76)	(111)			01b	C	75
76	土師器	高坏	11カ	00	L1	SD10			3層		198	200	106		01b	C	86
77	赤生	甕		00	L1	SD10			4層		166				01b	C	87
78	土師器	甕	J3	00	L1	SD10			4層		148	(73)			01b	C	88
79	土師器	甕		00	L1	SD10			4層		(172)	(27)			01b	C	89
80	土師器	埴		00	L2	SK02					136	59			01b	D	8
81	土師器	甕	J2	00	L2	SK12					178	(188)			01b	C	15
82	須恵器	坏H身		00	L2南	SD01A					116	48			01b	D	7
83	土師器	埴		00	L2南	SD01A					118	50	51		01b	D	6
84	土師器	甕	E1c4カ	00	L2南	SD01A					(62)	(61)			01b	C	23
85	土師器	小甕	J2	00	L2南	SD01A					168	(110)			01b	C	22
86	土師器	甕	J2	00	L2南	SD01A					198	(48)			01b	C	24
87	土師器	甕	N	00	L2南	SD01B		底直上			124	(125)			01b	C	25
88	土師器	甕	J2	00	L2南	SD01B					158	(109)			01b	C	16
89	土師器	甕	J2	00	L2南	SD02					172	(136)			01b	C	26
90	土師器	甕	J2	00	L2南	SD02					179	(97)			01b	C	27
91	土師器	甕	J3	00	L2南	SD03					(173)	(214)			01b	C	29
92	土師器	高坏	H	00	L2南	P43					148	(51)			01b	C	17
93	土師器	甕	J4	00	L2南	SD04					165	(180)			01b	C	28
94	土師器	高坏	H	00	L2南	SX01					173	(50)			01b	C	18
95	土師器	高坏	H	00	L2南	SX01					162	(60)			01b	C	19
96	土師器	高坏	H	00	L2南	SX01					(83)	102			01b	C	21
97	土師器	高坏	H	00	L2南	SX01					165	(116)			01b	C	20
98	土師器	手捏		00	L2南	SX01									01b	C	176
99	縄文	深鉢底部		00	L2南	SX01					(40)	91			01b	C	175
100	須恵器	甕台坏		00	L2	SD08	AI28	a	観音堂遺構		124	37	97		01b	D	53

第5表-7 土器一覧7





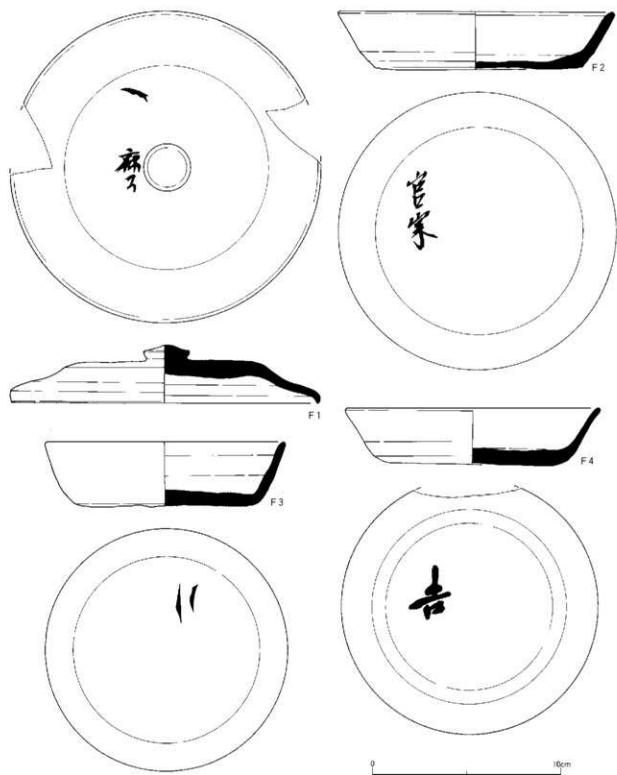


群集号	種別	器種	部分器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	遺構番号	口径	器高(残存高)	底径	その他の法量	重量	ランク	群集号
326	土師器	甌	B1	03	L8	河湾	AM30	NW	中層下層		177	223	90			03k	B 4
327	土師器	甌	B	03	L8	河湾	AM30	NW	下層		216	(137)				03m2	B 15
328	須恵器	甌		03	L8	河湾	AM30	NW №23	下層	陶器	342	458		体部最大径: 502		03m2	B 17
329	土師器	甌	J1	03	L8	河湾	AM30	NW	下層2		158	(149)				03m2	D 32
330	土師器	甌	J1	03	L8	河湾	AM30	NW	下層2		192	(64)				03m2	C 44
331	土師器	小甌	J1	03	L8	河湾	AM30	NW	下層2		148	(145)				03k	B 5
332	土師器	小甌	J1	03	L8	河湾	AM30	NW	下層2		107	114				03k	B 4
333	土師器	甌	MN	03	L8	河湾	AM30	NE	下層2		122	(100)				03m2	C 43
334	土師器	内裏横	Cx	03	L8	河湾	AM30	NW	下層2		131	43				03m2	D 33
335	土師器	甌		03	L8	河湾	AM30	SW	下層2			(38)	72			03m2	C 41
336	土師器	土師皿		00	A5	SD01					48	25	37			02s1	D 110
337	土師器	土師皿		00	A5	SD01					84	18				02s1	D 104
338	土師器	土師皿		00	A5	SD01					82	18				02s1	D 98
339	土師器	土師皿		00	A5	SD01					83	16				02s1	D 100
340	土師器	土師皿		00	A5	SD01					83	15				02s1	D 101
341	土師器	土師皿		00	A5	SD01					58	13				02s1	D 103
342	土師器	土師皿		00	A5	SD01					83	18				02s1	D 99
343	土師器	土師皿		00	A5	SD04					80	18				02s1	D 97
344	土師器	土師皿		00	A5	SD01					114	28				02s1	D 105
345	土師器	土師皿		00	A5	SD01					129	38				02s1	D 102
346	白磁	甌		00	A5	SD01						(35)				02s1	D 93
347	青白磁	合子		02	A5	河湾1					61	21	53			03b1	D 91
348	土師器	甌	J4	00	A5	SK02					(175)	(70)				02s1	C 97
349	土師器	甌	A	00	A5	SD01					172	(55)				02s1	C 94
350	土師器	小型器台		00	A5	SD01					83	(54)				02s1	C 86
351	陶器	裝飾器台		02	A5	SD01						(53.5)				03b1	C 79
352	土師器	甌		00	A5	SD01										02s1	C 95
353	須恵器	坏蓋		02	A6	河湾	1~2f4間	彩色磁器	高松	110	35			つまみ径: 23		03b1	D 18
354	須恵器	無台坏		02	A6	河湾				高松	134	31	(70)			03b1	D 16
355	須恵器	無台坏		02	A6	P05				高松	129	(35)	(82)			03b1	D 15
356	土師器	皿		02	A6	河湾					144	42	50			03b1	D 94
357	無釉陶器	有台坏		02	A6	河湾	3f1f3間	非粘土器?		112	17	(68)				03b1	D 62
358	土師器	土師皿		02	A6	河湾	3f1f3間	非粘土器?		99	25.5	43				03b1	D 65
359	土師器	土師皿		02	A6	河湾				(90)	27	(57)				03b1	D 62
360	土師器	土師皿		02	A6	河湾				1トレ	88	21	36			03b1	D 63
361	土師器	土師皿		02	A6	河湾	3f1f3間	非粘土器?		86	21.5	57				03b1	D 66
362	須恵器	甌口縁		02	A6	河湾	1トレ	非粘土器	陶器カ	(92)	(76.5)					03b1	D 67
363	土師器	土師皿		02	A7c	SD01		北側		(92)	16.5	(94)				03b1	D 67
364	土師器	土師皿		02	A7c	特設区1				(93)	20	(52)				03b1	D 67
365	土師器	土師皿		02	A7c	SD02				(82)	12	(75)				03b1	D 68
366	土師器	土師皿		02	A7c	SD07			上面	(86)	18.5	(50)				03b1	D 70
367	青磁	鏡(蓋弁)		02	A7c	SD05					(43)					03b1	D 94
368	白磁	甌		02	A7c	SD01		北側			(33)	58		円筒径: 84		03b1	D 93
369	須恵器	有台坏		02	A7c	SD01		北側		高松	112	47	82			03b1	D 19
370	須恵器	無台坏		02	A7c	3f3f4f1		西		高松	128	34	(83)			03b1	D 22
371	須恵器	無台坏		02	A7c	3f3f4f1		東		高松	150	32	(109)			03b1	D 21
372	須恵器	甌		02	A7c	SD07		南トレンチ区画		小松?		(39)				03b1	D 20
373	土師器	甌	H	02	A7c	特設区1					160	(59.5)				03b1	C 83
374	土師器	甌	B1	02	A7c	SD03					124	(48.5)				03b1	C 81
375	土師器	小型器台		01	A7c	SD03		一括			84	(44.5)				03b1	C 82
376	土師器	土師皿		01	Z1	P06					126	25	78			03m1	D 887
377	土師器	坏片	H	01	Z1	SK01					178	(44)				03m1	D 886
378	土師器	製塩土器		00	L2	SD08		27 30			190					01b	C 164
379	土師器	製塩土器		00	L2	SD08		30他			150					01b	C 165
380	土師器	製塩土器		00	L2	SD08		27								01b	C 166
381	縄文	深鉢?		03	L8	河湾	AM30	NW	下層2			(56)				03m2	C 67
382	縄文	不明		03	L8	カクラン						(30)				03m2	C 68

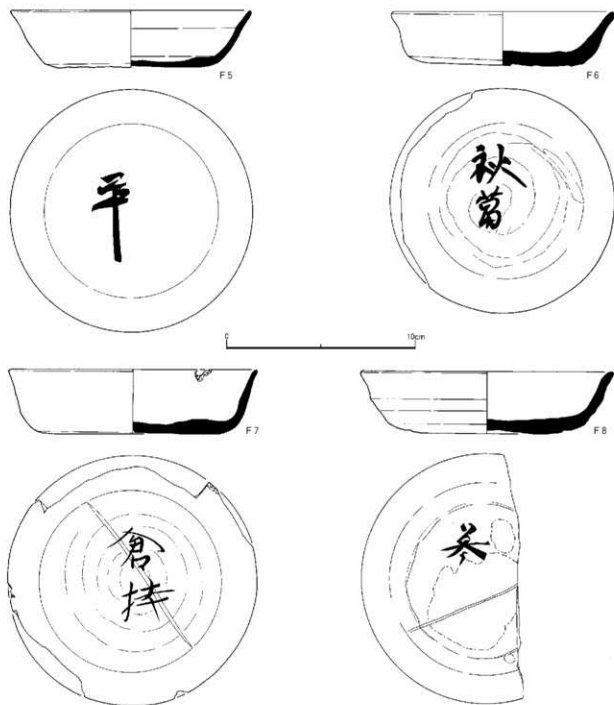
第5表-11 土器一覧11

群集号	種別	器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	遺構番号	口径	器高(残存高)	底径	その他の法量	重量	ランク	群集号	
F1	須恵器	坏蓋	00	L2	SD08		23				147	32	55		外底「麻呂」	01b	D 73
F2	須恵器	無台坏	00	L2	SD08		27 31				125	35	98		外底「宮家」	01b	D 80
F3	須恵器	無台坏	00	L2	SD08	Ai28	a			高松	133	29~31	89		外底「吉」	01b	D 71
F4	須恵器	無台坏	00	L6	SD03						126	31	91		外底「平」	01b	D 36
F6	須恵器	無台坏	03	L8	河湾	AM30	NW	中層	高松	115	29	93		外底「秋巻」	03m2	器 1	
F7	須恵器	無台坏	03	L8	河湾	AM29	NE	中層	高松	130.5	34	97		外底「書持」	03m2	D 28	
F8	須恵器	無台坏	01	L2	SD08	A 1 28	a-b	埋蔵区画	高松	132	33	80		「書」	03m1	器 21	

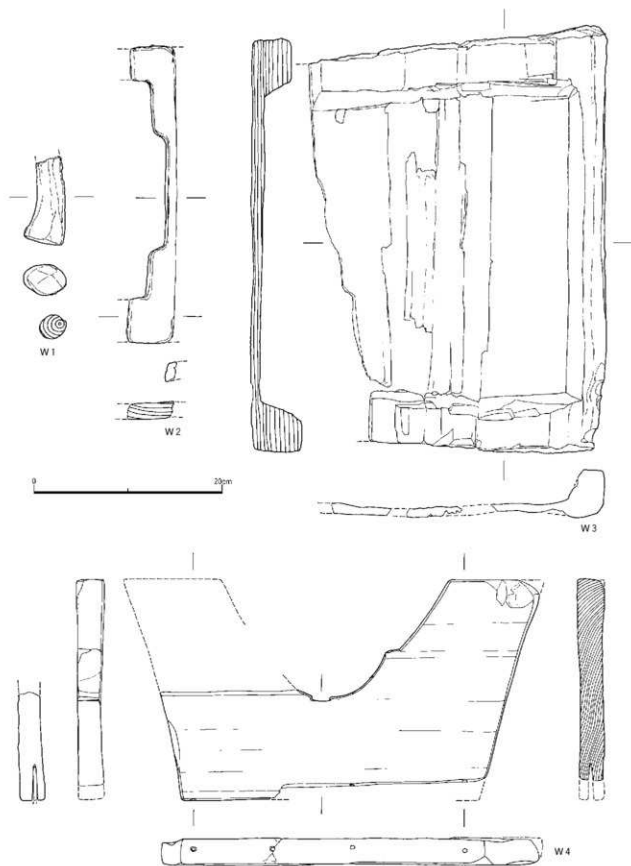
第6表 須恵土器一覧



第65図 墨書土器実測図1

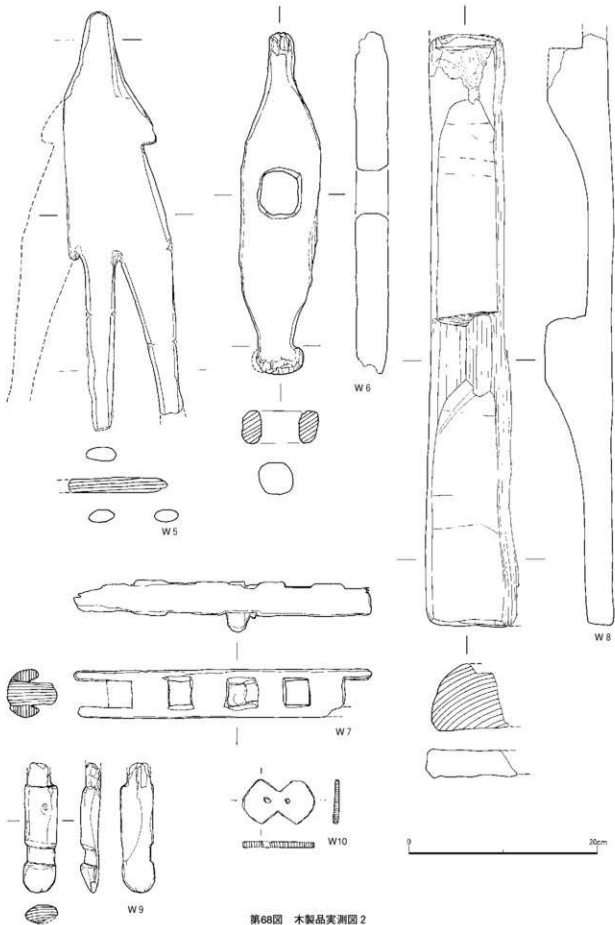


第66図 墨書土器実測図2

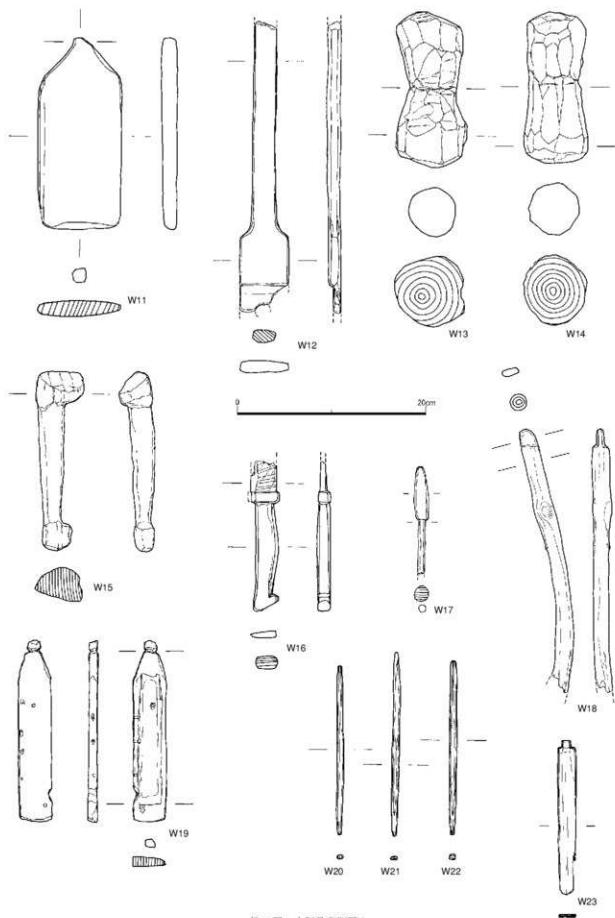


第67図 木製品実測図1

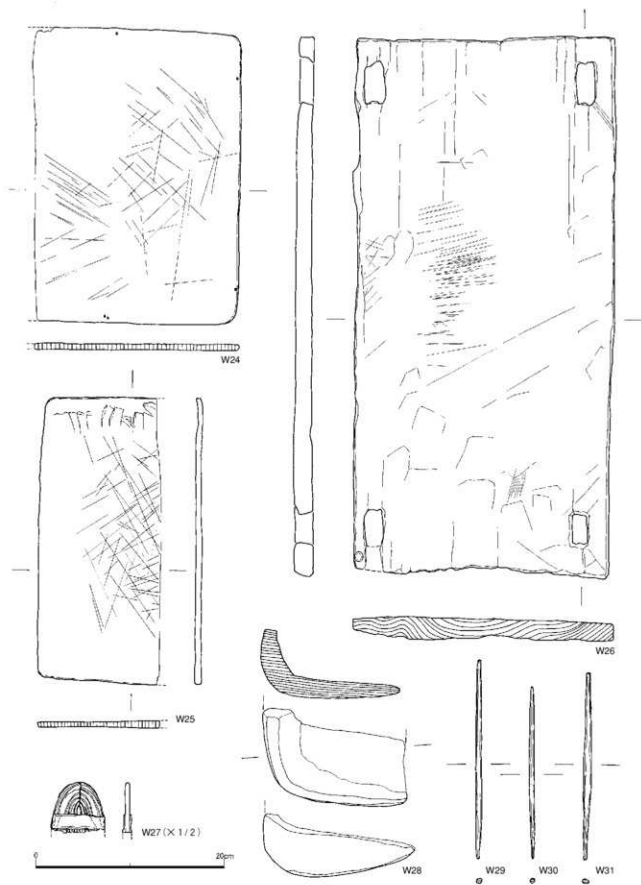




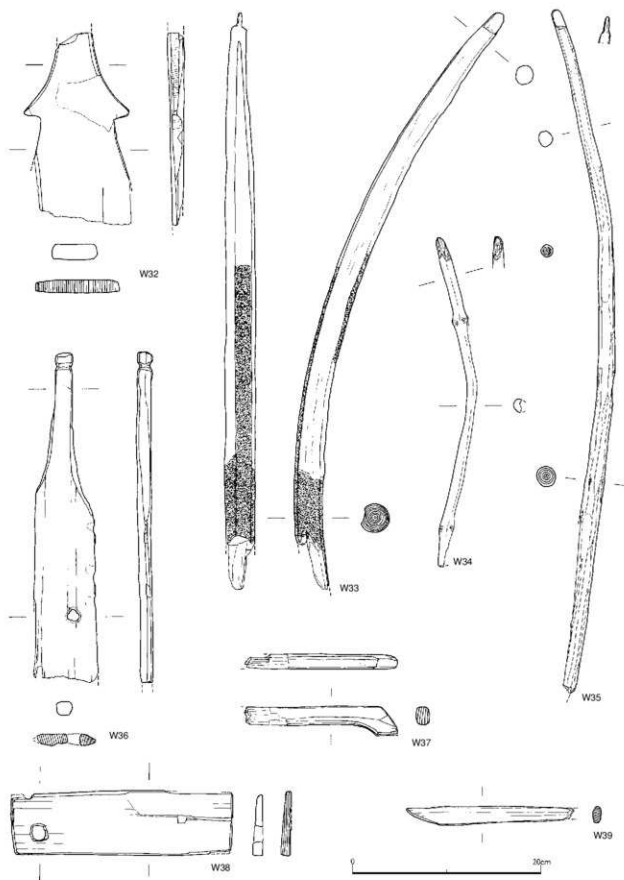
第68図 木製品実測図2



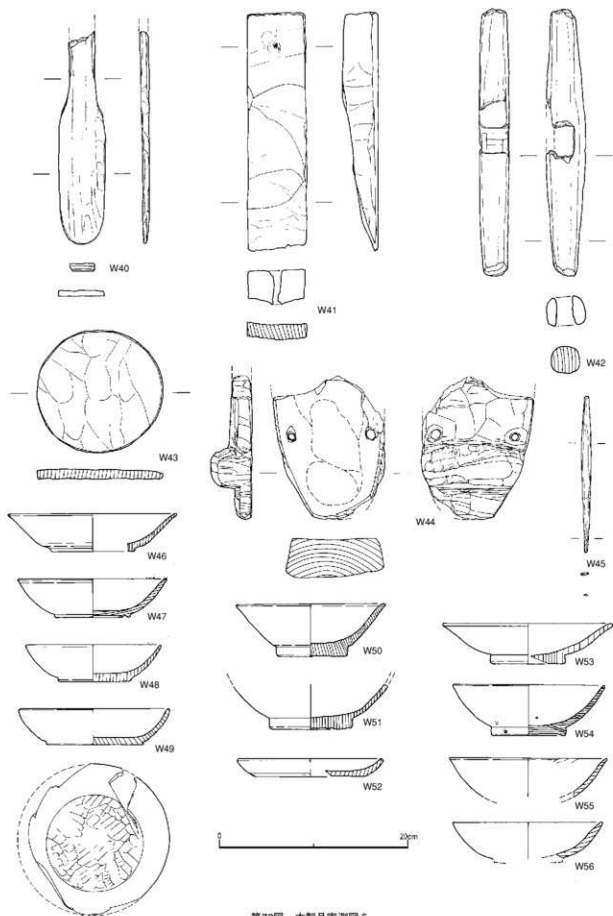
第69図 木製品実測図3



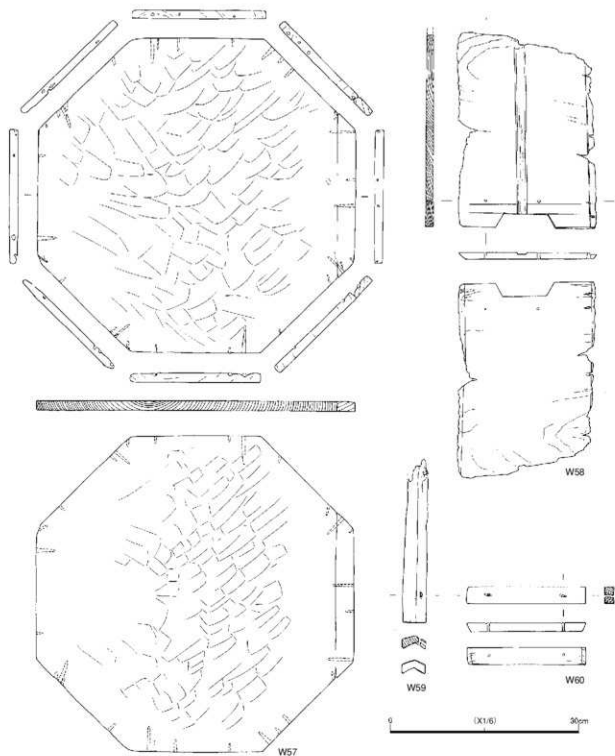
第70図 木製品実測図4



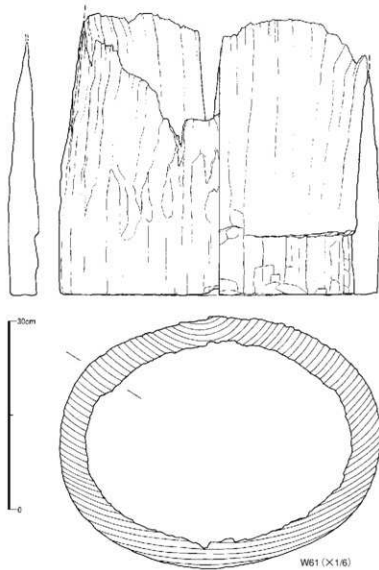
第71図 木製品実測図5



第72図 木製品実測図6



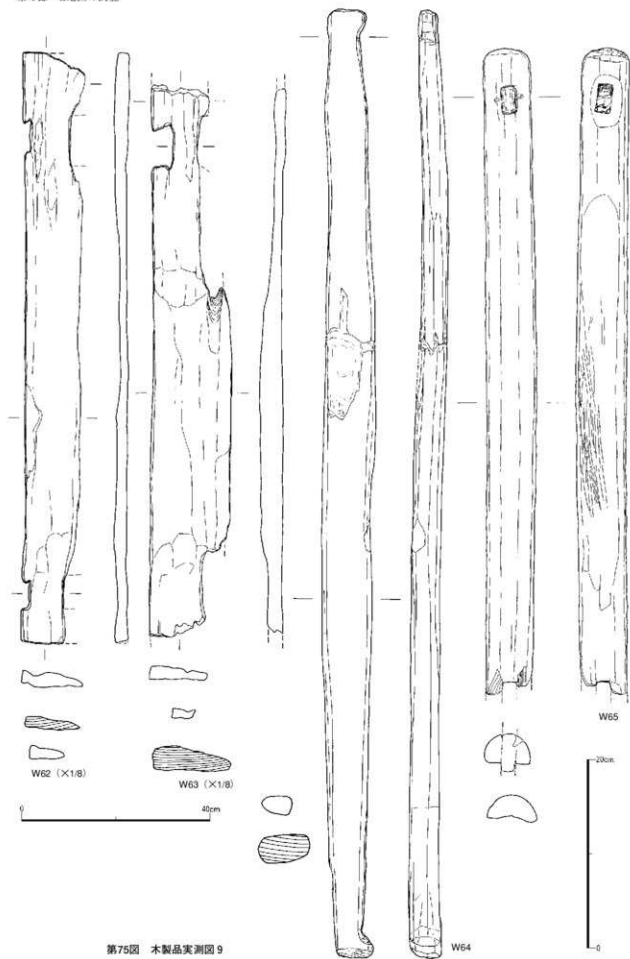
第73図 木製品実測図7



第74図 木製品実測図 8

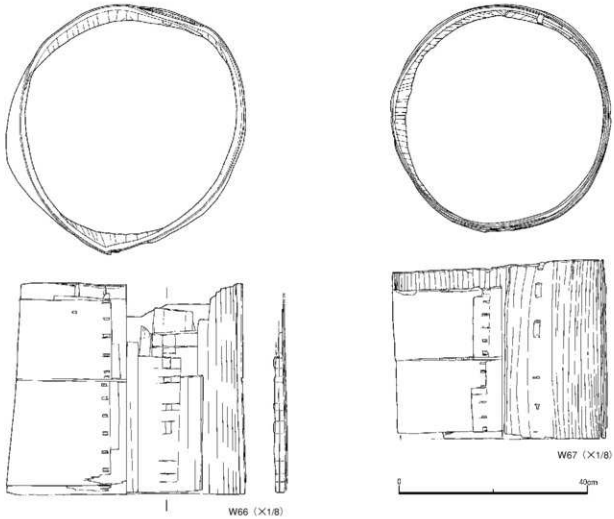
品目番号	器種	樹種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	最大長	最大幅	最大厚	試料番号	実測番号
W1	鎌柄	サカキ	00	L1	SD10				95	45	26	361	01y361
W2	部材	スギ	00	L1	SD10			4層	317	50	18	189	189
W3	槽	ヒノキ属	00	L1	SD10			4層	453	316	53	188	188
W4	部材	スギ	00	L2	SD08		12		217	400	30	790	03k16
W5	曲柄又鉾	コナラ節	00	L2	SD08		27		443	105	26	10	10
W6	青銅弓か	スギ	00	L2	SD08		19		362	81	35	61	61
W7	山下駄廻り	スギ	00	L2	SD08				315	52	53	161	161
W8	棒子	ネズコ	00	L2	SD08				625	98	70	86	86
W9	部材	サカキ	00	L2	SD08		16		138	35	20	89	89
W10		ネズコ	00	L2	SD08		15		77	47	6	91	91
W11	櫓か	スギ	00	L2	SD08		26		203	89	17	106	106
W12	糸巻	スギ	00	L2	SD08		11		310	52	14	49	49
W13	木鐺	ツバキ属	00	L2	SD08		15		166	75	75	359	01y359
W14	木鐺	コナラ節	00	L2	SD08		13		161	68	75	360	01y360
W15	柄か	ヒノキ	00	L2	SD08				191	50	35	112	112
W16	刀形	ヒノキ属	00	L2	SD08		26		160	30	15	78	78
W17	木鐺	ネズコ	00	L2	SD08		22		113	17	17	127	127
W18	弓	イヌガヤ	00	L2	SD08		10		275	22	18	352	01y352

第7表-1 木製品一覧1



第75図 木製品実測図9





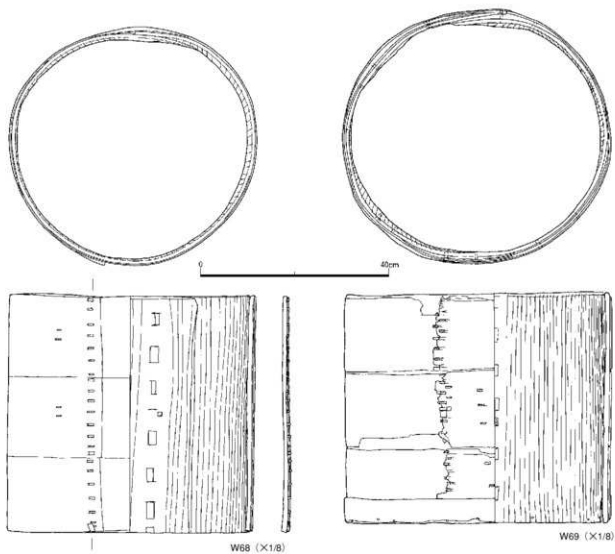
W66 (X1/8)

W67 (X1/8)

第76図 木製品実測図10

品目番号	器種	樹種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	最大長	最大幅	最大厚	試料番号	実測番号
W19	舟形	スギ	00	L2	SD08		28		192	35	10	82	82
20	蓋	スギ	00	L2	SE04				180	7	5	355	01y355
21	蓋	スギ	00	L2	SE04				195	8	4	353	01y353
22	蓋	スギ	00	L2	SE04				185	8	7	354	01y354
23	板	ヒノキ	00	L2	SD08				164	20	4	791	03k17
24	折敷か	ヒノキ	00	L5	SE01				314	217	7	220	220
25	折敷か	スギ	00	L5	SE01				303	130	8	219	219
26	机板	スギ	00	L5	SK01				575	276	25	351	01y351
27	壁脚	不可	00	L7	SD01				27	29	5	191	191
28	枋押い	スギ	00	L5	河道			上層	104	161	32	190	190
29	蓋	ヒノキ	00	L3	SE06				210	7	6	356	01y356
30	蓋	スギ	00	L3	SE06				182	6	5	358	01y358
31	蓋	ヒノキ	00	L3	SE06				198	9	5	357	01y357
32	曲柄鋸	アカガシ産	03	L8	河道	AM29NE		下層	204	112	17	770	03k07
33	弓	イヌガヤ	03	L8	河道		No.3	中層	610	33	30	763	03k01
34	弓	イヌガヤ	03	L8	河道		No.8	中層	349	18	14	764	03k02
35	弓	イヌガヤ	03	L8	河道		No.9	中層	723	22	22	765	03k03
36	下駄横杓	スギ	03	L8	河道		No.14	下層	350	68	13	766	03k04
37	鎌柄	スギ	03	L8	河道	AM30NW		下層	162	32	14	771	03k08
38	有孔板	スギ	03	L8	河道	AM29		中層	235	69	11	772	03k09
39	棒	スギ	03	L8	河道	AM29NE		下層2	178	20	9	773	03k10
40	杓文字	スギ	02	A7南	SD07		トレンチ跡		235	50	8	927	03m5
41	椀か	スギ	02	A7北	SD01		北側		354	63	17	925	03m49
42	部材	アカガシ産	02	A6	河道		3トレ		284	42	29	994	03m118
43	円板	ヒノキ	02	A7南	SD07				130	133	10	926	03m50

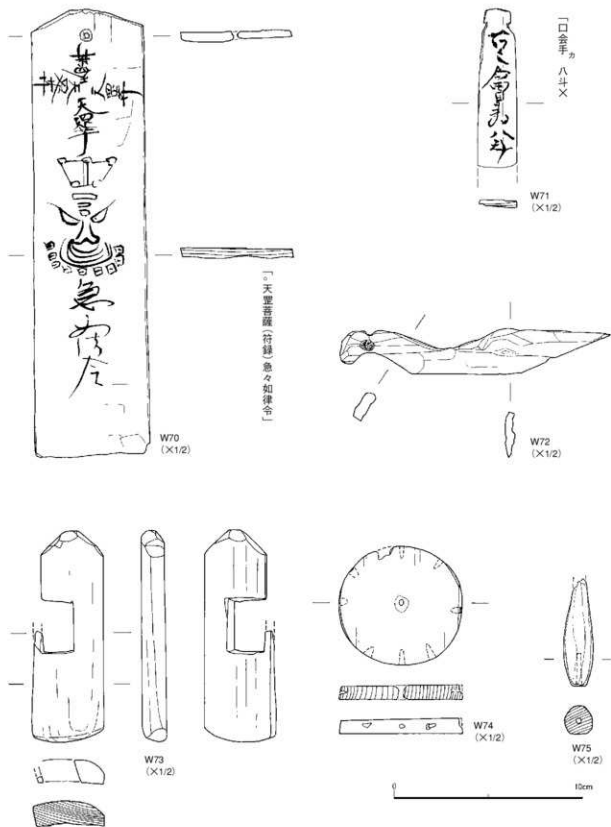
第7表-2 木製品一覧2



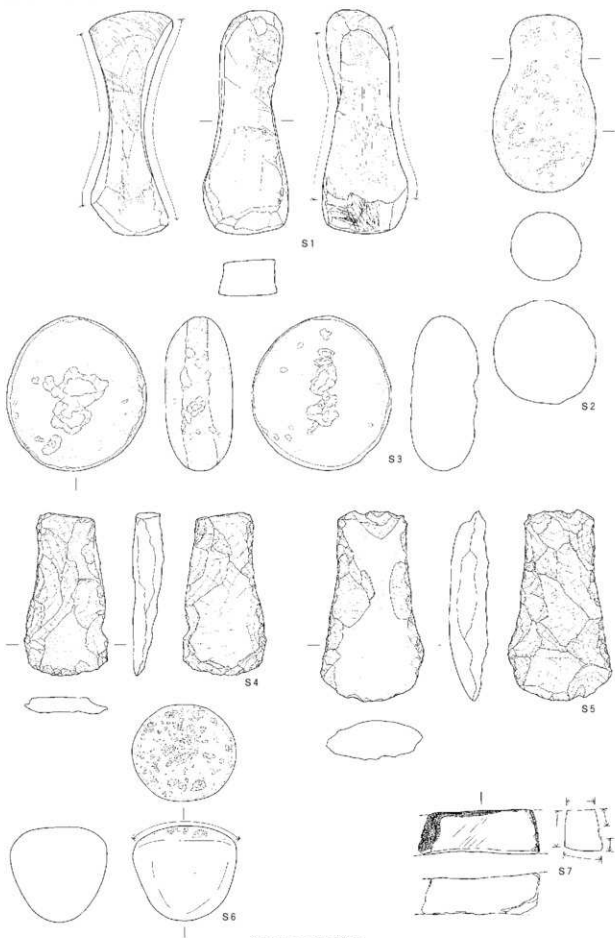
第77図 木製品実測図11

製品番号	器種	樹種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	最大長	最大幅	最大厚	試料番号	実測番号
W44	下駄	ハンノキ産葉	02	A6	河道		3トレ	青色細砂層	153	117	41	993	03m117
45	箸	ヒノキ	02	A6	河道		3トレ	青色細砂層	166	11	3	995	03m119
46	漆器椀	トチノキ	02	A6	河道		3トレ	青色細砂層	□径160	底径88		996	03m128
47	漆器椀	トチノキ	02	A6	河道		3トレ	青色細砂層	□径158	底径80		996	03m120
48	漆器椀	トチノキ	02	A6	河道		2-3トレ間	青色細砂層	□径143	底径78		989	03m113
49	漆物椀	ケヤキ	02	A6	河道		2-3トレ間	青色細砂層	□径160	底径103		990	03m114
50	漆器椀	ケヤキ	02	A6	河道		3トレ	青色細砂層	□径160	底径76		991	03m115
51	漆器椀	スギ	02	A6	河道		3トレ	青色細砂層	不明	底径88		992	03m116
52	漆器椀	トチノキ	02	A6	河道		3トレ	青色細砂層	□径155	底径117		996	03m127
53	漆器椀	ケヤキ	02	A6	河道		1-2トレ間	黒色粘土層2	□径180	底径80		984	03m108
54	漆物椀	ケヤキ	02	A6	河道		2-3トレ間	黒色粘土層2	□径162	底径80		987	03m111
55	漆器椀	トチノキ	02	A6	河道		2-3トレ間	黒色粘土層2	□径167			986	03m110
56	漆器椀	ケヤキ	02	A6	河道		2トレ	黒色粘土層1	□径158			985	03m109
57	漆物容器底板	アカマツ	00	L1	SE02				334	336	10	1337	03k12
58	漆物容器側板	アカマツ	00	L1	SE02				205	196	8	787	03k13
59	漆物容器椀	ヒノキ属	00	L1	SE02				173	25	10	789	03k15
60	漆物容器杓木	スギ	00	L1	SE02				126	18	9	788	03k14
61	漆物椀	スギ	02	A5	SK01				444	510	51	997	03m121
62	井戸側	スギ	00	L1	SE01				1248	120	24	389	01y85

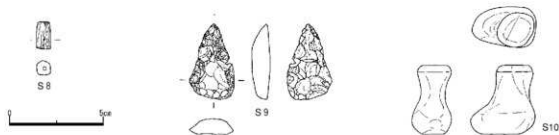
第7表-3 木製品一覧3



第78図 木製品実測図12



第79図 石製品実測図1



第80図 石製品実測図2

品目番号	器種	材質	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	最大長	最大幅	最大厚	試料番号	実測番号
W63	井戸側		00	L1	SE01			側板3	1168	168	52	1351	01y特6
64	天秤棒	スギ	00	L2	SD08	Ai27	b・c		1003	56	30	196	196
65	部材	ヒノキ	00	L2	SD08		目		685	54	24	1345	02s特3
66	動物井戸枠		00	L2	SE01				223	252	15	1355	01y特4
67	動物井戸枠		00	L2	SE03				380	450		1353	01y特2
68	動物井戸枠		00	L3	SE06			2段目	252	260	8	1352	01y特1
69	動物井戸枠		00	L3	SE04			3段目	484	283		1354	01y特3
70	木鏝	スギ	02	A6	河道		3トレ	黒色粘土層2	237	60	5	979	03m103
71	木鏝	スギ	02	A6	河道		3トレ	青色細砂層	84	21	4	982	03m106
72	鳥形	スギ	02	A6	河道		2-3トレ間	黒色粘土層2	24	142	6	988	03m112
73	部材	スギ	03	L8	河道		No26	下層2	112	38	12	769	03k06
74	蓋板	スギ	03	L8	河道		No24	下層	83	63	7	768	03k05
75	浮子か	ムラサキキツ葉	03	L8	河道	AM30SW		下層	57	16	15	798	03k11

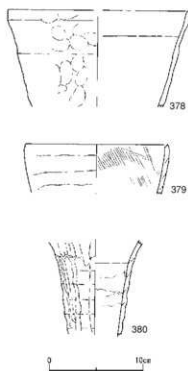
第7表-4 木製品一覧4

品目番号	種類	器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	石材	その他の法量			実測日	実測番号	
S1	石製品	柶石	00	L2	SD08		30		凝灰岩	最大長:178	最大幅:68	最大厚:616	重量7803g	01b	S4
S2	石製品	有礫石鏝	00	L2	SD08		26		花崗岩	最大長:1415	最大幅:82	最大厚:82	重量1246g	01b	S5
S3	石製品	円石	00	L1	SD10			2層	砂岩	最大長:123	最大幅:111	最大厚:528	重量1059g	01b	S2
S4	石製品	打製石斧	00	L1	SD10			4層	砂岩質凝灰岩	最大長:1295	最大幅:665	最大厚:242	重量2300g	01b	S3
S5	石製品	打製石斧	00	L6	河道			下層	火山礫凝灰岩	最大長:152	最大幅:285	最大厚:305	重量4453g	01b	S1
S6	石製品	石製品	03	L8	河道				凝灰岩	最大長:75	最大幅:83	最大厚:77	重量:607.6g	03k	S5
S7	石製品	柶石	02	A7南	落ち込み1		トレンチ		凝灰岩	最大長:96	最大幅:33	最大厚:30	重量:153.96g	01b	SM9
S8	石製品	管玉未製品	02	A7南	SD07			上層	凝灰岩	最大長:14.5	最大幅:6	最大厚:7.8	重量:14.1g	01b	SM29
S9	石製品	石鏝	03	L8	SK01				硬質頁岩	最大長:40	最大幅:24	最大厚:10	重量:9.54g	03k	S2
S10	石製品	磨石	03	L8	河道	AM29	SE	下層	硬質頁岩	最大長:37	最大幅:34	最大厚:21	重量:28.8g	03k	S4

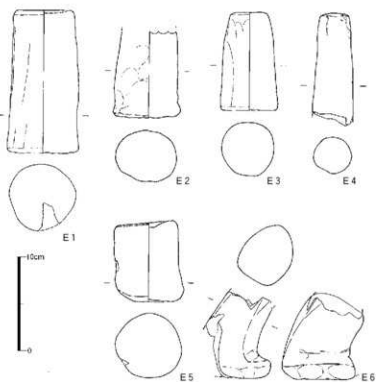
第8表 石製品一覧

品目番号	種類	器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	その他の法量			実測番号	
E1	土師質	支脚	00	L2南	SD01A				最大長:151	胴径部:54	74	01bC174	
E2	土師質	支脚	00	L2	SD08		29		最大長:92+	胴径部:71		01bC169	
E3	土師質	支脚	00	L2	SD08		16		最大長:104	胴径部:37	56	01bC178	
E4	土師質	支脚	00	L2	SD08	Ai28	a	地灰粘	最大長:120+	胴径部:30	最大径:53	01bD47	
E5	土師質	支脚	00	L2	SD08		22		最大長:86	胴径部:60	72	01bC168	
E6	土師質	支脚(足形)	00	L2	SD08		21		最大長:93+	胴径部:62		01bC179	
E7	土師質	土鏝か	03	L8	河道	AM30	SW	下層	最大長:30	最大幅:(32)	最大厚:(19)	03kSM3	
E8	土師質	土鏝	02	A6	河道		3トレ	黒色粘土層	最大長:63	最大幅:16.5	最大厚:16	孔径:3 重量:14.46g	01bC100
E9	土師質	土鏝	03	L8	河道	AM29	NE	中層	最大長:49.5	最大幅:19.5	最大厚:15.5	重量:12.58g	03m2070
E10	陶器質	土鏝	02	A7	P02		南		最大長:37	最大幅:33	最大厚:27.5	孔径:6 重量:20.66g	03m1C80
E11	土師質	土鏝	02	A5	SK01				最大長:35	最大幅:24	最大厚:23.5	孔径:6.5 重量:17.11g	03b1C78
E12	土師質	土鏝	00	L2	SD08		27		最大長:31	胴径:35	孔径:6	重量:27.3g	01bC172
E13	土師質	土鏝	00	L2	SD08		トレンチ0		最大長:24	胴径:32	孔径:5	重量:20.1g	01bC171
E14	土師質	土鏝	00	L2	SD08		トレンチB		最大長:23	胴径:31	孔径:7	重量:15.6g	01bC170

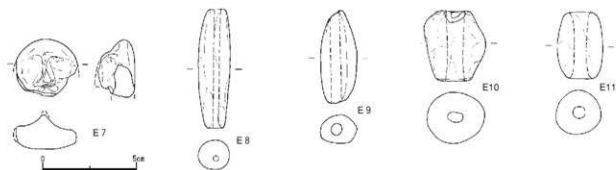
第9表 土製品一覧



第81図 製塩土器実測図



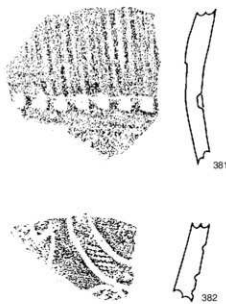
第82図 土製品実測図1



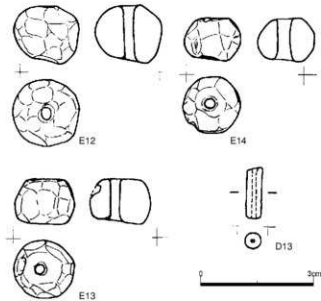
第83図 土製品実測図2

発掘番号	種別	器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	その他の法量				実測番号
									最大長	最大幅	最大厚	重量	
M1	銅芯鍍銀	銀環	00	L2	SD08		(古代道路)	袖尻段椀層	最大長：28	最大幅：27	最大厚：8	重量：22.05g	03b1SM3
M2	銅	銅鍍(環玉)	00	A5	SD03			上面					02s1SM7
M3	鉄	鉄鍍(覆殼)	02	A6	河道		1~2トレ層	黒色粘土層2	最大長：64	最大幅：51	最大厚：9	重量：9.96g	03b1SM1
M4	鉄	刀子	02	A6	河道		1~2トレ層	黒色粘土層2	最大長：241	最大幅：24	最大厚：4	重量：43.2g	03b1SM2

第10表 金属製品一覧



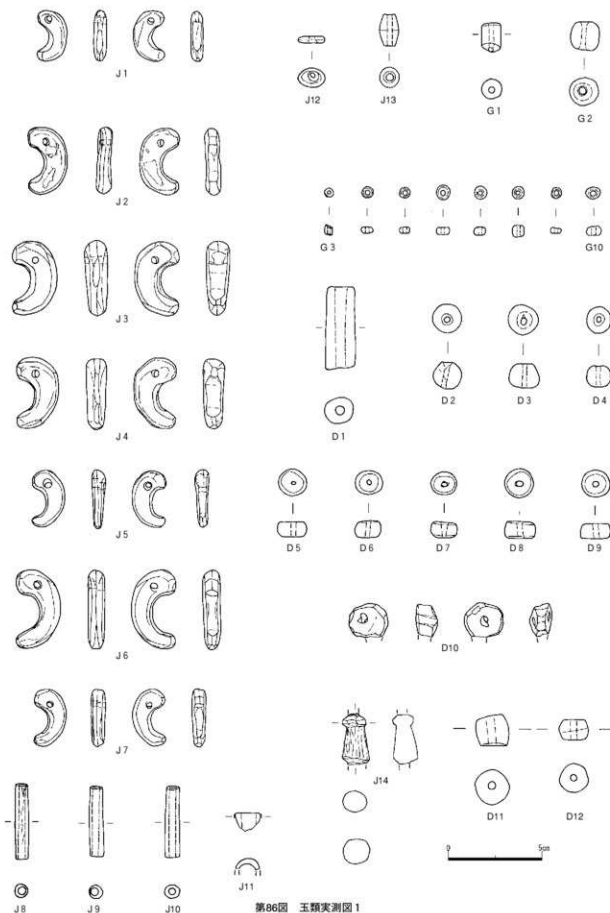
第84図 縄文土器実測図



第85図 土製品実測図3

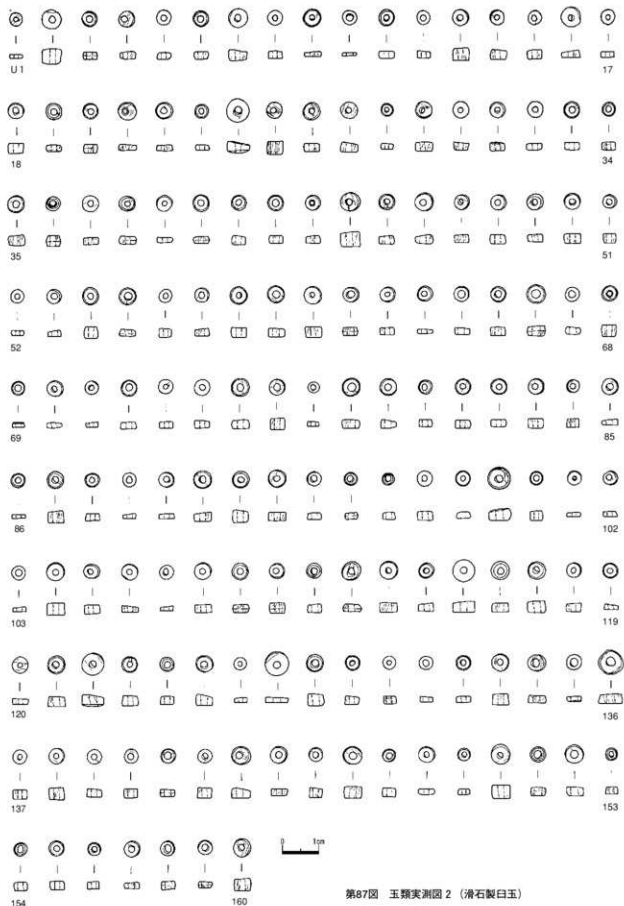
品目番号	種別	器種	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	直径mm	孔径mm	長さmm	重量g	色調	備考	実測地	実測番号
D1	土	管玉	00	L2	SD08		26		8.18	2.46	22.66	1.51			01y	191
D2	土	丸玉	00	L2	SD08		30		7.82	1.15	7.26	0.41			01y	192
D3	土	丸玉	00	L2	SD08		30		8.08	1.30	6.91	0.42			01y	193
D4	土	丸玉	00	L2	SD08		30		7.21	0.95	6.19	0.33			01y	194
D5	土	平玉	00	L2	SD08		27		7.46	0.99	4.43	0.27			01y	195
D6	土	平玉	00	L2	SD08		30		7.29	1.10	4.85	0.30			01y	196
D7	土	平玉	00	L2	SD08		31		7.14	1.82	4.71	0.24			01y	197
D8	土	平玉	00	L2	SD08		31		7.95	1.34	4.64	0.31			01y	198
D9	土	平玉	00	L2	SD08		31		8.00	1.33	4.12	0.28			01y	199
D10	土	勾玉	00	L2	SD08		28								01y	200
D11	土	平玉	03	L8	河遺			耕土	8.56	1.79	8.26	0.57	一部欠		03m2	139
D12	土	平玉	03	L8	河遺			耕土	7.83	1.29	5.20	0.32			03m2	140
D13	土器質	管玉	00	L2	SD08		28		9	2	27	1.90	外：灰黄褐色		01b	C173
G1	ガラス	管玉	00	L2	SD08		29		5.56	1.52	7.88	0.38	紺 長めの平玉かも		01y	181
G2	ガラス	丸玉	00	L2	SD08		25		8.22	1.61	7.57	0.75	紺		01y	182
G3	ガラス	小玉	00	L2	SD08		21		2.37	0.89	3.16	0.02	空色		01y	183
G4	ガラス	小玉	00	L2	SD08		21		3.11	1.27	1.86	0.03	紺		01y	184
G5	ガラス	小玉	00	L2	SD08		25		3.04	0.91	2.01	0.03	薄緑		01y	185
G6	ガラス	小玉	00	L2	SD08		25		3.82	1.00	1.89	0.04	紺		01y	186
G7	ガラス	小玉	00	L2	SD08		26		3.46	0.95	2.52	0.04	紺		01y	187
G8	ガラス	小玉	00	L2	SD08		30		3.49	0.91	3.29	0.06	紺		01y	188
G9	ガラス	小玉	00	L2	SD08		30		3.07	1.33	1.40	0.01	空色		01y	189
J10	ガラス	小玉	00	L2	SD08		31		4.00	1.24	2.54	0.05	薄緑		01y	190
J11	漂石	勾玉	00	L1	P03				5.16	2.07	3.64	0.51	緑灰		01y	168
J2	漂石	勾玉	00	L2	SD08		16		6.71	1.83	4.15	1.05	黒		01y	169
J3	漂石	勾玉	00	L2	SD08		21		7.89	1.96	6.33	2.00	緑灰		01y	170
J4	漂石	勾玉	00	L2	SD08		25		7.20	2.20	5.73	1.62	緑灰		01y	171
J5	漂石	勾玉	00	L2	SD08		25		6.22	2.49	3.75	0.56	緑		01y	172
J6	漂石	勾玉	00	L2	SD08		25		7.45	2.20	5.05	1.54	緑		01y	173
J7	漂石	勾玉	00	L2	SD08		26		6.14	2.06	3.95	0.71	緑		01y	174
J8	漂石	管玉	00	L2	SD08		20		4.08	2.07	19.84	0.55			01y	175
J9	漂石	管玉	00	L2	SD08		21		4.12	2.04	18.56	0.55			01y	176
J10	漂石	管玉	00	L2	SD08		30		4.03	1.70	18.91	0.53			01y	177
J11	漂石	管玉	00	L2	SD08		21						破片		01y	178
J12	漂石	眞形玉	00	L2	SD08		25		7.09	1.65	2.11	0.12	楕円形の小玉		01y	179
J13	漂石	眞形玉	00	L2	SD08		25		5.49	1.96	8.69	0.34			01y	180
J14	骨か	不明品	00	L2	SD08		21								01y	201
J15	漂石	管玉	03	L8	河遺	AM30	NW	下層2	9.4	3.0	2.7	4.36			03k	SM1

第11表 玉類一覧

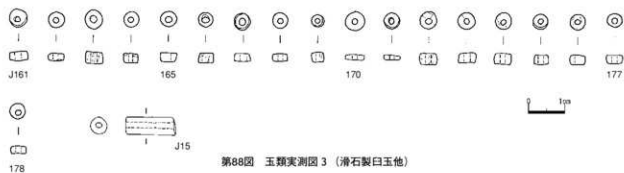


第86図 玉類実測図1

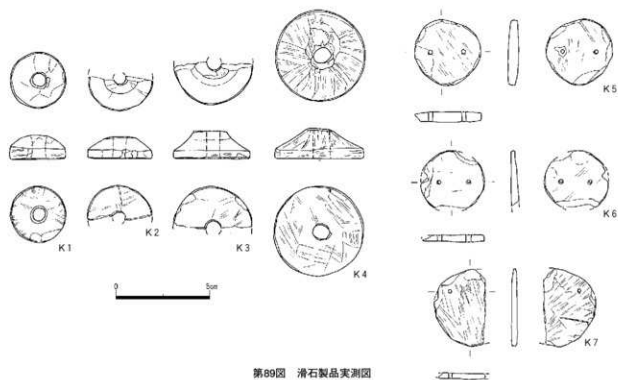




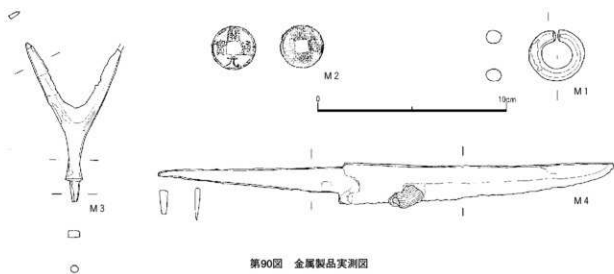
第87図 玉類実測図2 (滑石製白玉)



第88図 玉類実測図3 (滑石製白玉他)



第89図 滑石製品実測図



第90図 金属製品実測図



第4節 乙地区の調査

材料	種別	品名	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	最大径	最大厚	孔径	重量g	実測番号
U147	滑石	白土	00	L2	SD08		30	3.62	1.92	2.4	0.05	01y147	
U148	滑石	白土	00	L2	SD08		30	4.3	1.73	1.76	0.05	01y148	
U149	滑石	白土	00	L2	SD06		30	3.59	1.5	1.54	0.04	01y149	
U150	滑石	白土	00	L2	SD06		30	5.08	1.44	3.81	0.15	01y150	
U151	滑石	白土	00	L2	SD06		30	4.1	2.05	2.24	0.06	01y151	
U152	滑石	白土	00	L2	SD06		30	5.11	2.31	2.55	0.1	01y152	
U153	滑石	白土	00	L2	SD06		30	3.34	1.61	2.04	0.04	01y153	
U154	滑石	白土	00	L2	SD06		30	3.5	2.08	2.35	0.04	01y154	
U155	滑石	白土	00	L2	SD06		30	4.15	1.83	2.37	0.06	01y155	
U156	滑石	白土	00	L2	SD06		30	3.62	1.65	2.22	0.05	01y156	
U157	滑石	白土	00	L2	SD06		30	4.26	1.8	1.75	0.06	01y157	
U158	滑石	白土	00	L2	SD06		31	4.05	2.35	2.36	0.06	01y158	
U159	滑石	白土	00	L2	SD06		31	3.95	1.92	1.91	0.04	01y159	
U160	滑石	白土	00	L2	SD06		31	4.89	1.66	3.43	0.15	01y160	
U161	滑石	白土	03	L6	河溝	AM03 SW	下層	5.2	1.46	2.88	0.1	03n01	
U162	滑石	白土	03	L6	河溝	AM03 NW	下層	4.65	1.44	2.19	0.07	03n02	
U163	滑石	白土	03	L6	河溝	AM03 NW	下層	4.95	1.72	3.28	0.13	03n03	
U164	滑石	白土	03	L6	河溝	AM03 NW	下層	4.29	1.36	2.72	0.07	03n04	

材料	種別	品名	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	最大径	最大厚	孔径	重量g	実測番号	
U165	滑石	白土	03	L8	河溝	AM03 NW	下層	4.11	1.26	2.82	0.1	03n05		
U166	滑石	白土	03	L8	河溝	AM03 NW	下層	4.4	1.58	2.29	0.07	03n06		
U167	滑石	白土	03	L8	河溝	AM03 NW	下層	4.18	1.55	2.82	0.08	03n07		
U168	滑石	白土	03	L8	河溝	AM03 NW	下層	4.45	1.43	2.09	0.07	03n08		
U169	滑石	白土	03	L8	河溝	AM03 NW	下層	5.16	1.47	1.59	0.04	03n09		
U170	滑石	白土	03	L8	河溝	AM03 NW	下層	4.23	1.19	1.64	0.04	03n10		
U171	滑石	白土	03	L8	河溝	AM03 NW	下層	3.45	1.3	2.44	0.06	03n11		
U172	滑石	白土	03	L8	河溝	AM03 NW	下層	4.86	1.41	3.17	0.13	03n12		
U173	滑石	白土	03	L8	河溝	AM03 NW	下層	4.86	1.41	3.11	0.12	03n13		
U174	滑石	白土	03	L8	河溝	AM03 NW	下層	4.85	1.67	2.89	0.12	03n14		
U175	滑石	白土	03	L8	河溝	AM03 NW	下層	4.19	1.42	2.84	0.1	03n15		
U176	滑石	白土	03	L8	河溝	AM03 NW	下層	4.41	1.37	2.38	0.08	03n16		
U177	滑石	白土	03	L8	河溝	AM03 NW	下層	4.28	1.38	2.5	0.07	03n17		
U178	滑石	白土	03	L8	河溝	AM03 NW	下層	4.36	1.55	2.28	0.06	03n18		
	滑石	白土	00	L2	SD06			全体の平均	4.324	1.473	2.394	0.068	456.8	
	滑石	白土	00	L2	SD06			実測分の平均	4.373	1.738	2.367	0.077	160.8	
	滑石	白土	03	L6	河溝			全体の平均	4.367	1.41	2.505	0.079	27.8	
	滑石	白土	03	L6	河溝			実測分の平均	4.493	1.443	2.552	0.084	18.8	

第12表-2 白土一覧 2

材料	種別	品名	出土年	地区	遺構	グリッド	小割	層位	最大径	最大厚	孔径	重量g	実測番号
K1	滑石	紡錘率	00	L1	SD11				29.52	12.87	8.73	16.11	01y167
K2	滑石	紡錘率	00	L2	SD08				33.83	11.32	6.73	9.80+	01y165
K3	滑石	紡錘率	00	L2	SD08		22		41.32	15.07	7.63	15.96+	01y164
K4	滑石	紡錘率	00	L2	SD08		27		47.60	15.94	8.94	41.43	01y166
K5	滑石	双孔円盤	00	L2	SD08		26		35.05	5.93	2.45	10.93	01y161
K6	滑石	双孔円盤	00	L2南	SD01A				33.71	4.23	2.77	6.19	01y163
K7	滑石	双孔円盤	00	L2南	SD01A				45.10	3.33	1.91	6.19+	01y162

第13表 滑石製品一覧

## 第4章 小 結

以上のように、調査の結果多くの遺構遺物が検出された。が、これらは一連の調査で得られた資料のうちほんの一部に過ぎず、次分冊以降ではさらにこの十倍近い量の資料が報告されるものとみられる。

それらを含め、調査地における集落の展開については、現場段階で以下のような見通しを持った。  
(財)石川県埋蔵文化財センター「大野郷を掘る」2003年、ほか)

- 弥生時代中期を初現とし、比較的散漫な展開・・・・・・・・・・第1段階（～4世紀）
- 古墳時代前期末における大溝の開削とその西側への集住・・・・・・・・第2段階（5世紀～6世紀）
- 運河と倉庫群の造営と維持・・・・・・・・・・第3段階（8世紀～9世紀）
- 条里景観中に散居・・・・・・・・・・第4段階（11～14世紀）
- 北西部の一角（今回報告域外）への集住・・・・・・・・・・第5段階（15～16世紀）

未だ十分に調査資料の全体を把握しきれない上に、近傍ではさらに発掘調査が実施され知見が増大しているため上記の見通しには再検討の余地が大きいのだが、今回筆者に余力がなく見直しが出来なかった。今後、刊行予定の報告の中で再検討されれば、幸いかと思う。

さて、今回報告の建物や顕著な出土遺物の上記による位置付けは

- 第1段階：SH001・06、SB101・102・103
- 第2段階：SH03・04・05、SB201～204、多量の白玉・玉類・滑石製品
- 第3段階：SB301・302、墨書土器
- 第4段階：SB401～410・424、呪符木簡

となろう。遺構の集中域であるL1区東部からL2区を経てL3区に至る範囲は、主に第2段階の居住痕跡と判断している。今回の調査範囲は当該期の集落の中心部を横断している可能性が高い。大溝にはL7区SD01・02、L1区SD10が該当し、河川とみたL2区SD08並びにL8区河道もまた、第2段階に人工掘削されていた大溝が氾濫時に姿を変えたものであった可能性を考慮して良いとみている。これら大溝群は一時に開削されたものではなく、数回にわたって付け替えられたものであろう。第2段階における当遺跡群での居住活動の活発化は、本遺跡群の北東に位置した第1段階の有力集落である畝田遺跡（原営住宅地点）の衰退と呼応しているようであり、興味深い。第3段階の運河にはL2区SD08及びL8区河道が該当するが、その両岸に展開する当該期の遺構は今回報告の調査区にはむしろ少なく、墨書土器や字句の集中も認められないことから、集落縁辺部の始まりにあたる付近かと思われる。第4段階ではL2区・L5区・A7区・A5区で正方位に近い溝が検出されている。今後報告される地区でも多くの同様の溝が検出されており、広域に及ぶ条里溝網の復元が可能視される。前章で構造を詳述したL1区SE02は第5段階の居住域を外れた箇所を設置されたものとなる。上述のような調査区の通時的理解がその性格解明の一助になれば幸いである。

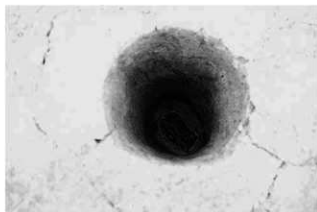
調査資料が膨大なため、報告に際して遺漏や誤認、体裁や記述の不備・不統一を怖れるものであるが、今後も調査結果を地道に報告していくものとする。



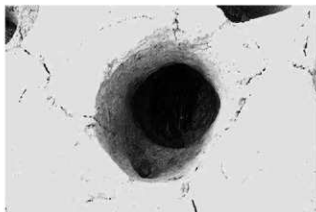
完掘状況(西から)



SB204検出状況



SB204南東柱穴(P90)礎板検出状況



SB204北東柱穴(P91)礎板検出状況



SK01土層断面



SK04遺物出土状況



SK03



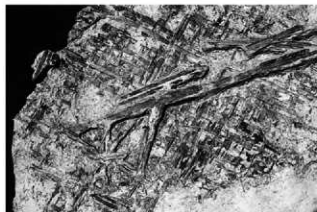
SK03遺物出土状況



SK08編物検出状況



SK08土層断面



SK08編物検出状況細部



SX02土層断面



SX02遺物出土状況



SX03



SE01土層断面



SE02組物検出状況



SE02土層断面



SE02組物検出状況細部





SD10土層断面



SD10第2層遺物出土状況



SD10第2層遺物出土状況



SD10第2層遺物出土状況



SD10第4層遺物出土状況



完掘状況(東から)



SE01



SE02土層断面



SE03



SE04土層断面



SE04遺物出土状況



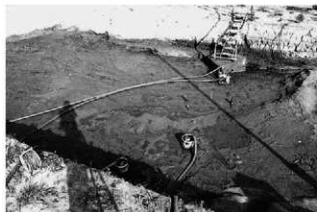
SD05



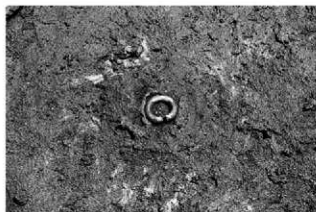
SD08



SD08土層断面



SD08



SD08遺物出土状況



SD08遺物出土状況



完掘状況 (南から)



完掘状況 (西から)



SD01遺物出土状況



L3区SE04付近



SB102検出状況



SB101検出状況



SB101北溝東1柱穴



SB101南溝西2柱穴



SB101南溝西3柱穴



SB401礎板検出状況 (P21)



SK02遺物出土状況



SK03遺物出土状況



SK04土層断面



SK04遺物出土状況



SK07土層断面



SK08



SK08土層断面



SK09



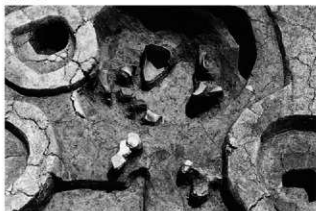
SK09



SK09土層断面



SK12



SK14・15遺物出土状況



SK16土層断面



SK21



SK21遺物出土状況



SE01



SE04



SE04井戸側検出状況



SE04掘削作業



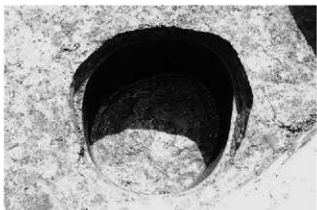
SE05上層 (SX01) 遺物出土状況



SE05土層断面



SE06



SE06井戸側検出状況



2000年度L4区完掘状況 (北西から)



L5区完掘状況 (東から)



L5区完掘状況 (南から)



SB408検出状況





SK01遺物出土状況



SK01遺物出土状況細部



SE01土層断面



SE01井戸掘検出状況



SE02土層断面



SE03土層断面



SE03遺物出土状況



SD04土層断面



完掘状況 (西から)



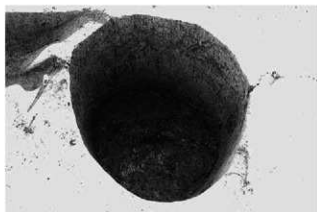
SB409検出状況



SE01



SE01土層断面



SE02



SE02土層断面



SE04土層断面



SD01土層断面



SD03土層断面



北壁土層断面



河道



L7区SD01



SD01土層断面



SD01遺物出土状況



SD01遺物出土状況



SD02



SD02遺物出土状況



SD02土層断面



SD02樹根検出状況



SD03



SD03土層断面



A5区完掘状況(西から)



完掘状況(東から)



SB424検出状況



SD01東部土層断面



SD01西部土層断面



2002年度A5区完掘状況(南西から)



遺構掘削作業



SK01



SK01土層断面



河道土層断面



SD01土層断面



完掘状況 (北西から)



完掘状況 (西から)



完掘状況 (南から)



東部遺構検出状況



河道トレンチ 2



P区完掘状況 (南から)



2トレンチ



2トレンチ土層断面



北部完掘状況(東から)



北部完掘状況(西から)



SD01・02



SD02土層断面



SD01土層断面



SD03(左)・SD04(右)土層断面



中部完掘状況(西から)



中部完掘状況(東から)



南部遺構検出状況



南部完掘状況 (南西から)



SD05土層断面



SD07土層断面



SK03



北東部完掘状況 (北から)



2004年度L4区完掘状況 (西から)



SD01土層断面





Z1区完掘状況(北西から)



完掘状況(南東から)



Z2区完掘状況(南東から)



完掘状況(北西から)



L8区完掘状況(北から)



河道



河道土層断面



東部遺構検出状況



SK03 (左) と SK02 (右)



SK03遺物出土状況



P01遺物出土状況



SX01遺物出土状況



SX01遺物出土状況



SH01



SH02



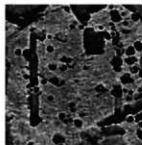
SH03



SH04·05



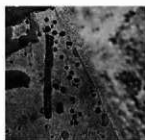
SH06



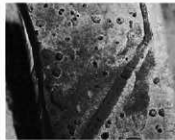
SB101



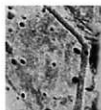
SB102



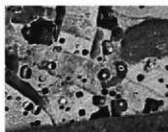
SB103



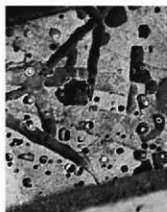
SB202



SB201



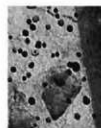
SB203



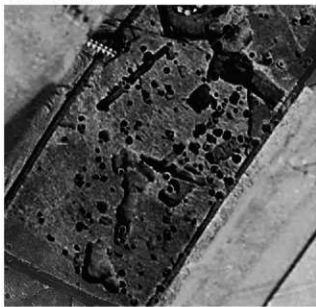
SB301



SB302



SB204



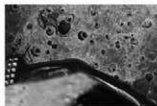
SB401・402



SB403



SB405



SB406



SB404



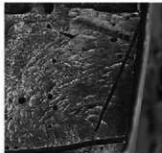
SB407



SB408



SB409



SB410



SB424

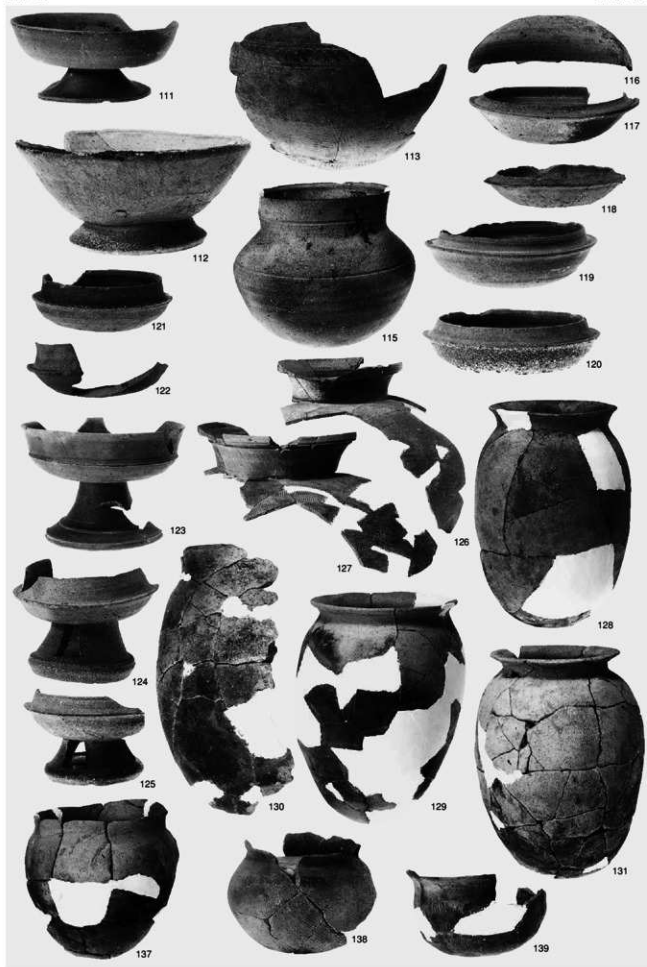


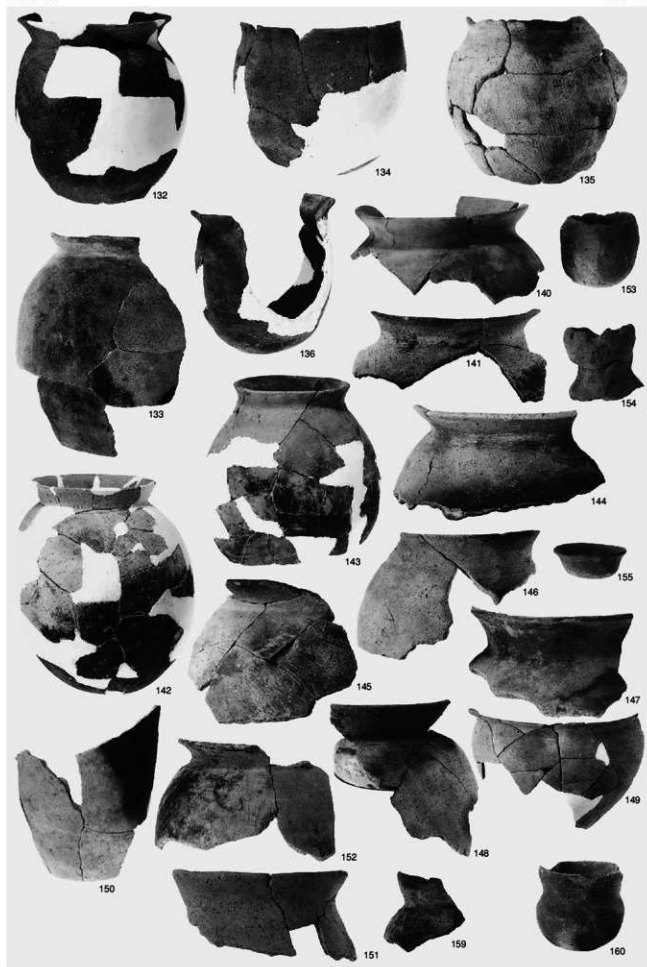




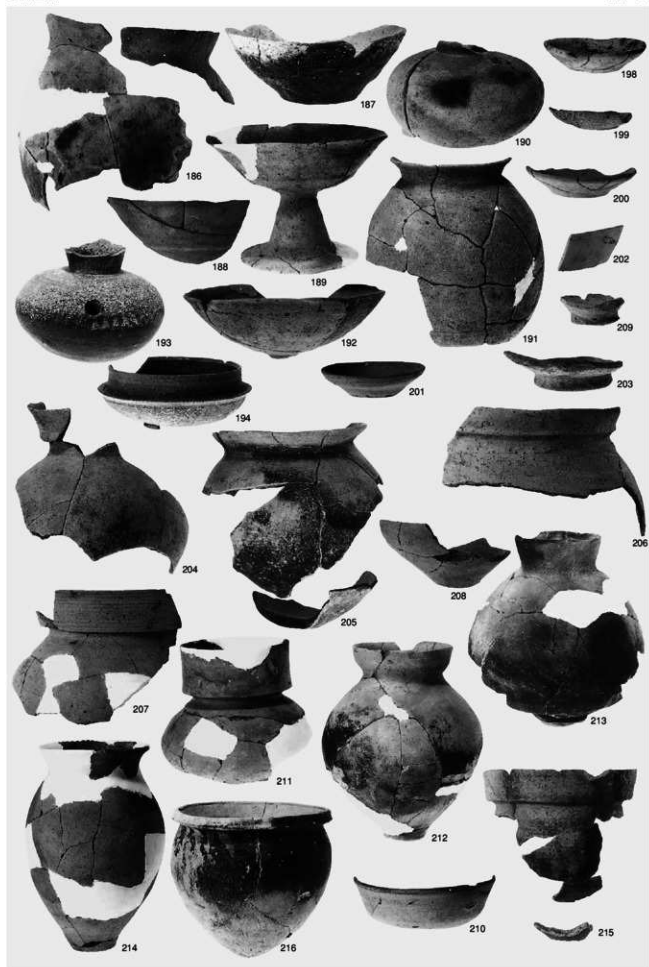






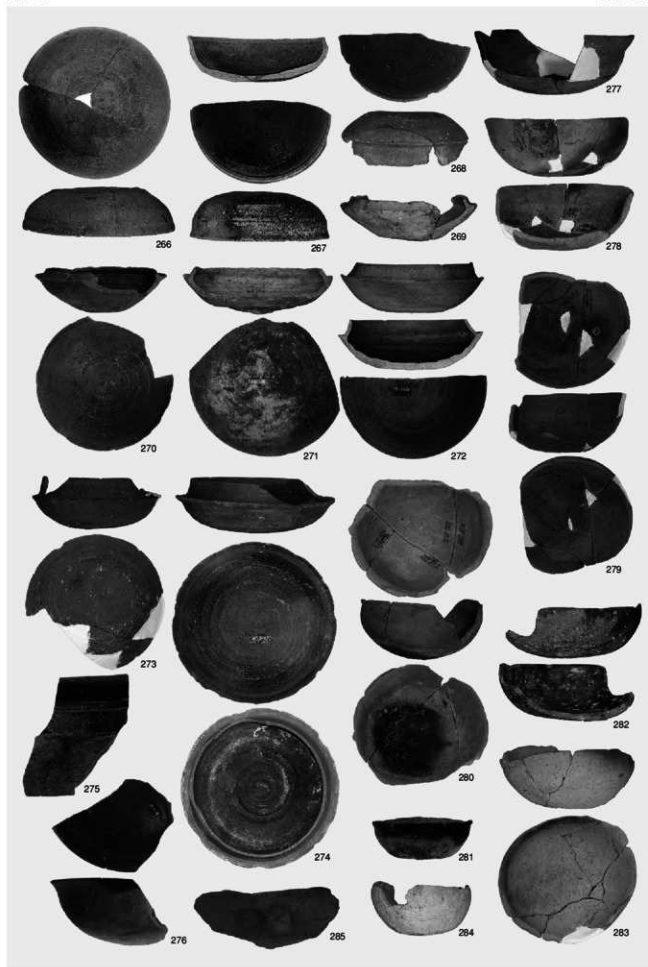


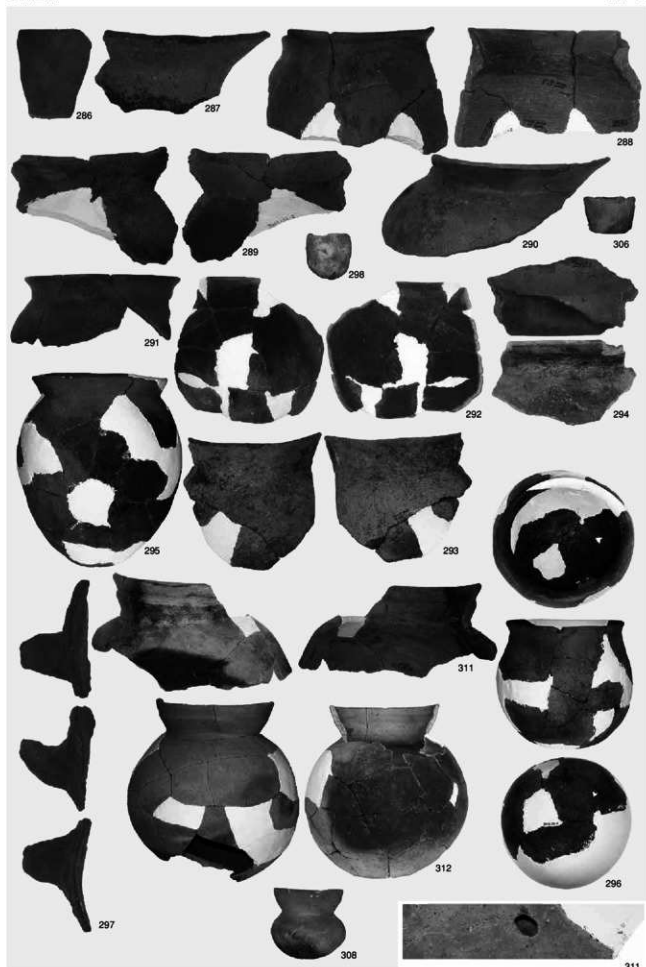




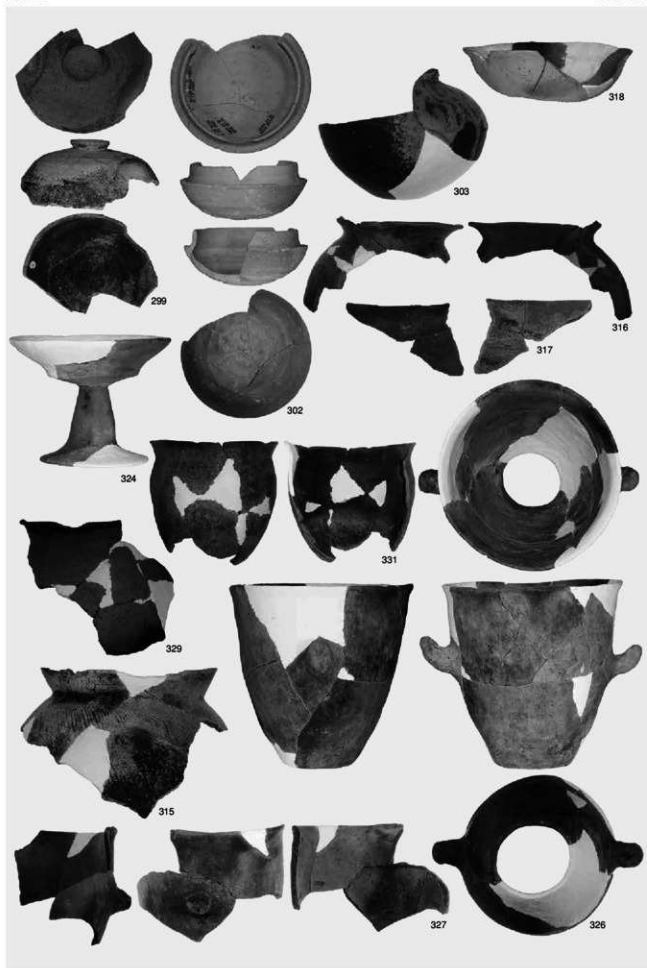


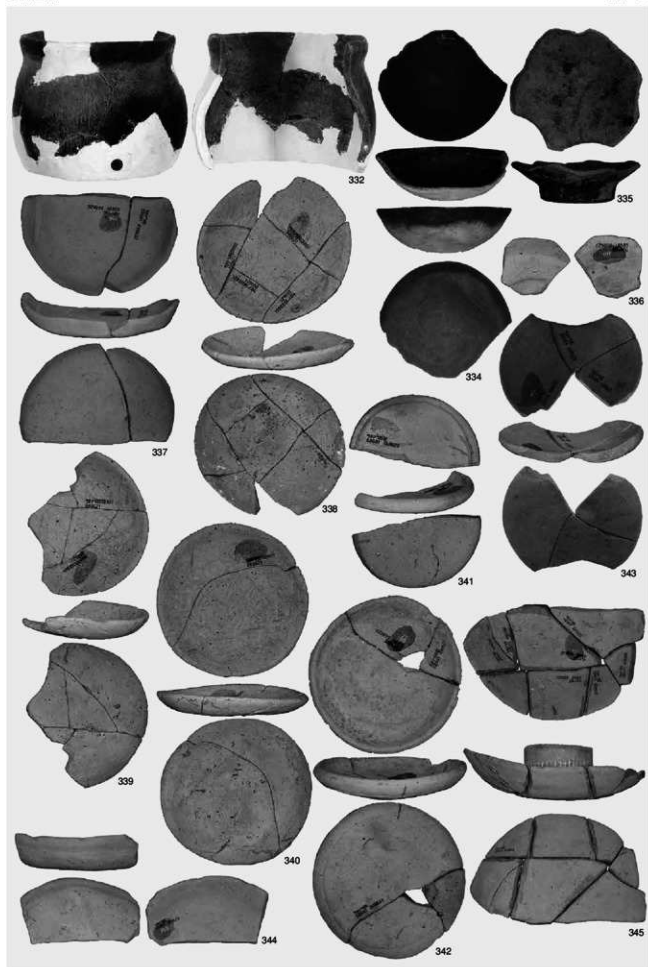


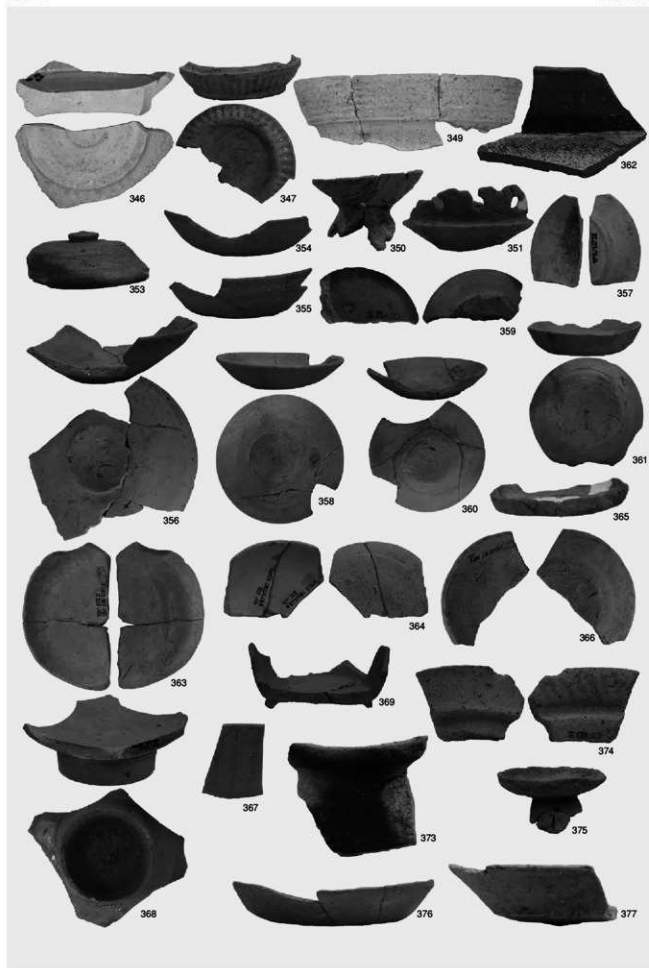


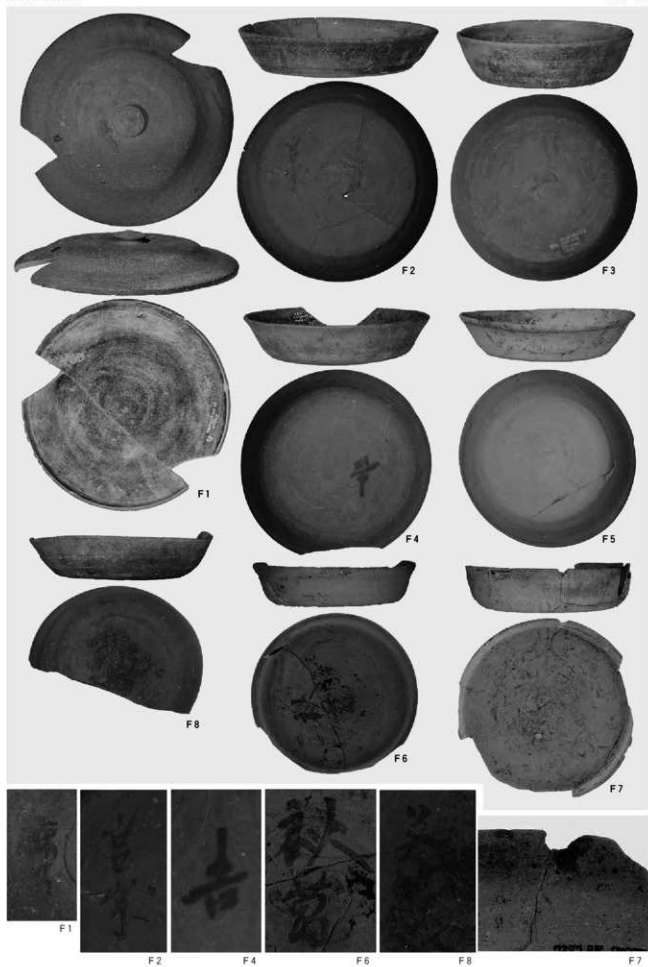


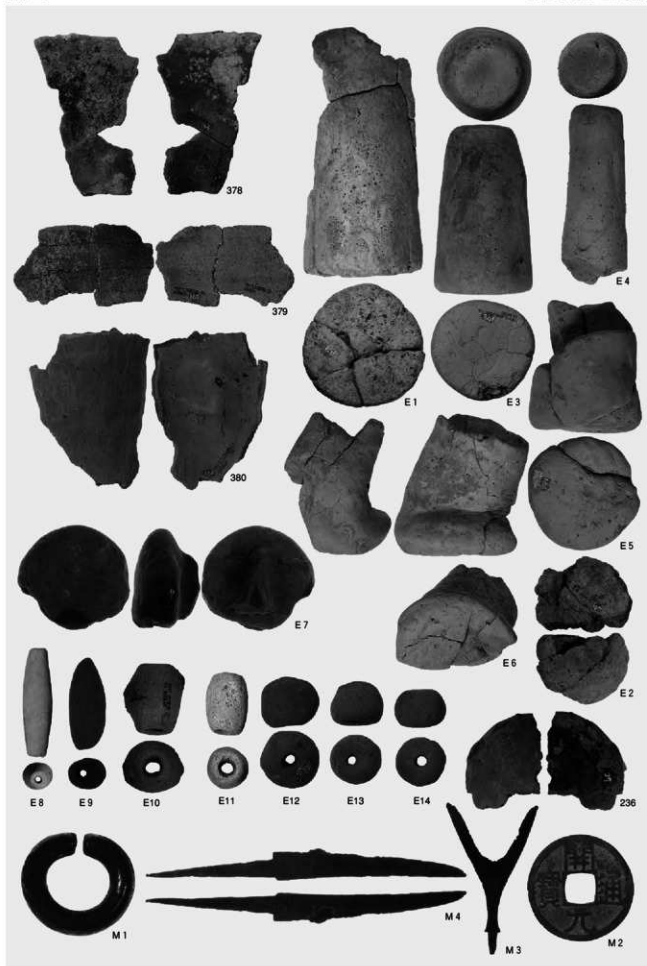


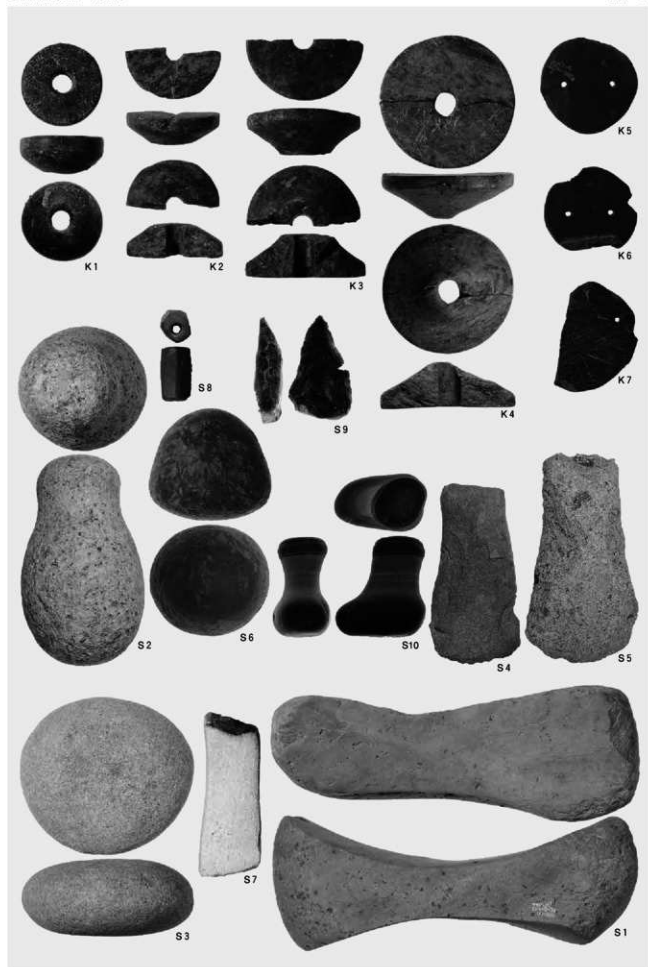


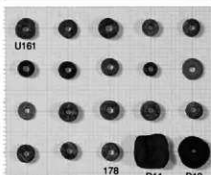
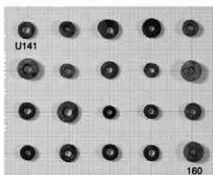
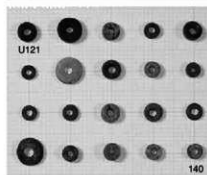
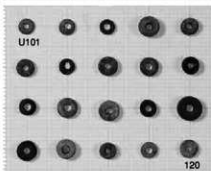
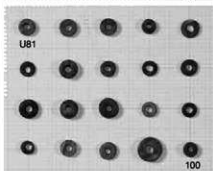
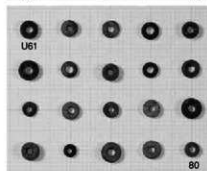
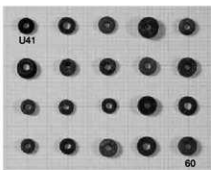
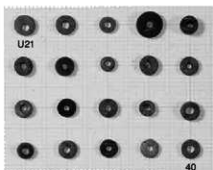
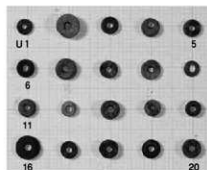
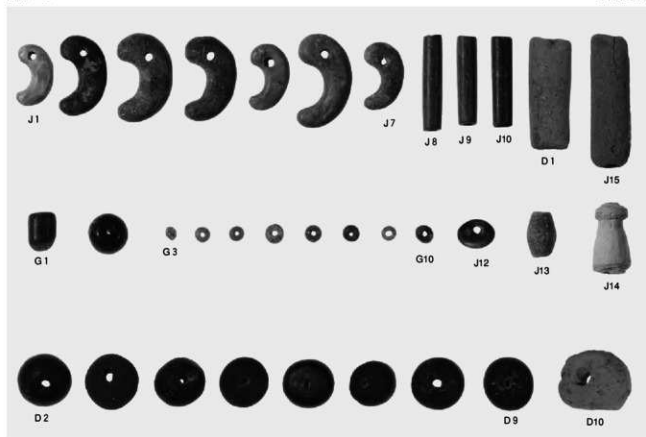


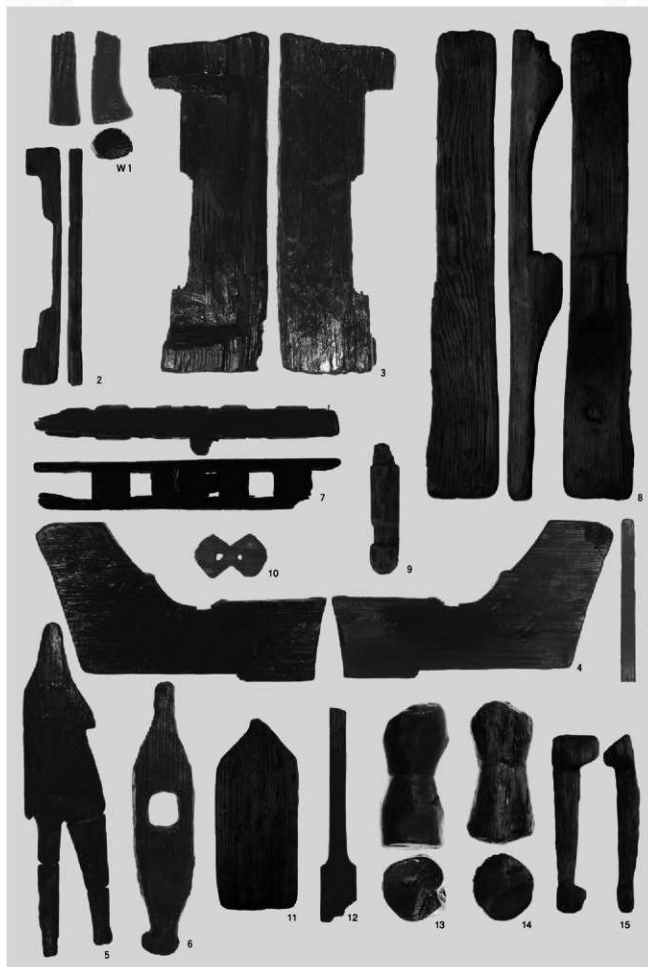




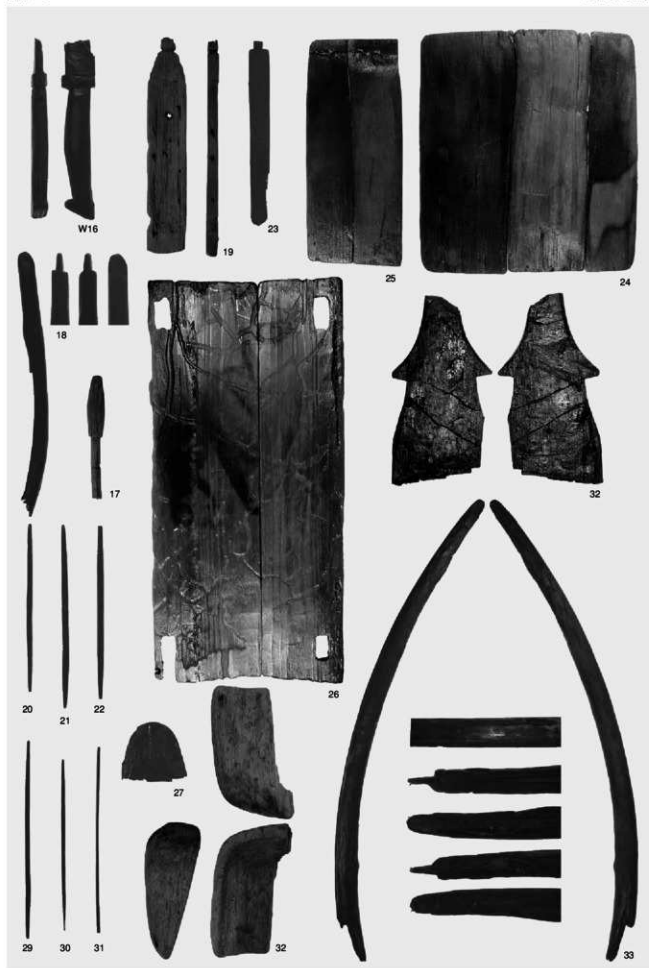


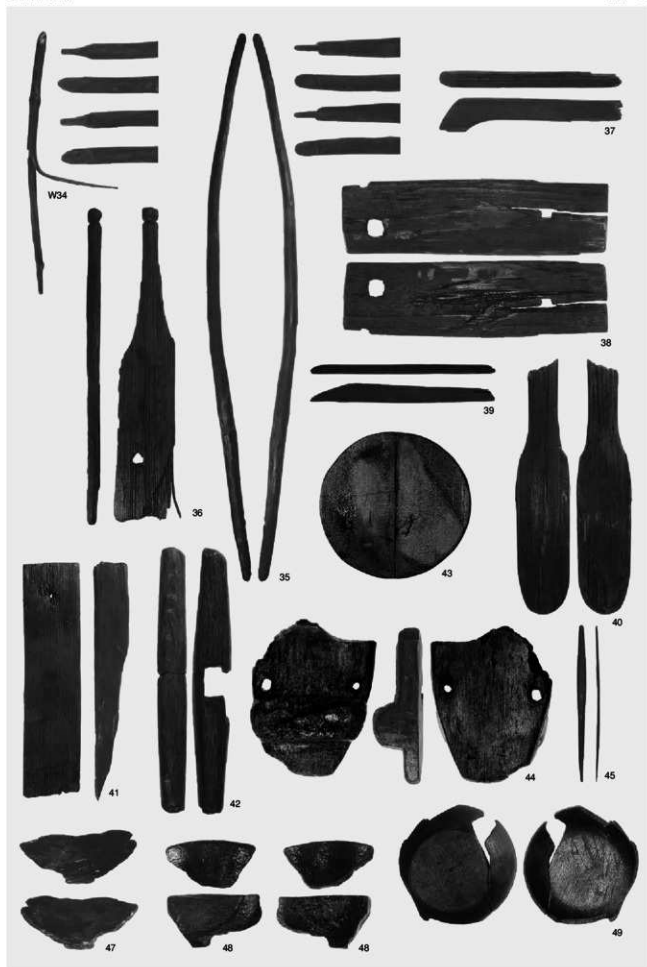


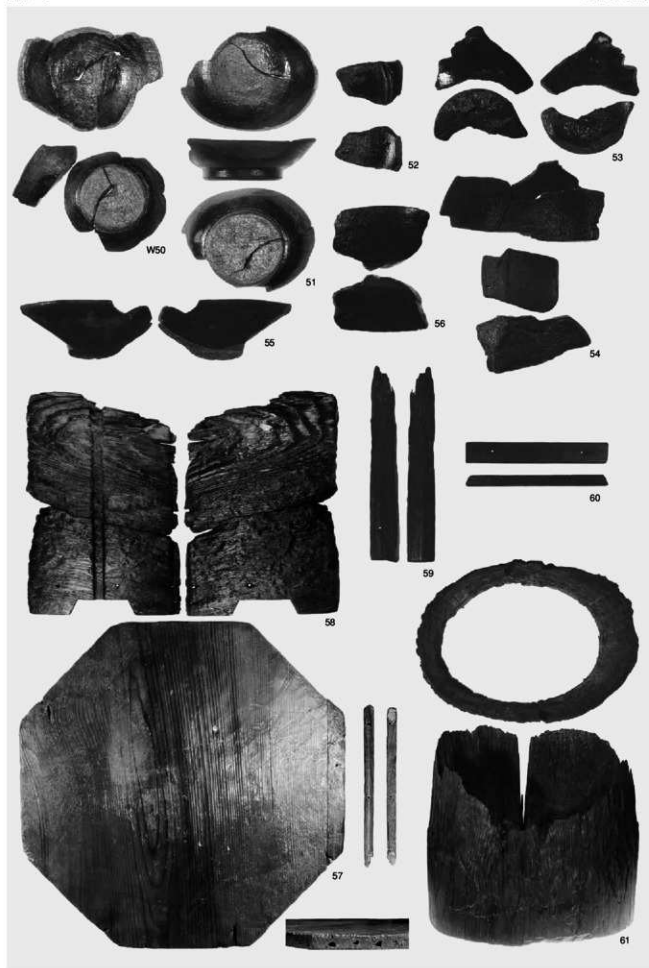


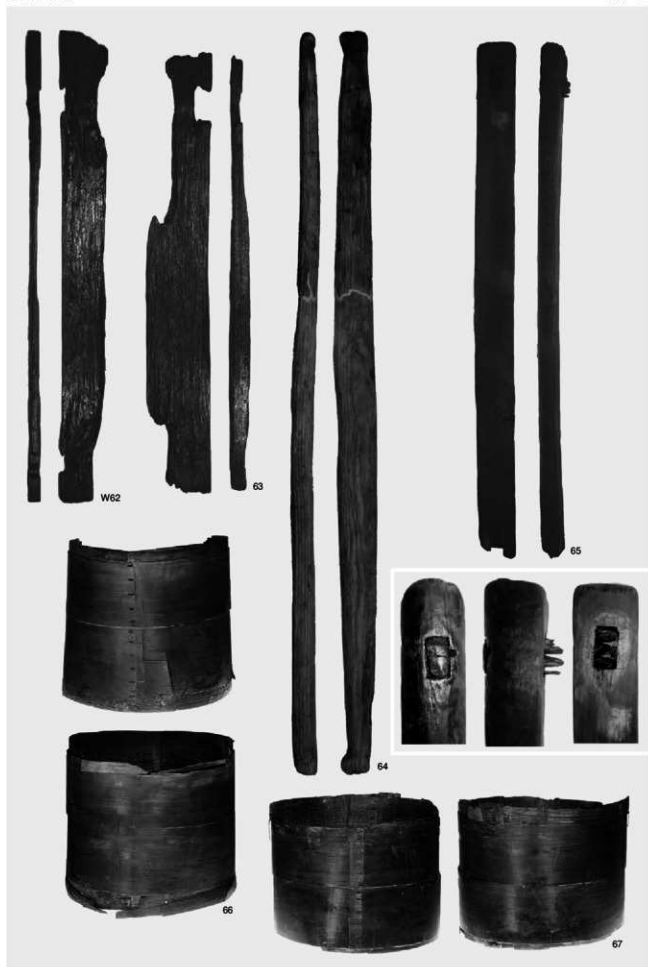














W68  
(2段目)



L 3区  
SE06

(1段目)



(3段目)



(4段目)

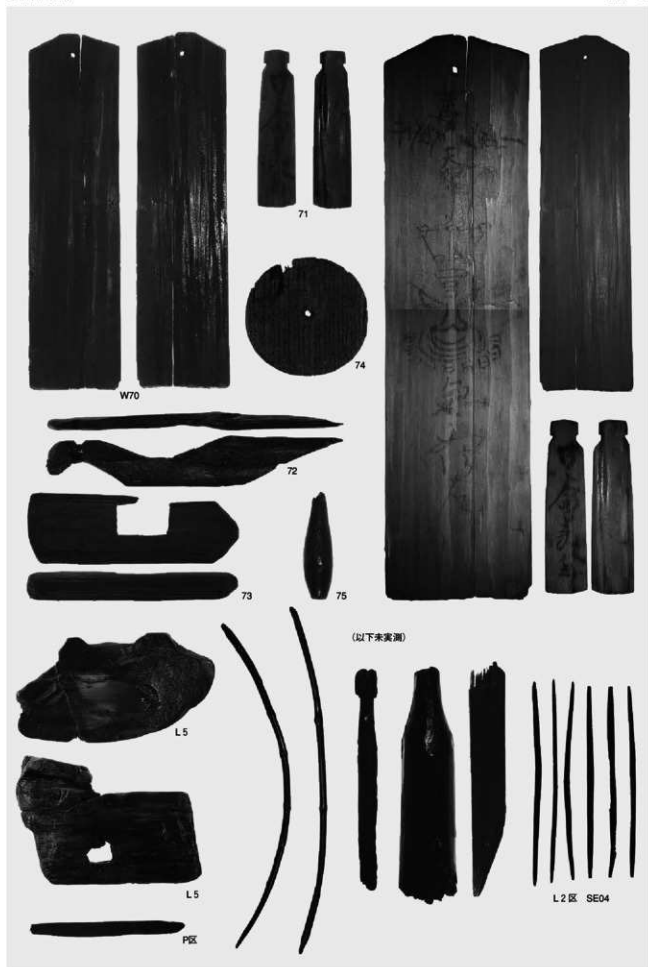
L 3区SE04



69  
(3段目)



(2段目)



## 報 告 書 抄 録

ふりがな	うねだにしいせきぐん							
書名	金沢市畝田西遺跡群Ⅱ							
副書名	金沢西部第二土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	4							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	浜崎悟司 伊藤雅文							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL(076)229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
畝田・寺中遺跡	石川県金沢市	17201	01260	36度	136度	19990415	48,520㎡	金沢西部 第二土地 区画整理
畝田遺跡	畝田西3丁目		01261	35分	36分	～		
畝田大徳川遺跡	地内		01262	50秒	20秒	20030903		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
畝田・寺中遺跡 畝田遺跡 畝田大徳川遺跡	散布地	縄文時代			土器・石器・土偶			
	散布地	弥生時代	竪穴系建物		土器・石器			
	集落跡	古墳時代	竪穴系建物・掘立柱建物・土坑・溝・河道		土器・石器・木製品・玉類・滑石製品・金属製品(銀環)		古墳時代中後期の居住域を検出	
	集落跡	古代	掘立柱建物・河道		土器・墨書土器			
	集落跡	中近世	掘立柱建物・井戸・溝		土器・陶磁器・瓦葺木簡			
要約	沖積地に立地する複合遺跡である。本巻には調査対象範囲の南部・東部域の調査結果を所収した。							

### 金沢市 畝田西遺跡群Ⅱ

発行日 平成17(2005)年3月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市糠月1丁目1番地

電話 076-225-1842 (文化財課)

財団法人石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 山越